

靈界物語 第二八卷 海洋萬里 卯の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二八卷』愛善世界社

1998(平成10)年11月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序歌じよか

總説歌そうせつか

第一篇 高砂の島たかさごしま

第一章 カールス王わう（八〇一）

第二章 無理槍むりやり（八〇二）

第三章 玉藻山たまもやま〔八〇三〕

第四章 淡溪たんけいの流ながれ〔八〇四〕

第五章 難ありがた有めい迷惑わく〔八〇五〕

第六章 麻あさの紊みだれ〔八〇六〕

第二篇 暗黒あんこくの叫さけび

第七章 無痛むつうの腹はら〔八〇七〕

第八章 混亂こんらん戦せん〔八〇八〕

第九章 當推量あてすゐりやう〔八〇九〕

第一〇章 纏もつれ髪がみ〔八一〇〕

第十一章 木茄子きなすび〔八一〕

第一二章 サワラの都みやこ〔八一二〕

第三篇 光明の魁くわうみやう さきがけ

第十三章 唾の對面おし たいめん〔八一三〕

第十四章 二男三女になんさんによ〔八一四〕

第十五章 願望成就くわんまうじやうじゆ〔八一五〕

第十六章 盲龜の浮木まうき ぶぼく〔八一六〕

第十七章 誠の告白まこと こくはく〔八一七〕

第十八章 天下泰平てんかたいへい〔八一七〕

第四篇 南米探險なんべい たんけん

第十九章 高島丸たかしままる〔八一九〕

第二十章 鉦理屈なたりくつ〔八二〇〕

第二十一章 喰へぬ女く をんな〔八二一〕

第二章

高砂上陸（八二二）

跋 暗闇

（
）
（
）
（
）
（
）
（
）
（
）
（
）
（
）

序歌

月光いよいよ世に出でて
精神界の王国は

東の國に開かれぬ
真理の太陽晃々と

輝き渡り永遠に
盡きぬ生命の眞清水は

下津岩根に溢れつつ
慈愛の雨は降りそそぐ

莊嚴無比の光明は
世人の身魂を照らすべく

現はれ坐せり人々よ
一日も早く目を覺ませ

四方の國より聞え來る
靈の清水に渴く人
瑞の御魂に潤へよ。
誠の神の聲を聞け

大正十一年八月十日（舊六月十八日） 於龍宮館

總説歌

三千世界の人類や
救ひの舟を差向けて
神幽現の救世主
きらめく如く現はれぬ
誠の智慧を胎藏し
權威と智慧に超越し
禽獸蟲魚に至る迄
誠の道を教へ行く
太白星の東天に
一切萬事更世の
世間の所在智者學者
迫害苦痛を一身に

甘受し世界を助け行く
歡喜と平和を永遠に

森羅萬象に供給し
至幸至福の神惠の

精神上の王國を
斯土の上に建設し

無限の仁慈を經となし
無窮の知識を緯として

小人弱者の耳に克く
理解し易き明教を

徹底的に唱導し
如何なる惡魔も言靈の

威力に言向け和しつつ
寄せ來る悲哀と災厄を

少しも心に掛けずして
所信を飽く迄貫徹し

裁、制、斷、割、道極め
神人和合の境に立ち

惡魔の敵に遇ふ毎に
益々心は堅實に

信仰熱度を日に加へ
三千世界に共通の

眞の文明を完成し
世界雑多の宗教や

凡ての教義を統一し
崇高至上の道德を

不言實行體現し
暗黒無道の社會をば

神かみの教をしへと神しん力りきに
照破せうはし盡つくし天津あまつ日ひの
光ひかりを四よ方もに輝かがやかす
マイトレーヤしんげふの神業しんげふに
奉仕ほうしするこそ世よを澄すます
大真人だいしんじんの神務しんむなれ
ア、惟かむながらかむながら神々々々
御靈みたま幸さちはひましませよ。

大正十一年八月十日（舊六月十八日） 於龍宮館

第一篇 高砂の島

第一章 カールス王（八〇一）

千早振る遠き神代の其昔 國治立大神は

豊葦原の瑞穂國を 堅磐常磐に治めむと

心を盡し身を盡し 綾と錦の機を織る

其絲口の龍世姫 永遠に鎮まる此島は

神の御稜威も高砂島の 胞衣となり出でし臺灣島

清く正しき眞道彦 神の子孫は今も猶

榮え榮えて新高の 山のあなたの神聖地

清鮮の波を湛へし日月潭の 湖面を見下ろす玉藻山

くにはるたちのおほかみ
國治立大神や 瑞の御靈の神靈を
齋き祀りて高砂の 島の老若男女をば
あななひけつ 三五教の大道に 導き救ふぞ健氣なる。

ぜんたうだいいち 全島第一の大高山、新高山の北麓に花森彦命の子孫、カールス王の鎮まる都が
ふる 古くより建設され居たり。

はなもりひこのみこと 花森彦命の子にアークス、エーリスの二人があつた。兄のアークスは花森彦の
あと おそ 後を襲うて國王となり、アークス姫と夫婦の間にカールス王を生んだ。弟のエー
りす夫婦の間に生れたるをヤーチン姫と云ふ。ヤーチン姫は性質温厚篤實にして、
よさしよくしう 容色衆に優れ、高砂島の花と謳はれ、將來はカールス王の後たるべしと自らも信
じ、國人も之を認めて居た。カールス王も亦ヤーチン姫の吾妃となるべき者たる
ことを、堅く心中に期待して居た。

とき 時に高國別、玉手姫の間に生れたるサアルボース、ホーロケースの二人の、心
よ 善からざる兄弟ありき。玉手姫は惡神の化身たりし事は、「靈主體從」寅の巻の

物語に於て示したる通りである。其水火より生れたるサルボース、ホーロケースの二人の心魂は恰も猛獸毒蛇の如く、アークス王の部下に仕へて暴政を全島に布き、民の怨恨を買ひ、國家は益々攪亂紛糾して收拾す可らざる情勢となり居たり。

然るにアークス王は或時新高山の淡溪に清遊を試みたる際、玉手姫の怨靈に憑依されて、誤つて溪流に陥り上天した。茲に於て其子カールス王をして其後を繼がしむる事となつた。就てはエーリスの娘ヤーチン姫を容れて妃となさむと、數多の群臣は全力を盡して奔走し居たりける。

然るにアークス王の上天後はサルボース、ホーロケースの勢益々烈しく、あわよくばカールス王を排除し自ら其位置に直らむと、計畫して居た。サルボース、ホーロケースの勢力は旭日昇天の如く、カールス王を殆ど眼中に置かざるの概があつた。されど天使花森彦命の子孫たるカールス王を排除するは、國民全體の反感を買ひ、暴虐無道の譏を受けむことを恐れて、表面はカールス王の臣となり、之を敬遠し居たり。カールス王は唯單に名義を存するのみ。其宮殿も其生活

もサアルボース兄弟に比べて、實に比較にもならぬ程の質素さなりける。

時にカールス王の従妹に當るヤーチン姫を妃となす事は、國民一般の熱望する所であり、且つアークス王の舊臣は残らず婚儀の成立を希望して居た。サアルボースは自分の娘セールス姫を王妃となし、ヤーチン姫を何とかして却け、自らカールス王の外戚となりて、完全に政權を左右せむ事を企畫してゐたのである。ヤーチン姫の身邊の危険は實に風前の燈火に均しかりける。

アークス王の上天後は其長子カールス王を立てて、萬機を總裁せしむる事とし、ヤーチン姫を一日も早く王妃の位地に据ゑむことを謀り、別殿を造り、ヤーチン姫にユリコ姫を従へ、キールスタンをしてヤーチン姫の守護職となさしめた。然るにヤーチン姫は新造の館に移りてより、俄に急病を發し苦惱甚しく、呻吟の聲遠近に聞ゆる計りなり。

サアルボースの娘セールス姫はマリヤス姫を従へてヤーチン姫の病床を見舞ひけるに、ヤーチン姫はセールス姫を見るより忽ち目を釣り上げ髪を逆立て、恰も狂亂の如く荒れ狂ひ、セールス姫に飛び掛つて、矢庭に鬚を掴み瘦こけたる病軀

をも顧みず、室内を引摺り廻し、

ヤーチン姫「汝は吾れを惱ます金狐の邪神、一刻も早く此場を立去れツ」

とわめき狂ふ。キールスタンはヤーチン姫の荒れ狂ふを背後より抱きとめ、且セールス姫に對し言葉を低うして、其無禮を謝し、從臣のホールをしてセールス姫主從をサアルボースの館へ送り歸らしめたり。

セールス姫の立歸りし後のヤーチン姫は精神稍鎮靜したりと見えて、スヤスヤと眠に就いた。されど時々「玉手姫々々々」と連呼し、其度毎に發熱苦悶の状益々烈しく、身體の肉は日に削るが如く瘦衰へ、見る影もなき状態に陥りぬ。

此時カールス王はヤーチン姫の重病と聞き、病床を見舞ふべく、テーレンス、ハルマーズの重臣を從へヤーチン姫の館に到り、瘦せ衰へて見る影もなき姫の姿に呆れ果て、日頃の戀愛の心も漸く薄らぎ來たりぬ。されどエールスの娘にして、切つても切れぬ從妹の間柄、如何にもしてヤーチン姫の病氣を回復せしめ、元の美はしき容貌となつて吾妃となし、永く偕老同穴を契らむと心の奥深く希求し居たりける。テーレンス、ハルマーズは一生懸命淡溪の畔に出でて水垢離を取り、

ヤーチン姫の病氣全快を祈願しける。

ユリコ姫はヤーチン姫の枕頭に侍し、看護に餘念なかりし折しも、夜中堅き戸締りを風の如くに押開けて入り来る一人の美人、數多の侍女を伴ひ、此場に現はれ、眉間より金色の光を放ち、ユリコ姫に向つて言ふ。

「妾は新高山を守護致す高照姫命なり。ヤーチン姫の病氣危篤と聞きて、座視するに忍びず、姫が生命を救はむものと、起死回生の藥を持参したり。一刻も早く之を飲ませよ」

と言ひつつ、紫色の木瓜をユリコ姫に與へ、煙の如く立去りにけり。ユリコ姫は合點行かず、木瓜の一部を割いて狆の子に與へたるに、狆は尻を振り頭を振り、ひとくに呑み込みしと思ふ間もなく、忽ち室内を前後左右に狂ひまはり、七轉八倒、黒血を吐き悲鳴をあげて其場に殞れける。

ユリコ姫「今の女神は如何なる魔神なりしか。ヤーチン姫様を毒殺せむと企みたるセールス姫の間者ならめ」

と且つは驚き、且つは怒り、直に新高山の南方に立昇る雲氣を目標に、汗みどろ

になつて祈願をこらしけり。忽ち身體動揺して歸神となり、今の高照姫と稱する
女神は、金狐の化身にして、セールス姫の副守護神なることを口走り、初めて女
神の正體を感知したり。ヤーチン姫は衰弱甚しく、殆ど蟲の息となり居たるが、
キールスタンは此場に慌だしく走せ來り、
キールスタン「ヨリコ姫さま、姫様には御異状は御座りませぬか。只今此館より
怪しき光現はれしと見る間に、惡狐の姿現はれ、暗に紛れて山上高く驅去りまし
た。私は之を見るより取る物も取り敢ず、姫の身邊に異状なきやと、急ぎ御伺ひ
に參りまして御座います」
ヨリコ姫「ハイ、あなたの御推量にたがはず、怪しき女が突然現はれ、姫様の病
氣本復致す様に此木瓜を與へよと渡して、直様立歸へりました。どうも腑に落ち
ませぬので、狎の子に木瓜の一片を切り取り與ふれば、狎は忽ち苦悶の結果、黒
血を吐いて斃れまして御座います」
キールスタン「油斷のならぬ惡神の仕業……すべて臺灣島は高砂島の胞衣と昔の
神代より定められ、龍世姫命國魂神として、御守護遊ばす以上は、龍世姫命を丁

重よに奉齋ほうさいし、敬神けいしんの大道たいだうを再興さいこう致いたし候さぶらはば、妖怪變化えうくわいへんげの災わざは、忽たちまち拂拭ふつしきする事ことで御座ござりませう。アークス王わうの不慮ふりよの御上天ごしやうてんも全まく國魂神くにたまがみをおろそかにし、バラモンの教をしへを國內こくないに奨勵しょうれいしたる神かみの戒いましめで御座ございませう。カールス王わうは兔とも角かくも、ヤーチン姫ひめ様の御居間おゐま丈だけなりと、三五教あななひけうの大神おほかみを祀まつり、龍世姫たつよひめの國魂神くにたまがみを奉齋ほうさい致いたさば、初めて御安泰ごあんたいに渡わたらせられ、流石さすがの難病なんびやうも必かならず本復遊ほんぶくあそばす事ことと考かんがへるのです。ユリコ姫ひめ「キールスタン様さまいい所ところへ心付こころづかれました。妾わたしも貴方あなたの御意見ごいけん通り、國魂たまの神かみを祀まつるべき事ことは承知しょうち致いたして居をりまするが、何なにを言いうても、此國このくにはバラモン教けうの教をしへを以もつて政治せいぢの助けとなしあれば、三五教あななひけうの神かみを念ねんずる事こと、世間せけんに現あらはれなば、如何いかなる戒いましめに遭あふやも計はかり難がたく、實じつは内々ないないにて妾わたしひとり信仰しんかうを致いたして居をりました。然しからばあなたと妾わたしと心こころを協あはせ、龍世姫命たつよひめのみことの御前みまへに御祈願ごきぐわん致いたませう」

キールスタンは嬉うれしげに打諾うちひたうき、兩人聲りやうにんこゑを潛ひそめて、

「三五教あななひけうの大神おほかみ、殊更ことさらに國魂神龍世姫命くにたまがみ たつよひめのみこと、守まもり給たまへ幸さちはひ玉たまへ」

と祈願きぐわんを凝こらしけるに、不思議ふしぎにもヤーチン姫ひめの病氣びやうきは刻々こくこくと快こころよく、四五日しごにちを経へて元もとの如ごとくに全快ぜんくわいしたりけり。

これよりヤーチン姫は俄に三五教を信ずる事となり、三人密かに館の一方に齋壇を設けて日夜祈願をこらしつつありける。

セールス姫はマリヤス姫を従へ、髪ふり亂し、顔色青ざめ父の館に慌しく立歸り、奥の間に驅入り、大聲をあげ泣き倒れ居たり。

サアルボースの館の司タールスは、セールス姫の悲しげなる聲を聞きつけ、恐る恐る其居間に驅つけて、両手をつき頭を下げ、

「タールス、恐れ乍ら姫様に御伺ひ致します。あなた様はヤーチン姫の館へおこし遊ばし、御歸りになるや否や、俄に變りし御様子、如何なる事が出来致しましたか、どうぞ包まず隠さず私まで仰せ付けられ下さいませ。あなたの御爲ならば、假令此タールス、身命を抛つても御無念を晴らし、御希望を叶へまゐらす覺悟で御座います」

セールス姫は漸々に顔をあげ、鬢の纏れ毛を撫で上げ乍ら、半巾にて涙を拭ひ、聲もきれぎれに、

セールス「タールス、よく聞いて呉れた。妾は終生拭ふ可らざる侮辱を受け、且九死一生の虐待に遭ひました。ア、残念や、口惜や」
と聲を限りに其場に泣き伏しぬ。

タールス「モシ御姫様、泣いて許り居られましては、一向譯が分かりませぬ。どうぞ詳しく御示し願ひます」

セールス「委細はマリヤス姫に聞いておくれ。餘り残念さと恐ろしさに心も顛倒し、言ふ事が出来ませぬ」
と又もや泣き倒れる。

タールス「マリヤス姫さま、あなたは姫様の御供をしてヤーチン姫の館へ御出でになつた以上は、一切の様子残らず御存じの筈、一伍一什包まず隠さず、言つて下さい。此方にもそれに對する覺悟をせなくてはなりませんから」

マリヤス「ハイ」

と言つた限り、言ひ蒞つて居る。マリヤス姫はセールス姫の侍女なれ共、平素よりセールス姫の嫉妬と猜疑と惡虐無道の行爲とに愛想を盡かして居た。されど主

人の事なれば、無理に戒め諭す譯にも行かず、今迄幾度か命を賭して諫言せしことあれ共、いつも馬耳東風に聞き流して居た。今回のヤーチン姫に打擲されしは、全く天の戒め玉ふ所と深く心中に感謝して居た位であるから、其實状をタールスに物語りし結果ヤーチン姫の如何なる災厄に陥り玉ふやも計り難しと、躊躇して居たのである。

タールスはマリヤス姫に向つて、短兵急に訊問の矢を放つた。マリヤス姫は僅かに小聲で、

「ヤーチン姫様は御病氣の勢にて、セールス姫様の御肉體に少し許り御手をかけられました。さり乍らヤーチン姫様はカールス王の御従妹、セールス姫様は臣下の御身の上、假令如何なる事を遊ばしても彼是申上げる譯のものでは御座いませぬ。妾は此事許りは申上げる事は出来ませぬ。セールス姫様に、後でゆるゆる御聞き遊ばせ」

セールス姫は、矢庭に立ち上り、眼光凄じく夜叉の如き勢にて、マリヤス姫の髻をひつ掴み室内を引摺り廻し、身體所構はず、打つ、蹴る、毆る、殆ど息の根

も絶えむ許りに打擲した。そしてセールス姫は聲を荒らげ、
「不忠不義のマリヤス姫、臣下の身分として、主人より如何なる亂暴を加へらるる共、一言も申上げられないと言つたであらう。「我身を抓つて人の痛さを知れ」と云ふ事を覚えて居るか。妾がヤーチン姫より被つた虐待は此通りだ。……タールス、妾がなす業をよつく覚えて居れよ。此通りなりしぞ」
と又もやマリヤス姫の髻を掴んで室内を引摺りまはし、頭髮は房の如くに肉のついた儘、血に染つて「むし」り取られた。マリヤス姫は苦みをこらへ、セールス姫のなすが儘に任してゐた。最早蟲の息となつて了つた。セールス姫は心地よげにニタリと笑ひ、

「イヤ、タールス、汝は此由御父上、叔父上の前に報告されよ」
タールスは「ハイ」と答へて、慌しく此場を立ち去つた。

(大正一一・八・六 舊六・一四 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・五 舊五・五 王仁校正)

第二章 無理槍（八〇二）

タールスの報告によつて、サアルボース、ホーロケースの二人は足音荒々しく、此場に現はれ来り、セールス姫に向ひ、

サアルボース「只今タールスの注進に依れば、姫はヤーチン姫の病氣見舞に参り、名状す可らざる虐待を蒙り、拭ふ可らざる侮辱を被りしと聞く。果して眞か。サアルに於ても覺悟を致さねばならぬ。事の顛末を包まず隠さず物語つて呉れ。怪我は大きくはなかつたか。氣分はどうだ」

と流石の悪人も、吾子の愛に引かされて、胸を轟かせ乍ら、慌だしく問ひつめた。セールス姫はさも苦しげに漸く顔をあげ、

「御父上様、叔父上様、殘念で御座います。……どうぞ此讎敵を討つて下さいませ」

サアルボースは首を縦に振り乍ら、
「ヤア心配するな。天にも地にも掛替のない一人の娘、假令臺灣島を全部手に握

るとも、汝の生命には換へられ難し。大切なる娘を打擲致せし憎くきヤーチン姫、今に思ひ知らせてやらう」

と子の愛に掛けては、目の中へ這入つても痛くないセールス姫の針を棒に變へての陳辨を一も二もなく信じて了つた。

セールス「それにつけても残念なのは、マリヤス姫で御座います。彼はいつも妾が侍女として仕へ乍ら、一事々々口答を申し、今日も今日とて、ヤーチン姫に無

體の亂暴と恥辱を受けたる主人の妾をいたはず、却て痛快げに欣々と立歸り、タールスの訊問に對しても一言も答へず、つまり妾親子の惡虐無道を天の戒め玉

ふものなりと、口には言はねど、其面色にありありと畫いてゐます。それ故妾は女の身として亂暴とは知り乍ら、ヤーチン姫より蒙りたる迫害と恥辱を彼に移し

て、タールスに見せました。女の身としての亂暴狼藉、心きつき娘と、どうぞ御叱り下さいませぬ様、餘り残念が凝つて、マリヤス姫を打擲致しました」

とワツと許りに聲をあげて泣き倒れ、身を揺つて悶えて居る。ホーロケースは二ヤリと笑ひ、

「ヤア待つて居たのだ。斯ういふ事がなければ、吾々の陰謀は成就致さぬ。……
セールス姫、能くも打擲されて歸つた。如何に病氣とは言へ、ヤーチン姫の亂暴
狼藉、到底カールス王の妃としての資格はこれにて絶無となつた。あゝセールス
姫、汝が今日受けたる虐待と侮辱は、却て汝が身の仕合せ、よくもマア苦められ
た。……時にマリヤス姫、汝はセールス姫の侍女として、晝夜身邊に仕へ乍ら、
何故ヤーチン姫に向つて抵抗せなかつたか。何の爲の侍女であるか。汝の不忠不
義の天罰は忽ち眼前に巡り來つて、此有様、天はセールス姫の手を借つて汝を戒
め玉うたのだ。必ず恨むことはならぬぞ。惠の鞭と思つて、有難くセールス姫の
前に兩手をついて謝罪致せよ」
マリヤス姫、漸く血汐の滴る顔を拭ひ乍ら、つと身を起し、四人をハツタと睨
みつけ、

「妾こそは賤しき汝が娘セールス姫の侍女となり、汝親子が日夜の陰謀を監視せ
む爲、前アークス王の旨を受け、汝が家に忍び込みし者なるぞ。妾はアークス王
の落胤マリヤス姫……言はばカールス王とは兄妹の間柄、汝が如き賤しき親子の

侍女として仕へしも、深き仔細あつての事、天は何時までも、汝親子が惡逆無道を赦し玉はず。妾はこれより、カールス王の御兄の前に出で、汝が陰謀を一夕申告し國內一般に發表せむ。さは去り乍ら、汝只今より悔い改めて、善道に歸りなば、此儘にて差許す可し。返答如何〆

と、勢烈しく詰責し始めた。サルボース外三人はマリヤス姫の言葉に肝を潰し、如何はせむと暫したためらひ居たりしが、茲まで企みし陰謀、いかで初心を翻さむや、互に目と目を見合し、各長刀を引抜き、マリヤス姫に前後左右より、斬つてかかる。

マリヤス姫は刃の中を上下左右に潜りぬけ、サルボースの襟首をグツと握つて、庭前の溜池に投げつけた。

マリヤス〆ナニ猪口才〆

と抱つくタールスの又もや襟首とつて高殿より眼下の泉水に投げ込んだ。残り二人は此態に驚き、此場を逃げ去つた。

マリヤス姫は悠々として鏡の前に立ち、髪をつくるひ、衣服を着替、天の數歌

を歌ひ乍ら、何處ともなく、玉の如き姿を隠して了つた。あゝマリヤス姫の行方はどうなつたであらう。

カールス王は日頃念頭にかけてたるヤーチン姫の危篤の報に接し、失望落膽の餘り、新高山の淡溪に身を投げ、戀愛の苦痛を免れむと、夜竊に館を立出で、谷の畔に到り、彼方此方と死場所を求めて彷徨ひつつあつた。

谷の彼方に忽然として一塊の火光現はれ、其中より容色端麗なる美人、莞爾として中空を歩み乍ら、カールス王の前に近付き來り涙を腮邊にたらし乍ら、細き纖手をさし伸べて、カールス王の手を握つた。カールス王は忽ち精神恍惚として吾身の此處にある事を忘るる計りであつた。能く能く見れば、夢寐にも忘れぬヤーチン姫に容貌、骨格、言葉の綾までも其儘であつた。

女、言葉靜かに、

「妾が最も愛するカールス王よ」

と言つた限り、恨めしげに兩眼に涙を湛へて居る其愛らしさ。カールス王は忽ち

心輝こころかがやき、今迄いままでの悲哀ひあいの情じやうは全く消え失うせた。

カールス「御身おんみはヤーチン姫ひめならずや。病氣びやうき危篤きとくに陥おちり、汝そなたが命旦夕めいたんせきに迫せまると聞ききしより、吾われは失戀しつれんの結果けつくわ、此溪流このけいりうに身みを投なげて、汝そなたの來きたるのを幽界いうかいにて待またむと思おもひしに、俄にはかに變かはる汝そなたの容貌ようぼう、且かつ健全けんぜんなる其身體そのからだ、如何いかがせしぞ」

と不審顔ふしんがほに問とひつめた。ヤーチン姫ひめは莞爾くわんじとして打諾うちうなづき乍ながら、カールス王わうの手てを取とり、館やかたを指さして歸かへり行ゆく。

館やかたの前まへに近ちかづ付き見みれば、今迄いままで伴ともなひ來きたりし姫ひめの姿すがたは煙けぶりの如ごとく消きえ、月つきは中天ちうてんに皎々かうかうと輝かがやき、油蝉あぶらぜみの聲こゑは彼方あなた此方こなたに騒さわがしく聞きこえて居ゐる。カールス王わうはフツと氣きが付つき、

「サテ訝いぶかしや、吾われは失戀しつれんの結果けつくわ、溪流けいりうに身みを投なげむとせし時とき、ヤーチン姫ひめ來きたりて、此處ここまで伴ともなひ歸かへりしと見みしは夢ゆめなりしか。何なには兔ともあれ、館やかたに入りて休息きつそくし、其上そのうへにて決心けつしんの臍ほぞを固かためむ」

と獨語ひとりごちつつ、奥おくの間に忍しのび足あしにて進すすみ入いる。

今現いまあらはれしヤーチン姫ひめは、セールス姫ひめが使役しえきせる金狐きんこの邪靈じやれいの變化へんくわであつた。

カールス王の變死を喰ひ止め、吾目的を達成せむとの計略より出でたる魔術であつた。

カールス王は奥の間に端坐し雙手を組んで、ヤーチン姫の雲に乗り谷を渡り、或は吾が館の前にて煙の如く消え失せたるを見て、稍怖氣づき、疑惑の念に驅られて其夜は一睡もせず夜を明かした。

ヤーチン姫は三五教の神徳に依つて、さしもの重病も全く恢復したれば、ユリコ姫、キールスタンを伴ひ、カールス王の館を訪問した。表門には門番のホールいかめしく控へて居る。

キールスタン「あいやホール、只今ヤーチン姫様の御來城、何卒一刻も早くテールンス殿に申上げ、カールス王の御前に奏聞して下さい」

ホール「ハイ承知致しました。暫く此門前に御待ち願ひます」

と足早に奥深く進み入り、テールンスに委細を報告した。テールンスは直ちにカールス王の御前に伺候し、

「只今ヤーチン姫、御來城でムいます」

との聲こゑに、カールス王わうはハツと驚おどろき、

「ナニ、ヤーチン姫ひめが参まゐつたか。雲くもに乗のつて参まゐつたのでないか。又館またやかたの入口いりぐちにて消滅せうめつは致いたさぬか。よく調しらべて來きて呉くれ」

テールンス「これは又異またいな事ことを承うけたまはります。妖怪えうくわい變化へんげならぬヤーチン姫ひめ様さま、雲くもに乗のり、或あるひは煙けぶりの如ごとく消滅せうめつし玉たまふ道理だうりはムいませぬ。立派りっぱなる玉たまの輿こしに御乗おのり遊あそばし、キールスタン、ユリコ姫ひめ御供おともを致いたして参まゐられました。直様すぐさま御通おとほし申まをしませうか」

カールス王わうは暫しばしく小首こくびをかたげ、吐息といきをもらし乍ながら、

「何なには免とも有あれ、吾目わがめどほり通とほへ通とほせ」

「ハイ」と答こたへて、テールンスは自ら門前もんぜんに迎むかへ、王わうの前に三人さんにんを案内あんないした。

ヤーチン姫ひめ恭ひめしく兩手りやうてを仕つかへ、

「妾わらはは、ヤーチン姫ひめで御座ございます。永ながらく病氣びやうきに付つき、いろいろと御心ごしん配ぱい掛かけまして、御蔭おかげによりて此通このとほり全快ぜんくわいを致いたしました。どうぞ御安心ごあんしん下くださいませ」

カールス王わうは稍暫ややしばし無言むごんの儘まま、ヤーチン姫ひめの姿すがたに目めを放はなたず、考かんがへ込んで居ゐる。

夜前現はれたヤーチン姫に寸分違はぬ訝かしさ。又もや昨夜の妖怪變化にはあらざるかと、無言の儘考へ込んで居た。

斯かる所へ宰相神のサルボース、ホーロケースの兩人は、セールス姫を先に立て數多の従者を引連れ、カールス王の館の奥の間指して、遠慮會釋もなく進み來り、此態を見て、冷笑を向け乍ら、カールス王に向ひ、

サルボース「これはこれはカールス王殿、いつとても御健勝で吾々恐悅の至りに存じます。就いては御存じの通り、ヤーチン姫は發狂致し、身體は瘦衰へ、最早削るべき肉もなく、骨計の醜き有様、到底臺灣島のカールス王が妃として仕へ奉る事は不可能となりました。實に吾々は御氣の毒と申さうか、残念至極と申さうか、憂苦の結果申上げる言葉も知りませぬ。就いては一日も妃なくして、萬機の政事を總裁することは出来ずまい。不束乍ら吾一人娘セールス姫を王の御妃として献上仕ります。どうぞ不束者なれ共、幾久しく御納め下されます様に、國家の爲に申上げます」

と稍強壓的にセールス姫を妃となすべき事を申込みたり。

カールス王は五里霧中に彷徨する如き面色にて、何の應答もなく默然として、ヤーチン姫、セールス姫の顔を見比べてゐた。

キールスタンは不審の眉をひそめ、

「サアルボース殿の只今の御言葉、ヤーチン姫様は病氣の爲、身體瘦衰へ醜き御姿到底王妃としての御用は勤まらないかの如く仰せられましたが、御覽の通りヤーチン姫様の御病氣は既に既に御全快遊ばされ、斯の通り御健勝なる御身體、英氣に充ちた御容色、然るに何を以てか、宰相殿は左様なことを仰せられますか」と反問した。サアルボースはニツコと笑ひ、

「只今此處に安坐し居るヤーチン姫は本者にあらず、これ全く妖怪變化の偽者で御座る。雲に乗り、或は身を白煙と消し、種々雑多の摩術を使ひ、王の館に忍び込み、巧言令色の限りを盡し、王の心膽を奪ひ、國內を攪亂せむとする惡魔の再來でゐる。某は不肖なれ共、バラモン教の大神の神力に依りて天眼通を得たれば、ヤーチン姫の眞偽を分別する位は朝飯前の事でゐる。あゝサテモ、サテモ、當館内には盲神許りの……よくも集まつたものでゐるワイ。アツハ、ハ、ハ、」

と肩を揺り、パツとキールスタンを睨め付けた。

キールスタン「益々以て不届き至極の宰相の言葉、何を證據に左様の事を仰せらるるか」

サアルボース「汝等如き盲神の關知する所ではない。賢明なるカールス王に於ては、よくも其眞偽を御存じの筈、吾々が辨明するの必要は御座らぬ。……恐れ乍らカールス王様、如何思召しまするや」

カールス王は默然として腕をこまねき、俯むいて思案に暮れて居る。

ヤーチン姫「アイヤ宰相殿、妾を妖怪變化とは、何を證據に仰せらるるか。詳細に辨明なされよ。返答次第に依つては、ヤーチン姫容赦は致しませぬぞ」

カールス王の叔父エーリスは稍言葉を荒らげ憤怒の面色物凄く、
「ヤア、サアルボース、汝は無禮千萬にも吾娘ヤーチン姫を妖怪變化と申すは何故ぞ。これには深き企みのある事ならむ。詳さに事情を申述べよ」

ホーロケースは立あがりて、

「エーリス殿に申上げます。貴方の御娘、ヤーチン姫様は先づ頃重病に罹らせら

れ、身體は瘦衰へ、見る影もなき御姿と御成り遊ばされ、到底御全快の見込みもなく、カールス王様を始め、吾々一同憂苦の情に堪へず、如何にもして一刻も早く御全快遊ばす様と、バラモン神に祈願を籠め居りました所、三五教の邪神忽ち來つて姫の肉體を喰ひ、己代つてヤーチン姫と成りすまし、斯の如く堂々として、此處に姿を現はして居ります。現在御父上なる貴方の御目にさへも、其眞偽が判明せないまで、よく化込んだ枉神、到底一通りや二通りでは、正體を現はす様なチヨロコイ奴では御座らぬ。此眞偽はカールス王様の既に御承知の事と存じます。言はば貴方の御娘ヤーチン姫の仇敵で御座いますれば、此場で御手討に遊ばされたう存じます。萬一御疑ひとあらば、憚り乍ら此ホーロケースが此場に於て退治し御目にかかせう」

ヤーチン姫「コレコレ、ホーロケース、そなたは何を言ふのだ。氣が違うたか。トツクリと妾が顔を調べて見よ」

ホーロケース「カールス王様、貴方の御考へは如何で御座いまする」

カールス王「如何にも合點の往かぬヤーチン姫、昨夜雲に乗り、吾前に現はれ、

再び館の前にて消え失せたる不思議の女に寸分違はぬ此女。吾は正しく妖怪變化と見るより外に手段はない□

サアルボース、ホーロケースの兩人は王の言葉を聞くより、俄に鼻息荒く、サアルボース「王者の言葉に二言なし。汝ヤーチン姫、妖怪變化にきはまつたり。此國の掟に従ひ、ヤーチン姫を籠に乗せ、新高山の淡溪に投げ棄て、災の根を絶たむ。……如何にエーリス殿、これでも猶御疑ひあるや□」

と睨めつけた。エーリスは暫く首を傾けて居たが、頓て王に向ひ、
「カールス王よ、ヤーチン姫を妖怪變化に相違なしと断定さるるや□」

と息を喘ませ、問ひつめた。カールス王は首を左右に振り、
「否々吾は決して妖怪變化と断定はせない。只訝かしき昨夜出會ひたる女に、容貌其他寸毫の差なきを不思議と思ふのみ。果して妖怪變化なりや、ヤーチン姫なりや、これは未だ判明せず□」

エーリスはサアルボース兄弟に向ひ、
「宰相殿、今の王の御言葉に依れば、未だ的確なる妖怪變化と認め玉はざるに非

ざるか。然るに軽々しくヤーチン姫を妖怪變化として、溪流に棄つるは沒義道で御座らう。今一息御熟考を願ひませう」

ホーロケースは言下に、

「お黙りなさい。カールス王の叔父たるの地位を利用して、吾等が忠言を遮らむとする貴神の振舞、如何に親子の愛情に眼眩めばとて、妖怪變化を以てカールス王の妃となし、國家を紊亂せむとするは不忠不義の至りで御座らう。御控へめされ」

サアルボースは又もや立上つて、

「一旦王者の口より妖怪變化ならむと宣示されたる以上は、再撤回す可からず。且又現在目前に居る妖怪に對し、眞偽に迷ふが如き暗君なれば、王としての資格は絶無なり。速かに退位さるるか、さなくば吾言葉を容れ、ヤーチン姫と變じたる妖怪を淡溪に捨て、セールス姫を容れて妃となし玉はば、上下一致、天下泰平の祥兆を見む事火を睹るより明かならむ、返答承はらむ」

のつぴきさせぬ釘鏝にカールス王も返す言葉なく、うつうつとして顔色青ざめ、

二三の從臣と共に奥の間に姿を隠した。サアルボース、ホーロケースの二人は數多の從臣に命じ、ヤーチン姫を高手小手に縛め、粗末な吊籠に入れ、父のイーリヌ始め、キールスタン、ユリコ姫の止むるのも聞かばこそ、突きのけ撥ねのけ、凱歌を奏しつつ淡溪指して進み行く。

(大正一一・八・六 舊六・一四 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・五 王仁校正)

第三章 玉藻山〔八〇三〕

眞道彦命は國治立大神の時代より、此島に鎮まり、子孫皆眞道彦の名を繼いで、新高山の北方に、聖場を定め、三五の道を全島に擴充し、神國魂の根源を培ひつつあつた。然るにバラモン教の一派此島に漂着してより、花森彦命の子孫なるアイクス王は、三五の教を棄ててバラモン教に歸順せしたため、住民は上下の區別なく、

のこ
残らずバラモンの教に歸順して了つた。されど新高山の以北にのみアークス王の
けんりよく
権力も、バラモンの教権も行はれて居たのみで、新高山以南は少しも勢力が及ば
なかつた。

まみちひこ
眞道彦は遠く新高山を越えて、東南方に當る高原地日月潭に居を構へ、東南西
の地を教化しつつありき。然るにアークス王の宰相たるサアルボース兄弟は、此
ちてん
地點をも占領し第二の王國を建てんと、時々兵を引連れ、玉藻山の聖地向つて
せ
攻めよせた。されど龍世姫の永久に鎮まり玉ふ大湖水を南へ越ゆることは容易に
でき
出来なかつた。

あるとき
或時ホーロケースはバラモンの信徒を數多引連れ、三五教の巡禮に身をやつし、
たまもやま
玉藻山の聖地に、雲霞の如く押寄せ、隙を覗つて眞道彦命を生擒し、一擧に全島
せんりやつ
を占領せむと試みつつあつた。眞道彦命はホーロケースの惡辣なる計畫を前知し、
あまた
數多の信徒を驅り集め、言靈戦を以て、之れに向ふこととなし、玉藻山の山頂に、
さいだん
祭壇を新に設けて、寄せ來る敵に向つて、言靈線を發射しつつあつた。され共、
けう
バラモン教のホーロケースは少しも屈せず、獅子奮迅の勢を以て各隠し持つたる

兇器を振り翳し、鬨を作つて一擧に亡ぼさむと斬り込んで来た。

眞道彦の子に日楯、月鉾と云ふ二人の信神堅固なる屈強盛りの二兒があつた。

父眞道彦はホーロケースに向つて、言靈を奏上するや、ホーロケースは怒つて、

眞道彦の胸板を長剣を以て突き刺し、此場に打殪し、凱歌を奏し、其勢天地も震

ふ計りであつた。突刺されて其場に倒れた眞道彦の身體より白煙忽ち濛々として

立あがり、美はしき女神となつて、雲の彼方に姿を隠した。

日楯、月鉾の兄弟は父眞道彦の行方不明となりしを歎き、如何にもして、ホー

ロケースの一族を亡ぼし、父の仇を報じ、三五教の教を再び樹立せむと苦心の結

果、湖中に泛べる龍の島に夜祕かに漕ぎつけ、祈願をこらして居た。此時既に玉

藻山の聖地は、ホーロケースの占領する所となつて居た。眞道彦の部下は四方に

散亂して、其影さへも止めなかつた。

龍の島は樹木鬱蒼として、湖水の中心に浮び、周圍殆ど一里計りもある靈島で

あつた。二人は島山の頂上目蒐けて登り行く。此處に高大なる巨岩壁の如く立竝

び、中央に人の入れる計りの岩穴が開いて居た。兄弟は其岩窟に思はず足を向け

た。炎熱焼くが如き夏の空に得も言はれぬ涼しき香ばしき風、坑内より頻りに吹き来る。二人は何となく此窟内を探険したき心持となつて、思はず知らず四五丁計り奥へ進んで行つた。

俄に強烈なる光線何處よりかさし來たる。振かへり見れば、最早岩窟の終點と見えて、兩方に圓き天然の穴が穿たれ、そこより太陽の光線が直射してゐた。あたりを見れば、階段の如きもの自然にきざまれてゐる。日楯、月鉾の二人は、此階段を登り詰め、前方を遙かに見渡せば、紺碧の波を湛へた玉藻の湖水、小さき島影は彼方此方に浮み、白き翼を擴げたる數多の水鳥は前後左右に飛び交ふ様、實に美はしく、二人は此光景に見惚れて居た。遠く目を東南に注げば、玉藻山の聖地は以前の儘なれど、ホーロケースが襲來せしより、バラモン教の據る所となり、何となく恨めしき心地せられて、稍今昔の念に沈み居たり。

日楯「オイ弟、斯の如き聖場を敵に蹂躪され、父上は行方不明とならせ玉ひ、吾々兄弟は身の置所なく、漸くにして此龍の島に逃げ來りしものの、未だ安心する所へは往かない。罷り違へばバラモン教の奴原、此島迄吾等が後を追跡し來るやも

計られ難し、吾等兄弟は今此處に於て、三五教の大神に祈願をこらし、運を一時に決せば如何に。見下せば千丈の斷崖絶壁、神に祈願をこめ、此青淵に飛び込み、生死の程を試し見む。萬一吾等兩人生命を取り止めなば、再び三五教は元の如く勢力も盛返し、バラモン教の一派を新高山の北方に追返し得む。月銚、汝如何に思ふや

と決心の色を顯はして話しかけた。

月銚 兄上の仰せの如く、これより天地神明に祈願をこめ、此斷崖より湖中に飛び込み、神慮を伺ひ見む

と同意を表し、二人は天津祝詞を奏上し、此世の名残と天の數歌を數回繰返し唱へて居た。傍の密樹の蔭より、

神が表に現はれて 善と惡とを立別る

此世を造りし神直日 心も廣き大直日
只何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ
あななひけう 三五教の宣傳使

言依別や國依別の
神の司は此處に在り

國治立大神の
教を傳ふる眞道彦

脆くも敵に聖地を追はれ
玉藻の山を後にして

雲を霞と逃げ去りぬ
後に残りし兄弟は

力と頼む父には別れ
教の御子には見棄てられ

寄邊渚の捨小船
泣く泣く聖地を立出でて

ここに荒波龍の島
涙の雨に濡れ乍ら

此岩窟に尋ね來て
玉藻の湖面を打眺め

感慨無量の思ひ出に
今や生死を決せむと

思ひ煩ふ憐れさよ
日楯、月鉾兩人よ

必ず心を惱ますな
琉と球との寶玉の

御稜威を吾が身に負ひ來る
三五教の宣傳使

汝等二人に玉藻山
元の昔に恢復し

誠まことの道みちにバラモンの 敵てきを言こと向むけ和やはすてふ

珍うづの神寶しんぼう授さうけなむ あゝ惟かむ神な々々ながら

御靈みたま幸さちはひましませよ』

と歌うたひながら、此場このばに二人ふたりの宣傳使せんでんしは現あらはれ來り、兄弟きやうだいの前まへに直立ちよくりつして、輕かるく目もく禮れいした。

兄弟きやうだいは夢ゆめかと計ばかり打驚うちおどろき、平身低頭へいしんていとつ稍少時ややしばし、何なんの應いらへも【なく】計ばかり。やうやうにして兩人面りやうにめんもてをあぐれば、こはそも如何いかに、二人ふたりの宣傳使せんでんしの影かげは何處どこへ消え失うせしか、山やまの尾をの上へを通かよふ風かぜの音颯々おとさつさつと響ひびき亘わたるのみなり。

これより二人ふたりの兄弟きやうだいは、勇氣日頃ゆうきひごろに百倍ひやくばいし、天あまの數歌かずうたを歌うたひ乍ながら、湖上こじやうに泛うかべる島々しまじまを殘のこる隈くまなく驅巡かけめぐり、二人ふたりの宣傳使せんでんしの所在ありかを尋たづねたれ共ども、何れいづへ行ゆきたりしか、其影そのかげさへも見みることは出來できなかつた。されど二人ふたりは何なんとなく勇氣ゆうきに充みち、再び玉藻山ふたたびたまもやまに向むかつて言靈戰ことたませんを開始かいしせむと、湖水こすゐに浮うきつ沈しづみつ、七日七夜なぬかななやの御襖みそぎを修しうし、言靈ことたまの練習れんしふに全力ぜんりよくを盡つくす事こととなつた。

セールス姫の侍女として永く仕へ居たるアークス王の落胤なるマリヤス姫は、サアルボースの館を脱け出で、夜を日に次で、新高山を東南に越え、玉藻の湖邊を巡つて、玉藻山の聖地に救はれて居た。然るに、此度のホーロケースの襲來に依りて、眞道彦命は行方不明となり、數多の部下は四方に散亂し、日楯、月鉾の二人はこれ亦、行方不明となり、進退谷まる折しも、ホーロケースに捕へられ、散々な責苦に會ひ、遂には一室に嚴重なる監視人をつけ、幽閉されにける。

ホーロケースは兄のサアルボースと相應じて、此全島の主權を握らむと、意氣昇天の勢にて、玉藻山にバラモン教の聖場を開き、吾物顔に振るまつて居た。さうしてマリヤス姫を幽閉し、時々其居間に到りて、強談判を開始することもあつた。

話し變つて、マリヤス姫は、悲歎の涙に暮れ乍ら、獨ごちつつ、心の憂さを歌ひ居たり。

水みづの流ながれと人ひとの行ゆく末すゑ

變かはれば變かはる世よの中なか

遠津御祖とほつみおやの其源そのなもとを尋たづぬれば

高天原たかあまはらのエルサレム

花森彦はなもりひこのエンゼルと

仕つかへ玉たまひし吾御祖わがみおや

美うましの命みことの御裔みすゑなる

アークス王わうが子こと生うまれ

浮世うきよを忍しのぶ落胤らくいんの

吾われは果敢はかなき身みの因果いんぐわ

高砂島たかさごじまを所知しるしめ食めす

カールス王わうの妹いもうとと生うまれ

心こころ汚きたなきサルボースが娘むすめ

セールス姫ひめの侍女じぢよとなり

醜しこの企たくみを探さぐらむと

父ちちの御言みことを畏かしこみて

心こころを盡つくす折柄をりからに

セールス姫ひめのあぢきなき

其振舞そのふるまひに追おひ立たてられ

今いまは果敢はかなき獨身ひとりみの

行方ゆくへも知しらぬ旅枕たびまくら

神かみの情なさけに助たすけられ

眞道彦神まみちひこのかみの開ひらきます

三五教あななひけうの靈場れいぢやうと

音おとに聞きこえし玉藻山たまもやま

これの館やかたに救すくはれて

樂たのしき月日つきひを送おくる折をり

月に村雲むらくも、花はなには嵐あらし

浮世うきよの風かぜに煽あふられて
今日けふは悲かなしき幽閉いっへいの身み

あゝ何なんとせむ只ただ泣なく涙なみだ
かはき果はてたる夕ゆふまぐれ

戀こひしと思おもふ月つき鉾ほこの
神かみは何いづれにましますか

親おや子こ兄あに弟あに諸もろ共ともに
夜半よの嵐あらしに散ちらされて

行方ゆくへも分わかぬ旅たびの空そら
假令たとへ何處いづこにますととも

マリヤス姫ひめの眞心まごころは
山野やまのうみ海河みかは幾千里いくせんり

隔へだつるとても何なんのその
尋たづねて行ゆかむ君きみが側そば

とは言いひ乍なら情無なさけなや
心汚こころぎたなき醜神しきがみの

ホーロケースとらに捉とらへられ
暗くらき一ひと閒まに幽閉いっへいされて

面白おもしろからぬ月日つきひを送おくる吾身わがみの上うへ
朝あさに夕ゆふに涙なみだの袖そでを絞しぼりつつ

戀こひしき人ひとの行方ゆくへを尋たづね
夢ゆめになりとも吾戀わがこふる

月つき鉾ほこ神かみに會あはせかしと
木花このはな姫ひめの御前おんまへに

祈いのりし甲斐かひもあら悲かなしや
ホーロケースよこの横戀慕これんぼ

牢獄ひとやの暗くらき吾居わが閒まに
夜よな夜よな來きたりてかき口説くどく

其言の葉の厭らしさ 消え入りたくは思へ共

神ならぬ身の如何にせむ 逃るる由もなくばかり

戀しき人は来まらずに 蝮の如く忌み嫌ふ

醜の曲靈の執念深く 朝な夕なに附け狙ふ

バラモン教の神司 吾身に翼あるならば

牢獄の窓を飛び越えて 戀しき主が御許に

天翔り行かむものを あゝもどかしや苦しや」と

小聲になつて涙と共に搔口説く。

折しもあれや館内俄に騒々しく 數多の人々右往左往に逃げ惑ふ

其様子の一方ならざるに マリヤス姫は「眞道彦命

味方を數多引連れて 弔戦に向ひ玉ひしか

但ただしは日ひたて楯つぎほこ、月つきほこ鉾ほこの二ふたり人

數あまた多たの神しんぐん軍ぐんを引いんそつ率そつして

茲ここに現あらはれ玉たまひしか

何なんとはなしに吾わが心こころ

勇いさましくなりぬ

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

御みたま靈さち幸さいちはひましませよ

と思おもはず合がつしやう掌しやうする。其そこ處こへ密みつしつ室しつの戸とを荒あらかに押おしあ開あけて、形ぎやう相さう凄せいまじく入いり來きたれる

ホーロケースは、

「ヤア、マリヤス姫ひめ、變へんじ事じ突とつ發ぱつ致いたした。サア吾われに續つづいて來きたれ」

と無む理りに引ひつ抱かかへ、此この場ばを逃にげ出いださむとする其その周あわて章かげん加か減げん、マリヤス姫ひめはキツとな

り、
「假かりにもバラモン教けうの神かむつがき司かき、數あまた多たの部ぶ下かを引いんそつ率そつし玉たまふ御おん身みを以もつて、其その周あわて章かた方は

何なに事ごとぞ。先まづ先まづ鎮しづまり玉たまへ。様やう子すを承うけたまはりし上うへにては、あなただの御おあと後ごに從したがひ、

參まめらうも知しれませぬ」

とワザとに落おちつき付はら拂はらつて、時ときを移うつさうとする。ホーロケースは、

「時遅れては一大事」

と有無を言はせず、小脇にひんだき、密室を駆出さむとする時しも、日楯、月鉾の兩人は、琉、球の玉の威徳に感じたりけむ、身體より強烈なる五色の光を放射し乍ら、此場に現はれ來り、

兩人「ヤア、ホーロケース、暫く待たれよ」

と聲をかけた。ホーロケースは轉けつ輾びつ、マリヤス姫を後に残し、數多の部下と共に、雲を霞と夜陰に紛れ、何處ともなく姿を隠した。

月鉾「あゝマリヤス姫殿、御無事で御座ったか、芽出度い芽出度い。これと云ふも全く、大神様の御恵み」

と兩手を合せて、感謝の涙を流して居る。

マリヤス姫は夢か現か幻かと、飛び立つ計り喜び勇み、あたりをキヨロキヨロ見廻し乍ら、ヤツと胸を撫でおろし、

マリヤス「悲しき恐ろしき苦しき所へお越し下さいまして、妾を救ひ賜はり、嬉しいやら、有難いやら、何とも申上ぐる言葉は御座いませぬ。……日楯様、月鉾

様、最早館の内は別状は御座いませぬか

と云ひつつ、月鉾にすがり着いた。

月鉾「マリヤス姫殿、御安心なさりませ。最早敵は残らず散亂致しました。今後

の警戒が最も肝要で御座います。まづまづ御心を落着けられよ」

日楯「サアサア、皆さま、打揃うて神前に天津祝詞を奏上致しませう」

茲に玉藻山の聖地は再び、三五教に返り、宏大なる神殿は造營され、日楯、月

鉾の聲名は遠近に押し擴まり、旭日昇天の勢となり來たれり。あゝ惟神靈幸倍坐

世。

（大正一一・八・六 舊六・一四 松村眞澄録）

（昭和一〇・六・六 王仁校正）

第四章 淡溪の流（八〇四）

眞道彦命はホーロケースの軍勢に包圍攻撃され、言靈を發射したれども、何故か少しも效力現はれず、遂にはホーロの鋭き槍先に胸を刺されて、アワヤ亡びむとする時しもあれ、木花姫の化身に救はれ、館を棄てて、二三の従者と共に、新高山の峰續き、アーリス山の溪谷に逃れ、谷間の凹所に草庵を結び、あたりの果物などを食しつつ神を祈り、時の到るを待ちつつあつた。

頃しもあれや、絶壁の谷の傍に當つて、阿鼻叫喚の聲切りに聞え來る。何事ならむと仰ぎ見れば、二人の男女谷を指し、『アレヨアレヨ』と、狂氣の如く叫び廻つて居る。飛沫を飛ばす大激流に籐にて編みたる籠一個、浮きつ沈みつ流れ下るを見、直に眞道彦命は三人の従者に命じ、『彼の籠を拾ひ來れよ』と命じた。され共瀧の如き激流、近よるべくも非ず、一生懸命に拍手し乍ら言靈を奏上した。籠は不思議にも渦卷にまかれて、眞道彦が足下の淵にキリキリと舞ひ寄つた。直に三人の従者は籠を拾ひ上げ、庵の前に擔ぎ來り、中を改め見れば、容色端麗にして品格高き一人の美女、高手小手に縛られ、氣絶して居た。四人は驚き、直に籠より引出し、水を吐かせ縛を解き、いろいろと手を盡して漸く蘇生せしむる

事を得た。

向ふの河岸に立てる二人の男女は、両手をあげて歡呼し、或は両手を合せ此方に向つて感謝の意を表して居る。

蘇生せし美人は餘りの疲勞に、言葉も發し得ず、僅に目を開き、口をモガモガさせ乍ら、何か言はむとするものの如くであつた。斯くする事半日許り、日は漸く新高山の峰に没し、四面暗黒に閉された。四人は代る代る祝詞を奏上し、漸く曉の鳥の聲、彼方此方の谷の木の間に聞え始めた。

此時何處より渡り來りけむ、二人の男女此場に現はれ、女の手を取り、
「ヤーチン姫様、よくマア無事で居て下さりました。キーリスタン、ユリコ姫で御座います」

此聲にヤーチン姫はハツと氣が付き、

「ア、嬉しや、兩人よくマア來て下さつた。何れの方かは知りませぬが、危き所をお助け下さつた。どうぞ兩人より宜しく御禮を申して下さい」

兩人は眞道彦命に向つて、大地に両手をつき、

兩人「有難う御座います」

と云つた限りあとは嬉し涙にかき暮れて、無言の儘俯むいて居る。

眞道彦「世の中は相身互、御禮を言はれては却て吾々の親切が無になります。マ

アマアゆるりと御休み下さいませ」

と奥の一間に三人を引入れ、あたりの木々の果物を取り来りて饗應し、種々の物

語に時を移した。

谷の彼方にはサアルボース、ホーロケースの部下の者共、ヤーチン姫の最後を

見届けむと右往左往にさざめき乍ら、溪流の面を見つめて居た。庵の中より眞道

彦命は此體を覗き見て、三人に警戒を與へ、暗に乗じて谷間を流に添うて遡り、

アリス山を涉り、漸くにして玉藻の湖水の畔に着いた。

日楯、月鉾の二人は再び聖地を恢復し、教勢旭日昇天の如く天下に輝きたれ共、

吾父の行方の不明なるに心を痛め、湖水の畔に来つて御襖を修し、祈願をこむる

時であつた。數百の取次信徒は此處に集まり、共に感謝祈願の詞を奏上し居る際

であつた。眞道彦命はヤーチン姫、ユリコ姫、キールスタン其外三人の従者と共

に此處に歸り來り、數多の人々の祈りの聲を聞いて、暗を幸ひ、木蔭に身を潛め、様子を伺ひつつあつた。

眞道彦命は聖地の大變より、深くアリス山の溪谷に身を隠し、世を忍び居たりし事とて、玉藻山の靈地は再び三五教に取返され、吾子の日楯、月鉾の二人が三五教を開き居る事を夢にも知らなかつた。それ故今此多人數の祈りの聲を聞いて、若しやホーロケースの一派にはあらざるかと、深く心を痛めつつあつたのである。

日楯は御楔を終り、衆人の中に立ち、宣傳歌を謠ひ始めたり。

神が表に現はれて 善と惡とを立分ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

唯何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ 必ず人を恨むなと

三五教の御教 さはさり乍ら さり乍ら

吾等兄弟兩人は

あななひけう
三五教の神司

國治立大神の

きよ
清き教を宣べ傳ふ

誠の道の宣傳使

まみち
眞道の彦の生みませる

あななひけう
三五教の取次ぞ

たとへてんち
假令天地が變る共

親と現れます吾が戀ふる

まみち
眞道の彦の御行方

此儘見捨てておかれやうか

さだ
定めなき世と言ひ乍ら

何處の空にましますぞ

バラモン教の神司

ホーロケースや其外の

まがみ
魔神の爲に捉はれて

百千萬の苦みを

う
受けさせ玉ふに非ざるか

思へば思へばあぢきなき

わがみ
吾身の上よ身の果てよ

父が此世にましますば

ひとひ
一日も早く片時も

皇大神の恵にて

ひとめ
一目なりとも會はせかし

せめては空行く雁の

たよ
便りもがなと朝夕に

祈る吾等が眞心を

く
汲ませ玉へよ天津神

國津神達八百萬

高砂島を守ります

龍世の姫の御前に

心を清め身を浄め

慎み敬ひ祈ぎまつる。

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つ共虧くる共

高砂島は沈むとも

誠の心は世を救ふ

神の宣らせし太祝詞

確かに證兆あるならば

吾願言を聞こしめせ

玉藻の山は日に月に

神の光も輝きて

旭の豊榮登るごと

榮えませ共あが父の

居まさぬ事の淋しさよ

風吹く度に父の身を

思ひ惱ませ雨の宵

霧の晨に大前に

あが國人の安全を

祈る傍父の身の

恙なかれと祈るこそ

日楯、月鉾兩人が

盡きせぬ願ときこし召せ

神は吾等と俱にあり

神は汝と俱にあり

とは言ふものの情なや

日に夜に研きし吾魂も 父を慕ひし恩愛の
涙に心曇り果て 生死の程も辨へぬ
暗き身魂ぞ悲しけれ ア、惟神々々
御靈幸はひましませよ

と兄弟は互に手を取り、足を揃へて踊りつ、舞ひつ、祈りを捧げて居る。
此歌を聞いて、眞道彦命は始めて吾子の消息を知り、且つ三五教の様子を略悟
り、欣喜雀躍の餘り此場に立出で、二人の吾子に飛びつかんかと許り氣をいらだ
てた。され共、傍にヤーチン姫其他の人々のあるに心を奪はれ、轟く胸をヂツと
怵へて、心靜かに成行を見守つて居た。

(大正一一・八・六 舊六・一四 松村眞澄録)

第五章 難有迷惑(八〇五)

日楯、月鉾の兩教主は數多の取次信徒等に取巻かれ、數多の松明を點じ乍ら、湖の畔を長蛇の陣を作り、蜿蜒として玉藻山の聖地を指して歸り行く。松明の火光は湖面に映じ、恰も水中に火龍の泳ぐが如く、壯觀譬ふるに物なき眺めなりけり。

眞道彦命は松明の後より、ヤーチン姫、ユリコ姫、キールスタンと共に一行に從ひ、聖地に歸り着いた。されど、夜中の事と云ひ、最後より來りし事とて、氣の付く者は一人もなかりけり。

日楯、月鉾の二人は新に建造されたる神殿に進み入り、父眞道彦命の一日も早く行方の分りますよう』……と一心不亂に祈念をし居たり。

そこへ衆人を掻き分け、悠々として現はれ出でたる眞道彦命は、先づ第一に神前に向つて拍手し祝詞を奏上し始めた。二人の兄弟は其姿と云ひ、聲と云ひ、且つ……吾が前に出でて祝詞を奏上する者は、三五教に一人もなし、正しく神の顯現か、但は吾父の歸りませしにあらざや……と心中に且つ疑ひ、且つ歡び、祝詞の終るを待つて居た。

眞道彦命は拜禮を了り、一同に目禮をなし、兄弟の手を握り、涙を流し乍ら、
「吾れは久しく此聖地を逃れ居たる汝が父なるぞ。よくマア無事に生き永らへし
のみならず、再び聖場を復興し得たるは、全く汝等が信仰の眞心を、三五教の大
神御照覽遊ばし、厚く守らせ玉ふものならむ。あゝ有難や、辱なや」
と落涙に咽び、嬉しさ餘つて、其場にハタと打倒れけり。

これを聞きたる數多の取次、信徒等は一齊に神徳を讚美し、神恩を感謝し、欣
喜雀躍の餘り、夜の明くるも知らずに、直會の宴に、日三日、夜三夜を費やしけ
るが、玉藻の聖地開設以來の大盛宴なりける。

眞道彦命は日楯、月鉾二人の兄弟に、美はしき館を作られ、そこに老の身を養
ふこととなりぬ。されど眞道彦は年齢に似合はず、神徳、靈肉共に充實して若々
しく、元氣も亦壯者を凌ぐ許りなり。

玉藻の湖水は東西十五里、南北八里、山中にては可なり大なる湖水なり。玉藻
山の靈地は殆ど其中心に位し、東の端に天嶺といふ小高き樹木密生せる景勝の山
地があつた。そこに日楯をして守らしめ、神殿を新に造り、政教一致の道を布か

しめた。さうしてユリコ姫を宮司とし、聖地の東方を固めしめ、眞道彦命は玉藻山の靈場に在つて、老後を養ひつつヤーチン姫を奉じ、神業に奉仕して居た。

玉藻湖の西端には泰嶺と云ふ靈山があつた。そこには月鉾を配置し、マリヤス姫を神司として奉仕せしめつつありき。玉藻山以東を日潭の聖地と稱し、以西を月潭の靈地と稱へ、オレオン星の如く三座相並びて、三五教の神業に奉仕し、其稜威は臺灣全島に轟き渡り、新高山の山麓なる泰安の都にまで、其勢力は轟いて居た。

泰嶺の鎮守として使へたる月鉾は神の命により獨身生活を續け居たり。マリヤス姫は何時とはなしに月鉾に對し戀慕の念起り、矢も楯もたまらず、神業を閑却して晝夜の區別なく、月鉾に對し心を奪はれ、隙ある毎に寄り添ひて、種々と思ひの丈を述べ立つるのであつた。されど月鉾は信心堅固にして、神の命をよく守り、且つマリヤス姫は泰安の都にましますカールス王の妹たる尊き身の上なる事を知り居たれば、手厳しく戒むる事も得せず、又放逐する事も得ずして、心の限り尊敬を拂つて居た。マリヤス姫の戀路は益々猛烈となり、遂には取次信徒等の

端に至る迄、月鉾とマリヤス姫の間に温かき關係の結ばれある事を固く信じいた
りけり。月鉾は神命と姫との板挟みとなつて、日夜苦慮しつつ其日を送り居たり。
又日楯はユリコ姫と共に夫婦となり睦まじく神業に参加し居たり。

老たりとは云へ、未だ元氣旺盛なる眞道彦命は妻に先立たれ、獨身の生活を續
けて、餘生を此聖地に送り居たるが、ヤーチン姫は危き生命を救はれたる眞道彦
に對して何時とはなしに戀に落ち、晝夜煩悶の結果、面やつれ、身體骨立し、遂
には重き病の床に就きける。

侍女のユリコ姫は天嶺の聖地にあつて、日楯の妻となり、早くも妊娠の身とな
り居たり。それ故ヤーチン姫の重病を看護することさへ出來ざりき。キールスタ
ンは晝夜の別なく、忠實に姫の看護に全力を盡し居たれ共、姫の病は日に日に重
る計りなりける。

眞道彦命は姫の大病を救はむと、朝な夕な神前に祈願をこらしつつありしか共、
少しも其效驗現はれず、尊きエーリスの姫君、如何にもして、元の身體に回復せ
しめむと心膽を碎き乍ら、病床を見舞つた。キールスタンは眞道彦命の來れるに

打喜び、挨拶も碌々になさず、あはてふためきて、ヤーチン姫の枕許に走り寄り、耳に口を寄せ、

キールスタン「あなたの日頃戀はせ玉ふ眞道彦命様が、今茲におみえになりました。た

と囁きし此聲に、姫はムツクと起上り、さも嬉しげに、眞道彦命に向ひ、

ヤーチン姫「眞道彦様、ようこそ御親切に御訪ね下さいました。モウ妾、これぎ

り國替致しても、後に残る事は御座いませぬ。どうぞ妾の死後に於て、夢になり

とも妾の事を思ひ出し玉ふ事あらば、只一言なりと吾名をお呼び下さいませ。こ

れが妾の一生の願ひで御座います」

と恥かしげに言ひ終つて、枕に顔を伏せた。眞道彦は稍當惑の體にて、少時ため

らひ居たりしが、斯く迄吾を慕へる此婦人に對し、今はの際に、餘り沒義道にあ

しらふべきに非ず、何れ死に行く運命の人ならば、優しき言葉をかけて、潔く此

世を去らしむるに若かじ……と決心し、嚴然として身を構へ、

眞道彦「ヤーチン姫殿、あなたの尊き御心、木石ならぬ眞道彦も満足に存じます。

今迄の貴女に對する無情の罪、御赦し下さいませ」

とキツパリ言ひ放つた。ヤーチン姫は此言葉に何となく元氣づき、病の身を忘れて身を起し、膝を摺り寄せ、命の顔を打みまもり、感謝の涙をハラハラと流し乍ら、

ヤーチン「日頃戀ひ慕ふ眞道彦命様、それならあなたは今日只今より、ヤーチン姫の夫、よもや御冗談では御座いますまいなア」

と念を押ししたりしに、

眞道「エー勿體ない、私も神に仕ふる身の上、決して嘘は申しませぬ」

ヤーチン「そんなら……あなたは妾の夫、モウ斯うなる上は、病位は物の數では御座いませぬ」

と瘦こけたる體も俄に元氣づき、顔の色さへ仄紅く、直に井戸端に歩み寄り、身を淨め、自ら衣服を着替へ、身繕ひを終つて、再び眞道彦の前に現はれ來り、ヤーチン「あゝ吾夫様、吾居間へ御越し下さいませ。いろいろと申上げたき仔細が御座います」

と無理に手を曳き、吾居間に姿を没したり。

ヤーチン姫は吾居間に眞道彦命を伴ひ、あたりを密閉して兩人端坐し聲を私めて、

ヤーチン「カールス様、泰安の都の様子は如何になりましたか。セールス姫は如何遊ばされました。どうぞ包まず隠さず、御漏らし下さいませ」

眞道「これは又異なることを承はるものかな。私は祖先代々此玉藻の聖地に住居して、三五教を開く者、畏れ多くも泰安の都のカールス王などとは思ひも寄らぬ御言葉、永の御病氣の爲に、精神に御異状を御來し遊ばされ、カールス王に、私が見えたのでせう。決して私は左様な尊き身分では御座いませぬ。どうぞトツクリと御検め下され」

とヤーチン姫の面前にワザとに顔をつき出して見せた。ヤーチン姫は、兔見斯う見し乍らニヤリと笑ひ、

「如何に御忍びの御身の上なればとて、さう御隠しなさるには及びますまい。妾が淡溪に投げ込まれ、生命危き所へ貴方は妾を助けむと、先に廻つて御救ひ下さ

つた生命の恩人カールス様に間違ひは御座いますまい。最早斯うなる上は、御隠しなさるには及びませぬ。どうぞ打解けて誠の事を仰有つて下さいませ。何程御隠し遊ばしても、どこから何處まで、毛筋の横巾も違はぬあなたの御姿、これが如何して別人と思へませうか」

眞道「これは聊か迷惑千萬、能く御考へ遊ばしませ。カールス様は未だ御年三十に成らせ玉はず、吾は最早五十路の坂にかかつて居る老ぼれ者、何程能く似たりとは言へ、老者と壯者、皮膚の色、聲の色、決して決して同じ筈は御座いませぬ。假令姿は能く似たりと雖も、月に鼈、尊卑の點に於て雲泥の相違ある私何卒御心を鎮められ、眞偽の御判断を下し遊ばす様、御願致します」

ヤーチン「どこまでも用心深いあなたの御言葉、女は嫉妬に大事を漏すとの諺を信じ、分り切つたる秘密を、どこまでも包み隠さむと遊ばすあなた様の御心根が恨めしう御座います。どこまでも御隠し遊ばすならば、最早是非も御座いませぬ。眞道彦命ならば眞道彦命で宜しう御座います。王様に間違は御座いませぬ。どうぞ此處に改めて結婚の式を御擧げ下さいます様に御願致します」

眞道「ア、困つたなア。どうしたら姫様の疑が晴れるであらうか。他人の空似とは云ひ乍ら勿體ない、カールス王様に能く似て居るとは……眞道彦の何たる光榮であらう。否迷惑であらう。ア、どうしたら此難關が切り抜けられようかなア」とさし俯いて溜息をつき居る。

ヤーチン「何程御隠し遊ばしても、カールス王様に間違はありませぬ。あなたはサアルボースやホーロケース兩人の惡者に恐れて、淡溪の畔に身を隠し、眞道彦命と名を變へて、此世を偽る卑怯未練の御振舞、御父上の許し玉ひし夫婦の仲、未だ一夜も枕を交さね共、親と親との許し玉ひし夫婦の間柄、誰に遠慮が御座いませう。あなたは昔はエルサレムに仕へ玉ひし、天使花森彦命の御末孫、高國別や玉手姫の惡神の腹より生れ出でたる、サアルボースや、ホーロケースを父や叔父に持つ、セールス姫が御氣に入らぬのは御尤もで御座います。さり乍ら何を苦んで、泰安の都を脱け出で、あの様な處に身を隠し遊ばしたので御座いますか……それはさうと、妾の生命を助け下さつたのもヤツパリあなた様、都を出でさせ玉ひし其御蔭、盡きぬ縁の證にて、戀しきあなたに助けられ、此里に参りました

のも、結ぶの神の引合せ、これより夫婦心を合せ、三五教の信徒を引つれ、時を見て泰安の都に攻め寄せ、父の業を御継ぎ遊ばす御所存は御座いませぬか。それさへ承はらば、妾は此儘歸幽致す共、あなたの雄々しき心を力として、幽界より御神業を御助け申す覺悟で御座います。生ても死しても、決してあなたの御側を離れぬヤーチン姫の眞心、どうぞ仇に思召し下さいませぬな」

眞道「私には日楯、月鉾と云ふ二人の息子が御座います。私の妻は既に此世を去り、今は此通り位牌となつて、此神殿に御祭りして御座いますれば、どうしても妻を持つことは、私として出来ませぬ。併し乍らあなたの御志を無にするも情なく存じますれば、夫婦の交はりのみは御許しを頂きました、夫婦氣取で御神業に参加させて下さいませ。カールス王様の御身の上にて就て、變事あらば時を移さず、吾々は數多の強者を引具し、泰安の都に乘込んで御助け申し、貴女の望みを達し参らす覺悟で御座います。此事計りは御安心遊ばしませ。決して私はカールス王では御座いませぬ。正眞正銘の眞道彦で御座います」

ヤーチン「エーもどかしや」

と言ひ乍ら、矢庭に眞道彦の利腕にしがみつぎ、涙と共に泣き口説き、身をもたえ居る。

此時何氣なく、隔の襖をおし開き、入り来るキールスタンは此態を見て驚き、物をも言はず一目散に此場を驅出したり。これより眞道彦命とヤーチン姫の間に、情意投合の契約が結ばれたるものとして、竊に三五教の一般に傳へらるる事となりぬ。されど眞道彦命は將來を慮り、姫に對して一指だにも支へざりける。姫は其後病氣追々快復して元の如く容色端麗なる美人となり、聖地の大神殿に朝夕奉仕して、神の威徳は益々四方に輝き亘りぬ。眞道彦命は飽く迄もヤーチン姫を尊敬し、主人の如く待遇して、至誠を盡したるに、ヤーチン姫も漸くにして、眞道彦命のキールス王に非ざりしことを悟り、且つ命の信仰の堅實なるに感歎し、互に胸襟を開きて神業に参加し、時の到るを待ちつつありける。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・六 舊六・一四 松村眞澄録)

第六章 麻の紊れ（八〇六）

泰安の都に於けるカールス王は、最愛のヤーチン姫を失ひ、怏々として樂まず、且つ蛇蝎の如く忌み嫌ひし、サルボースの娘セールス姫を無理矢理に王妃に強要され、懊惱の結果遂に病を發し、淡溪の畔にささやかなる館を作り、これに靜養の名の下に、蟄居せしめらるる事となつた。而して四五の役員、館の内外を警固し、他人の出入を嚴禁しつつあつた。

セールス姫は吾父のサルボースを宰相となし、吾叔父に當るホーロケースを副宰相として、新高山以北の政權を握り、且バラモン教の教主を兼ねて居た。セールス姫の從兄にセウルスチンと云ふ美男子があつた。これはホーロケースの獨息子である。

茲にセールス姫の發起にて、泰安の館を改築し、城塞を築き、國民を使役し、殆ど三年を費やして漸くにして宏大なる城廓は築造された。何時の間にやら、セウルスチンとセールス姫の間には怪しき縁が結ばるる事となつた。セウルスチン

は殆ど城中に坐臥し、セールス姫の背後に在りて、凡ゆる暴政を行はしめた。

茲に城内の重臣共はセウルスチンの傍若無人なるに愛想をつかし、怨嗟の聲城の内外に溢るるに至つた。國內は各所に騷擾勃發し、掠奪鬪爭日々に行はれ、亂麻の如き状態となつて了つた。茲に心有る正しき人々は、泰安城を竊に脱出して、遠く玉藻山の聖地に逃れ、眞道彦命、ヤーチン姫の教に従ひ、花鳥風月を友として、時の到るを待つ者踵を接するに至つた。

泰安城にはセウルスチンの意を迎へて、吾身の名利榮達を望む悪人のみ跋扈し、政教は日に月にすたれて、殆ど收拾す可らざるに至り、國內の各地には革命の煙花上つて、騷擾を起し、民家を焼き、婦女を辱め、財物を掠奪し、亂暴狼藉にらざるなく、恰も餓鬼畜生修羅道を現出せし如く、混亂に混亂を重ね、呪咀の聲は五月蠅の如く湧き充ちた。猛獸毒蛇は白晝に闊歩し、鰐、水牛などは池、沼などを根據とし、民家近く襲ひ來つて、人を傷つけ、國內恰も阿鼻叫喚の慘状を呈するに至つた。され共民心を失ひたる泰安城のセールス姫を始め、サアルボース、ホーロケースの威力を以てしても、最早如何ともする事能はざるに立到つた。

泰安城は最早風前の燈火と、誰云ふとなく稱ふるに至つた。數多の國人は遠く難を避けて、アリス山を越え、天嶺、泰嶺を始め、玉藻山の聖地に避難する者日夜踵を接した。中にも、ホールサース。マイルエース。テールスタン。ホールレンス。ユウトピヤール。ツールレンス。シーリンス。エール。ハールヤール。オーイツク。ヒューズ。アンデーヤ。ニュージエール。

などの錚々たる人物はヤーチン姫を中心として三五教の幹部を組織し、表面的教理を宣布し乍ら、時の到るを待つて、泰安城の佞人輩を却け、カールス王を城内に迎へ入れ、ヤーチン姫を元の如く妃となして、新に善政を布かむ事を心私かに期待しつつ、盛に教理を宣布し、新高山以北の地まで隈なく勢力を扶植しつつあつた。

セールス姫は國內の日に日に亂れ行くを、吾身の不心得より來りしものとは夢にも知らず、セウルスチンを始め其他の邪神共の誣言を信じ、斯の如く吾領内の日に日に亂れ行くは全く玉藻山の靈地に、三五教の教を樹つる眞道彦命頭領となり、ヤー

チン姫、マリヤス姫の王族を擁立し、城内の重臣を言葉巧に引付け、時を待つて泰安城を攻め亡ぼし、眞道彦命自ら、臺灣全島を統一し、政教の兩權を握るものとなし、怨恨止み難く、種々の畫策をめぐらせ共、阿里山を區域として、東南の地は容易に近付く可らず、千思萬慮の結果、土民の中より二三の者を拔擢し、敵地に深く入り込ませ、其内情を探らしめつつありき。

アリス山を區域として東南の地方は、花森彦命の子孫及び遠祖眞道彦命の裔、國內に充ち、清廉潔白の民最も多きに引替へ、新高山以北の地は玉手姫の魔神の子孫蕃殖して、邪惡行はれ、天災地妖切りに到り、住民は常に塗炭の苦みに陥り、一日として安き日とはなかつたのである。

花森彦命の直系なるアークス王の奇禍に係つて上天せし後は、カールス王病に罹り殆ど幽閉同様の身となりたれば、玉手姫の血を引けるサルボースの娘セルス姫の政權を握りてより、其混亂は急速度を以て増し來り、今や國民怨嗟の聲は天に冲する如く、さしもに難攻不落として築造させし泰安城も、何時根底より顛覆するやも計り難き情勢に差迫つて居た。

話變つて、日楯は天嶺の聖地を後に、玉藻の湖邊にユリコ姫の手を携へ、二三の従者と共に湖面を眺めて逍遙しつた。此時揆鉢卷をした男、額に血を夕ラタラと流し乍ら、勢ひ込んで驅來り、従者の一人に衝突し、ヨロヨロとして其場にパタリと倒れて人事不省となつた。日楯は從臣に命じ、湖水の水を彼が面部に注がしめた。彼は漸くにして正氣に返り、額の血汐を拭ひ乍ら、男「何れの方様かは存じませぬが、御無禮を致しました上に、生命迄も御助け下さいまして……此御恩は決して忘れは致しませぬ。私はアリス山の溪谷に住居致す樵夫の一人でムいます。泰安城のセールス姫が部下の惡者に虐げられ、生命カラガラ何處を當途ともなく、ここ迄逃げて參りました。斯く云ふ間にも如何なる追手が來るやも計り知れませぬ。どうぞ一時も早く私を御匿まひ下さいませいか」

と落つかぬ態に頼み入る。

日楯「汝はアリス山の溪谷に住む樵夫と聞きしが、何故セールス姫の部下に追

はるる理由あるか。詳細に物語れよ」

となじれば、其男は涙を拂ひ、

樵夫「私には親一人、子一人の大切なヨブと云ふ娘が御座いました。私の名はハ

ルと申します。セウルス姪がセウルスチンと云ふ立派な大將とアリス山に數多

の家來を召連れ、狩にお越し遊ばした時、吾草庵に立寄り玉ひ、吾娘ヨブを見て

……此女を吾侍女に奉れよ……と仰せられました。天にも地にも、親一人子一人

の間柄、最愛の娘を泰安城内深く連れ行かれては、最早吾々は一生涯親子の對面

は叶ふまじと思ひました故、いろいろと言葉を盡して、御斷りを申上げますれば、

セウルスチンと云ふ御大將の御言葉に……然らば此娘は吾女房に遣はすべし……

と數多の家來に命じ、無理矢理に泣き叫ぶ娘を引抱え、連れて行かれました。私

は一生懸命後を追はむとすれば、セウルスチンは一刀を引抜き、吾眉間に斬りつ

け、猶も數多の家來に命じ……彼が生命を取れよ……と下知致しました。數多の

家來衆は私の後を追っかけて来る。され共山途の勝手を知悉したる私は、巧く間道

を通り抜け、漸くにして此處迄逃げのびました様な次第で御座います。何卒々々

早く御匿まひ下さいませ[□]
と兩手を合せ涙と共に頼み入る。日楯を始めユリコ姫は之を憐み、二三の從者に
彼が身邊を守らせ、天嶺の聖地に連れ歸り親切に介抱させ、漸くにして額の疵は
全快し、茲に日楯の從僕となつて忠實に仕ふる事となつた。併し此男はセールス
姫が意を含めて遣はしたる間者なりけり。

ヤーチン姫やマリヤス姫の 珍の命やカールス王の

泰安館を出でしより 鳥なき里の蝙蝠と

羽振りを利用しセールス姫が 傍若無人の惡政に

居たたまらず重臣は 次第々々に逃走し

玉藻の山の靈場に 身を忍びつつ三五の

教司と身を變じ 花咲く春を待ち居たる

サアルボースやホーロケースの兩人は カールス王を淡溪の

森の彼方に放逐し 形ばかりの館を建てて

四五の部下をば派遣しつ 人の出入を警戒し

苦しめ居たるぞ忌々しけれ。 セールス姫は只一人

閨淋しさに從兄なる セウルスチンを寢間近く

招きて秘密の謀計 酒池肉林の贅澤を

極めて民の苦しみは 空吹く風と聞き流し

あらむ限りの暴政を 行ひければ國人は

益々塗炭の苦みに 堪りかねてか遠近の

山の尾の上や川の瀬に 三人五人と集まりて

大革命の謀計 目引き袖引き語り合ふ

暗夜とこそはなりにけれ。 ヤーチン姫やマリヤス姫の

珍の命は國內の 此慘状を耳にして

心は矢竹と逸れども 詮術もなき今の身の

神に祈りて木の花の 開くる春を待つばかり

松の名に負ふ高砂の 胞衣と聞えし此島も

今は果敢なき曲津身の 荒ぶる世とはなりにけり

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませと

朝な夕なに眞心を こめてぞ祈る神の前

眞道彦を始めとし 日楯、月鉾諸共に

日月潭の湖に 朝な夕なに楔して

高砂島の安泰を 只管祈る眞心は

いつしか願ひ龍世姫 國魂神の功績に

常夜の暗も晴れ渡り 天津御空に日の神の

影も豊に昇りまし 神の御稜威も高砂の

尾の上の松の末永く 榮えよ榮え何時迄も

世は平けく安らけく 治まりませと一同が

朝な夕なの神言を 神も諾なひ玉ふらむ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

三五教の御教を 此神島に隈もなく

完全つまらに委曲つばらに宣のり傳つたへ
昔むかしの神代かみよの其儘そのままの
清きよき心こころに上うへしたの
司つかさも民たみも睦むつび合あひ
榮さかえ久ひさしき松まつの世よを
來きたさせ玉たまへと眞心まごころを
こめて祈いのるぞ尊たふとけれ。

セールス姫ひめの間者かんじゃとして入いり込こみしハールを始はじめ、其外そのほか數名すうめいの間者かんじゃ、日月潭じつげつたんを
始はじめ、玉藻たまもの山やまの聖地せいちに入いり込こみたる件けんは、一々いちいち述のぶるも、くどくどしければ、
今いまは之これを略りやくし事ことの序ついでに述のぶる事こととなすべし。

(大正一一・八・六 舊六・一四 松村眞澄録)

第二篇 暗黒あんこくの叫さけび

第七章 無痛の腹（八〇七）

泰安城はセールス姫、サアルボース、ホーロケース、セウルスチン等の横暴極まる悪政に、國民怨嗟の聲は、日に月に高まり來り、漸く革命の機運熟す。シヤールタンの一派とトロレンスの一派は、東西相呼應して、泰安城に攻め寄せ、今やセールス姫以下の身邊は、最も危急の地に迫つて來た。此事早鐘の如く臺灣全島に響き渡り、玉藻山の聖地には一しほ早く或者の手より其真相を報告されたり。茲にヤーチン姫、眞道彦命の部下に仕へたる神司ホールサーズ、マイルエース、テールスタン、其他數多の幹部連は八尋殿に集まつて、此度の泰安城に於ける大革命的騷擾に對して、如何なる處置を取るべきかを協議したりけり。

眞道彦命を始め、日楯、月鉾は八尋殿の中央なる高座に現はれて、此會議を監督する事となりぬ。

ホールサーズは、先づ第一に高座に登り、一同に向つて開會の挨拶を述べ、徐に降壇した。次でマイルエースは、今回の恰も議長格として意氣揚々と登壇し、

一同に向ひ、

皆様、今日此八尋殿に炎暑を構はず、御集會下さいましたのは、吾々發起人と
して實に感謝の至りに堪へませぬ。就きましては諸君に於いても略御承知の通り、
セールス姫其他の暴政に依つて、國民塗炭の苦しみを受け、今や此苦痛に堪へ兼
ねて、新進氣鋭の國民の團體は、シャーカルタン、トロレンスの首領に引率され、
泰安城へ攻め寄せたりとの事で御座います。承はればシャーカルタン、トロレン
スはバラモン教の錚々たる神司との事、彼破竹の勢を以て泰安城を乗り取り、又
もや、バラモンの暴政を布くに於ては、世は益々混亂を重ね、遂には三五教の聖
地迄も蹂躪され、吾々は此島より放逐されねばなくなるのは、火を睹るより
も明かな事實で御座いませう。これに就て私は考へます……一日も早く三五教の
信徒を率ゐ、泰安城に向つて言靈戦を開始し、シャーカルタン、トロレンスの一
派を言向け和し、三五教の部下となし、其機に乗じて全島の支配權を握らば、三
五教は萬世不易の基礎が建ち、又國民も泰平の恩恵に浴する事と考へます。……
皆さまの御意見は如何で御座いませう。どうぞ此演壇に登りて、御感想を述べて

頂きたう御座います^{いただ}」
と言つて、壇を降り吾席に着いた。此時肩を揺り兩手の拳を握り締め、堂々として登壇したのはテールスタンであつた。満場を睥睨し乍ら聲を勵まして言ふ。
テールスタン「この聖地は遠き神代より、眞道彦命様の遠祖茲に鎮まり玉ひ、至仁至愛の三五教を樹立し、無抵抗主義を遵守して、ここに國魂神の神力を以て數多の國民を教へ導き玉ひつつ、多く年所を経玉ひました。併し乍ら、餘り極端なる無抵抗主義の爲に追々其領域は狭められ、僅に日月潭の附近にのみ其勢力を維持して居られたのは、諸君も御承知の通りで御座います。然るに泰安城に於てセールス姫を中心とする悪人輩の日夜の行動に嫌きたらず、吾々始め此席に列し玉ふ幹部の方々は、顯要の地位を棄てて、現世的に無勢力なる此聖地に集まり、信仰三昧に入り、殆ど政治欲を絶つて、花鳥風月を友となし、其日を送り來りしも、決して無意味に吾々は光陰を費やして居たのではありませぬ。時來らば國家の爲に全力を發揮し、カールス王を助けて、元の地位に復やし奉り、完全無缺なる神政を布き、再び元の地位に立たむと欲するの念慮は一日も忘れた事はありません。

せぬ。諸君に於ても、此席に列せらるる方々は、十中の八九迄元は泰安城の重要な地位に立たせ玉ひし方々なれば、吾々と御同感なるべし。吾々は此聖地に來りてより、三五教は蘇生せし如く、日々に隆盛に赴きたるも、全く人物の如何に依る事と考へられます。諸君は瀕死の境にありし三五教をして、斯の如く隆盛に赴かしたる能力者で御座いますれば、キツと此腕前を活用して泰安城に向ひ、シャーカルタン、トロレンスの向うを張つて、此際一戦を試み、セールス姫を言向け和し、且又シャーカルタン、トロレンスの一派を吾等の言靈に歸順せしめ、全島の政教兩權を掌握するは、此時を措いて何時の日か來るべき。曠日、瀟久徒に逡巡して、彼等に先を越されなば、吾々は何時の日か頭を擡ぐるを得られませうか。何卒皆様に於ても御熟慮……否御即考あつて、速かに御賛成あらむ事を希望致します」

と云ひ終つて悠々と壇を降る。拍手の聲は雨霰の如く場の内外に響き渡つた。此時末席よりセールス姫の間者として入り込み居たるハールは壇上に現はれ、ハール「皆さまに、末席の吾々恐れげもなく、此高座に登りて、御意見を承はり

たしと斯く現はれました。マールエース、テールスタンの幹部方の御意見は、末輩の私に於ても、極めて賛成を致します。就いては三五教の信徒を以て言靈軍を組織し、泰安城へ攻め寄せ玉ふ目的は此度の暴動を鎮定し、シャールカルタン、トロレンスの一派に對して痛棒を加ふるにあるか、但しセールス姫を中心とする泰安城の重役に對して、大痛棒を與ふるの覺悟で御座るか、此點を、何卒明瞭に御示し頂きたう御座います。先づ出陣に先立ち、敵を定めておかねばなりません。と心ありげに述べ立てた。此時ホールサースは再び壇上に現はれて言ふ。

「天は必ず善人に組す。吾々は正義の爲に戦ふのである。セールス姫にして悪ならば、彼を懲し、又善ならば彼れを輔けん。シャールカルタン、トロレンスにして其目的、國家民人の爲ならば吾は彼を助けむ。未だ何れを善とも悪とも定め難し。さり乍ら、カールス王の御病氣を楯に、淡溪の畔に小さき館を造り、之に幽閉し、セウルスチンの如き賤しきホーロケースの倅を重用して、悪政を布くセールス姫の行動に居たたまらず、吾等一同は此聖地に逃れ來りし者なれば、此度の大騒動も其原因は、セールス姫一派の暴政に依りて勃發せしものたる事は察するに餘り

あり。要するに此度の神軍はカールス王を御助け申上げ、再び元の泰安城に立て直す目的と思へば間違なからうと思ひます」

とキツパリ言つてのけた。ハールは再び口を開いて、

「此度の神軍幸にして勝利を得、カールス王を救ひ出だし、再び王位に立たしめなば、セールス姫を正妃となし玉ふ御所存なるか。但はヤーチン姫を以て正妃と定め玉ふ考へなりや承はりたし」

と呼はつた。ホーレンスは始めて登壇し、

「吾々の考ふる所は、カールス王を救ひ奉り、ヤーチン姫を正妃となさむ事を熱望して居ります。さうなればカールス王もヤーチン姫も日頃の思ひが遂げられて、圓滿に政事が行はれ、國民の父母と仰がれ玉ふ瑞祥の來る事と信じて居ります」

ハール「ヤーチン姫様は最早昔とは御心が變つて居る様に思はれます。此事は第一教主の眞道彦様の御意見に依らねばなりません。一般の噂に依れば、内面的に御夫婦の關係が結ばれ居ると云ふ事、むしろ神軍の勝利を得たる曉は眞道彦様を政教兩面の主權者となし、ヤーチン姫様を其妃と公然遊ばしたら如何で御座い

ませう。その方が餘程治まりが良き様に考へられます」

テールスタン「吾々は要するに泰安城の主権者を選び其幕下に仕へて元の位地に

歸りさへすれば良いのである。主権者がカールス王であらうと、眞道彦命であら

うと、問ふ所ではありません。吾々の考ふる所では、眞道彦命様必ず心中に泰安

城の王たるべきことを御期待遊ばされある事と確信致し、泰安城を棄てて茲に集

まつて来た者で御座います。眞道彦命様にして、只單に教法上の主権者を以て甘

んずるの御意志ならば吾々は元より斯様な所へ首を突込む者ではありません。諸

君に於かせられても、吾々と同感ならむと察します」

一堂は拍手の聲に満たされた。

眞道彦は憤然として身を起し、壇の中央に現はれ、慨歎の情に堪へざるもの

如く、暫くは壇上に目を閉ぎ悄然として立つた儘、兩眼よりは涙さへ流して居る。

漸くにして口を開き、

眞道彦「只今の幹部方の御話を聞き、此眞道彦に於きましたは、實に青天の霹靂

と申さうか、寢耳に水と申さうか、驚きと慨歎とに包まれて了ひました。世の中

に誤解位恐ろしきものは有りませぬ。各自の心を以て人の心を推し量ると云ふ事は、實に對者たるもの恐るべき迷惑を感じます。吾々は祖先以來、國魂の神を齋り、三五教の教を確く遵守し、少しも政治に心を傾けず、萬民を善道に教化するを以て最善の任務と衷心より確く信じ、且つ神慮を萬民に傳ふるを以て、無限の光榮と存じて居ります。然るに只今の幹部方の御意見を承はり見れば、私を以て政治的救世主の如く思つて居られるやうで御座います。又王族たるヤーチン姫様と私の間に、何だか怪しき關係でも結ばれある様な語氣を洩らされました。私は實に心外千萬でなりませぬ。どうぞ三五教の精神と、吾々の誠意を能く御諒解下さいまして、大慈大悲の大神様の御旨に叶はせらるる様、神かけて祈り奉ります。重ねて申して置きますが、決して此眞道彦は物質的の野心も無ければ、政治的欲望は毫末も有りませぬ。又皆様に推されて政治的權威を握らうとは、夢寐にも思ひませぬ。此事は呉々も御承知をして頂きたう御座います。』

と云ひ終り、憮然として、吾居間に姿を隠した。眞道彦の退場に連れて、日楯、月鉾の兄弟も亦満場に目禮し、悄然として父の後に従ひ此議席を退場したり。

後には氣兼ねなしの大會場は口々に勝手な議論が沸騰し出した。セールス姫の間者として豫てより入り込み居たりしカントンと云ふ男、忽ち壇上に現はれ衆に向つて言ふ。

カントン「皆さま、只今眞道彦命が仰せられた御言葉、何と御觀察なされますか。吾々の貧弱なる智識を以て教主の御心中を測量致すは、少しく烏呼の沙汰では御座いますが、あの御言葉は、吾々は心にも無き嘘言を云つて居られるのだと思ひます。政治的に野心は毛頭無いと仰せられたのは、要するに大に有りといふ謎で御座いませう。注意周到なる教主はセールス姫の間者、もしや信徒に化けて忍び入り居るやも知れずと心遣ひ、……ヤアもう英雄豪傑の心事は容易に計り知れないもので御座います。吾々はキツと眞道彦命、泰安城に現はれ、自ら主権者となり、最愛のヤーチン姫を妃として君臨せむと心中企畫し居らるる事は、少しも疑ふの餘地なき事と確く信じます。幹部の方々の御意見は如何で御座いますか」

一同は「賛成々々、尤も尤も」と拍手して迎へた。カントンは得意の鼻を蠢かし乍ら兩手を鷹揚に振りつつ、壇を降りて自席に着く。

幹部の一人と聞えたる頑固派の頭領株エールは、慌しく壇上に立上り、
吾々は素より泰安城の重臣としてカールス王に仕へ、殊恩に浴したる者、然る
にサアルボース、ホーロケース一派の悪臣の爲に大恩あるカールス王を御病氣を
楯に、淡溪の畔に幽閉し奉り、悪鬼の如きセールス姫、權を恣にし、暴虐日々
増長し、無念の涙やる瀬なく、如何にもしてカールス王を救ひ奉り、元の泰安城
に立直さむと肺肝を碎きつつあつた者で御座います。然るに天の時未だ到らず、
涙を呑んで時の到るを待つ内、此玉藻山の聖地に、現幽二界の救世主現はれたり
と聞き、城内を脱出して、茲に三五教の信徒となり、幹部に列せられ、時を得て
カールス王の爲に全力を盡し、忠義を立てむと決意し、顯要の地位を棄て、無抵
抗主義の三五教に身を寄せて居たのであります。併し乍ら吾々日夜眞道彦の擧動
を偵察するに、畏れ多くもヤーチン姫と怪しき交際を結ばれたる如く感ぜられ、
憤怒の情に堪へませぬ。又一般の噂もヤハリ教主とヤーチン姫との交際の點に就
て、ヒソビソと怪しき噂が立つて居ります。火の無い所には決して煙も立つもの
ではありませぬ。これに付いて吾々は考へまするに、教主は最早ヤーチン姫を内

縁の妻となし居らるる以上は、假令カールス王を救ひたりとて、一旦汚されたる
ヤーチン姫をして、堂々と王妃に薦めまつる事は、吾々臣下の身として忍びざる
所で御座います。又教主はヤーチン姫を自己薬籠中の者となし、カールス王を排
斥して自ら治權を握る野心を包藏さるるは、一點疑ふの餘地は無からうかと信じ
ます」

と憤然として壇上に雄健びし、足踏みならして鼻息荒く降壇した。

カントンは再び壇上に上り、

「吾々は時節の力と云ふ事を確く信じて居る者で御座います。泰安城の主權者が、
カールス王だらうが、眞道彦命であらうが、但はセールス姫であらうが、國民の
歓迎する主權者であれば良いので御座います。天下公共の爲には些々たる感情の
爲に左右されてはなりません。只今エールさまの御言葉は一應御尤もでは御座
いまするが、それはエール其人を本位としての議論であつて、天下に通用しにく
い御話だと思ひます。カールス王に殊恩を蒙つた其御恩に酬いむ爲に種々と肺肝
を碎かせらるるは、それは主従としての關係上、主恩に酬いむとする眞心より出

でさせられたる感情論であつて、言はば乾兒が親分の鼻屑をする様なものであります。國民一般より見れば餘り問題とならない議論だと、私は思ふのであります。吾々の如き無冠の太夫は別にエール様の如く、特別の恩寵を被つた覚えもなければ、又カールス王に對して一片の恨みも持ちませぬ。唯此際は國家の爲に善良なる主權者を得、萬民鼓腹擊壤の享樂を得る様に、世の中が進みさへすれば、それで満足であります。諸君の御考へは如何で御座いますか。小田原評定にあたら光陰を空費し、時機を失するよりは、手取早く話を決めて、早く救援に向はねば、國家は益々修羅の巷の慘状を極め、國民の苦しみは日を逐うて烈しくなるでせう。何は免もあれ、出陣か非出陣か、一時も早く諸君の誠意に依つて御決定を願ひます。

『
と言ひ終るや、以前のエールは烈火の如く憤り、忽ち壇上に驅上がり、辨者の面上を目あてに鐵拳を亂打したるより、滿場總立ちとなりて、
『ヤレ亂暴者を捉へよ』
とひしめき立ちぬ。エールは敏捷にも混亂の際を窺ひ、何處ともなく、此場より

姿を隠したりける。

（大正一一・八・八 舊六・一六 松村眞澄録）

第八章 混亂戦（八〇八）

エールは亂暴を働き、大勢に取巻かれ、進退谷まつて、捷しこくも満座總立となつて立騒いで居る人々の股をくぐり、聖地を後に、二三の知己と共に、アーリス山を越え、泰安城の間近の山に身を忍ばせ、形勢如何にと窺ひつつあつた。

一方八尋殿に於てはホールサーズ、マイルエース、テールスタン、ホールレンス其他の幹部連は再び議論の花を咲かした。テールスタンは立上りて、決心の色を面に現はし、満座に向つて云ふ。

「満場の諸君よ、一時も早く出陣を致さうでは御座らぬか。グツグツ致して居れば、シャーカルタンやトロレンスの一派の爲に、泰安城を占領せられ、彼が手に

依つてカールス王を救ひ出す事あらば、吾等が今迄の希望も苦心も全く水泡に歸すべし。六莒十菊の悔を後日に残すよりは、若かず、一刻も早く衆を率ゐ、破竹の勢を以て、旗鼓堂々と泰安城に押寄せ、セールス姫の一派を撃退し、且つカールス王を救ひ、シャーカルタン、トロレンスの一派に先鞭をつけ、本島の統治權を掌握致すは、今を措いて又とある可らず。千戴一遇の此好機、躊躇逡巡して、後日に吞噬の悔を残す事勿れ。如何に眞道彦命、表面無抵抗主義を唱へ給へばとて、決して其本心には非ざるべし。先んずれば人を制すとかや、吾等率先して衆を引率し、泰安城に立向ひなば、眞道彦命も、ヤーチン姫も必ず承諾し玉ふべし。三五教の教主として、あらはに神軍を率ゐ、泰安城の主權を握らむなどは口外し玉はざるは當然である。そこは吾々幹部たる者一を聞いて十を悟るの知識なかる可らず。學古今を絶し、識東西を貫き玉ふ教主にして、目前に落下し來る此天運を袖手傍觀して受け入れ玉はざるの理あらむや。不肖乍らテールスタンの觀察は謬りますまい。皆様、何卒御贊成を願ひませう』

一同は何となく心勇み、歡聲をあげ、贊意を表しける。

茲こゝにホルサーズを大將たいしやうと仰あふぎ、マールエース、テールスタンを副將ふくしやうとし、日月潭げつたんの信徒しんとを加くはへて、殆ほとんど三萬有餘人さんまんいうよにん、竹槍たけやりを携たづへ、愈時いよいよときを移うつさず、泰安城たいあんじやうに立たち向むかふ事こととなつた。

眞道彦命まみちひこのみことは大に驚おどろき、一同いちどうに向むかつて吾意わがいにあらざる事ことを言葉ことばを盡つくして、説とき明あかせ共ども、逸はやり切きつたる數多あまたの人々ひとびと、眞道彦まみちひこの言葉ことばを却かへつて逆さかに取り、容易よういに一人ひとりとして其命そのめいに従したがふ者はなかつた。眞道彦まみちひこは止やむを得えず、幹部其他かんぶそのたに推おされて出陣しゅつちんする事こととなつた。日楯ひたて、月鉾つきほこの兄弟きやうだいを天嶺てんれい、泰嶺たいれいの兩所りやうしよに残のこし、玉藻山たまもやまの聖地せいちにはヤーチン姫ひめ、マリヤス姫ひめをしてこれを守まもらしめ、馬上ばじやうゆたか豊ひきに衆しうを率ひきゐて、心こころならずも泰安城たいあんじやうに向むかふ事こととなつた。あゝ眞道彦命まみちひこのみことの運命うんめいは如何いかになるらむか。先さきに逃走たうそうしたるエールは、セールス姫ひめの間者かんじやとして玉藻山たまもやまに忍しのび入り込こみたるマルチル、ウラール、キングス、トーマス、マーシヤル等らの一味いちみと共に、數十人すうじふにんの部下ぶかを集あつめ、アリス山ざんの北麓ほくろくに、眞道彦まみちひこの神軍しんぐんの到いたるを待伏まちぶせて居ゐた。先頭せんとうに立たつたるテールスタンはこれを見みて大音聲だいおんじやう、
「ヤア、エール、汝なんぢは聖地せいちを脱出だつしゅつし、少數せうすうの一味いちみの奴原やつばらを引率いんそつし、吾等われらが大軍たいぐんを

待討^{まちう}たむとするか。弱小^{じやくせう}の味方^{みかた}を以^{もつ}て、雲霞^{うんか}の如^{ごと}き大軍^{たいぐん}に抵抗^{ていかう}せむとするは、實^{じつ}に險^{けん}呑^{のん}千萬^{せんばん}であらうぞ。それよりも悔^くい改^{あらた}めて、再^{ふた}び吾軍^{わがぐん}に加^{くは}はり、共^{とも}に共^{とも}に拔^{ばつ}群^{ぐん}の功名^{こうみやう}を致^{いた}さうではないか」

と教^{をし}ゆる様^{やう}に言^いつた。エールは笑^{ゑがほ}顔を以^{もつ}てこれを迎^{むか}へ、つかつかとテールスタンの前^{まへ}に近^{ちか}づき、堅^{かた}く手^てを握^{にぎ}り、兩眼^{りやうがん}より熱^{ねつ}涙^{るい}を落^おし乍^{なが}ら、

エール「あゝテールスタンよ、よくも云^いつて下^{くだ}さつた。一時^{いちじ}の怒^{いか}りより聖^{せい}場^{ぢやう}を脱^{だつ}出^{ゆつ}し、泰安^{たいあん}の都^{みやこ}近^{ちか}く立^{たち}歸^{かへ}つて見^みれば、シャールカルタンやトロレンスの勢^{いきほひ}、頗^{すこぶ}る猖^{せう}獪^{けつ}にして侮^{あなど}る可^{べか}らず。吾等^{われら}少^{せう}數^{すう}の味^み方^{かた}を以^{もつ}て彼等^{かれら}に當^{あた}るとも、何^{なん}の效^{かう}果^{くわ}もなきの

みか、却^{かへつ}て自^{みづか}ら滅^{めつ}亡^{ぼう}の淵^{ふち}に飛^とび込^こむ如^{ごと}きもので御^ご座^ざる。それにつ^ついても、カールス王^{わう}の御^お身^みの上^{うへ}、サルボースの一派^{いつぱ}、淡^{たん}溪^{けい}の館^{やかた}を十^と重^へ廿^た重^へに取^{とり}巻^まき、シャール

ルトンの寄^よ手^てに向^{むか}つて王^{わう}を奪^{うば}はれまじと嚴^{きび}しく警^{けい}固^こし居^をれば、王^{わう}の命^{めい}は早^{はや}旦^{たん}夕^{せき}に

迫^{せま}れり。思^{おも}ふにセールス姫^{ひめ}一派^{いつぱ}は、シャールカルタン等にカールス王^{わう}を奪^{うば}はれ、こ

れを擁^{よう}立^{りつ}して泰安^{たいあん}城^{じやう}に新^{あたら}しき政^{せい}事^じを布^しくならば、吾等^{われら}一派^{いつぱ}の一大^{いちだい}事^じと心^{こころ}得^え、王^{わう}を寄^よ手^てに渡^{わた}さじと全^{ぜん}力^{りよく}を籠^こめて守^{まも}り居^あるもの如^{ごと}し。さり乍^{なが}ら寄^よ手^ての勢^{いきほ}益^{ます}々^{ます}猛^{まう}烈^{れつ}に

して、到底守る可らざるを知らば、サアルボースの一派は後難を恐れて、王を弑し、遁走するやも計り難し、これを思へば一刻も猶豫す可らず。何卒三五教の神軍の一部を吾に賜はらば、王の生命は安全に守り奉る事を得む。曲げて此儀御許しあれ」

と言葉を盡して頼み入る。テールスタンは直ちに自己の率ゆる神軍を以てエールの請ふが儘に、淡溪の王が館に應援の爲、出で向ふ事となつた。

淡溪の館にはサアルボースの部下の者十重二十重に取巻き王の警固に當つて居る。トロレンスの一隊は淡溪の館に攻め寄せ、王を奪はむとして、サアルボースの部下と衝突し、互に一勝一敗、死力を盡して戦ひしが、寄せ手の勢刻々に加はり、サアルボースは最早身を以て免るの餘儀なきに立到つた。カールス王を敵手に渡しては、後日の爲に面白からずと、今は覺悟を極め、王に向つて自殺を逼り、萬一肯んぜざれば、サアルボース自ら手を下して、王を弑せむとする折しもある、何處よりともなく、一塊の大火光飛來して、サアルボースの前に爆發し、大音響を立てた。サアルボースは忽ち失心して其場に倒れた。

トロレンスの寄手は勝に乗じて早くも館内に亂入せむとする。時しもあれ、テールスタン、エールの率ゆる竹槍隊は雲霞の如く鬨を作つて此場に現はれ來り、忽ち寄手に向つて遮二無二突込めば、トロレンスを始め全軍狼狽の結果、泰安城を指して敗走して了つた。

サアルボースは漸くにして正氣づき、あたりを見れば、トロレンスの寄手は影もなく、それに代つてテールスタン、エールの三五軍の襲來せるに再び肝を潰し、僅に身を以て此場を逃る事を得た。テールスタン、エールはカールス王の前に出で、恭しく手を仕へて王の危急を知り、遙々救援に向ひし事を奏上した。王は立つて兩人が手を固く握り、涙と共に感謝の辭を與へた。

これより二人は王を奏じ、淡溪を溯り新高山の岩窟を假りの城塞となし、テールスタンは一軍の半を割いて泰安城の攻撃に向ひ、残りの神軍はエールこれを統率し、王の身邊を堅く守り、時機を窺ひつつあつた。これよりテールスタン、エールの二人はカールス王の殊寵を蒙り、得意の時代に見舞はるる事となりぬ。

一方泰安城にてはセールス姫、セウルスチン、ホーロケースの大將株、城内の兵を指揮し、華々しく立働き、容易に落城せず。寄せ手のシャーカルタンの攻軍も素より烏合の衆なれば、稍厭氣を生じ、内訌を起し、内部より瓦解せむとする危急の場合であつた。

此時淡溪より逃げ去つたるサアルボースは、散亂せる味方を集め、應援の爲に此場に集まり来る。民軍の勢は稍回復し、此機を逸せず一擧に攻め寄せむと城塞を攀ぢ、亂入せむとする時しも、セールスタンの率ゆる一隊、後方より鬨を作つて攻めよせ來り、民軍は内外より敵を受け、再び窮地に陥り最早敗走の餘儀なき立場となつた。此時後方より眞道彦命の率ゆる大軍は、ホーロケース、マールエースと共に軍を三隊に分ち、三方より泰安城に攻寄せ來る。此勢に辟易し、セールス姫、セウルスチン、ホーロケース、サアルボースも又寄せ手の民軍も、敵味方の區別なく、雪崩の如く敗走したり。

茲にセールスタンの率ゆる三五軍と、眞道彦命の率ゆる三五軍とは、ゆくりもなく大衝突を來し、セールスタンは形勢非なりと見るより、部下と共にカール

ス王の臨時の城塞に引返し、虚實交々眞道彦命の暴状を進言したり。カールス王は怒り心頭に達し、如何にもして眞道彦一派を滅ぼさむと、腕を扼し、齒を喰ひしばり、怒りの涙ハラハラと流し、無念さを堪へて居たり。

一方眞道彦命の神軍は悠々として泰安城に進み入り、眞道彦命を始め、ホールス、マールエースの副將以下、ホーレンス、ユートピヤール、ツーレンス、シーリンス、ハーレヤール、オーイツク、ヒューズ、アンデーヤ、ニユヂエールその他の勇將と共に、チユーリックを脱ぎ捨て戦勝の酒宴を催し、數多の軍卒を犒うた。城内の奥殿には三五教の大神を齋り、戦勝の禮代として各神殿に音楽を奏し、舞曲を演じ、神慮を慰め、城内は忽ち天國樂園の如くになつて來た。

眞道彦命はホールサーズに命じ、玉藻山の聖地に在るヤーチン姫、マリヤス姫を奉迎して泰安城に歸らるべしと、信書を持たせ、急遽、聖地に遣はした。又一方カールス王の御在處を探り得たれば、マールエースをして少しの從者と共に、王を泰安城に奉迎せしめむと、急ぎ派遣したり。

ホールサーズはヤーチン姫、マリヤス姫を首尾克く迎へ歸りたれ共、何故かマール

ルエースは旬日じゆんじつをふ経れ共歸り來らず、何の音沙汰おとさたもなきに不審ふしんを抱き、此度はホー
レンスをして再び、王を迎ふべく、王の陣所ぢんしょに差し向けた。これ又幾日またいくにちを経るも
何の音沙汰無ければ、ユートピヤール、ツールレンス、シーリンス、ハーレヤール
をして王を迎ふべく差し遣はしたれ共これ又何の音沙汰も無かりけり。

茲ここに眞道彦命まみちひこのみことは稍不安の念ねんに驅られ乍ら、此度はヤーチン姫ひめを促し、自ら王の
隠れ家に到りて、泰安城たいあんじやうに奉迎せむとし、マリヤス姫ひめ其他その他に城を守らしめ、淡溪
の上流じやうりゆうなる王の陣屋ぢんやに自ら出張しゆつちやうしたりける。

(大正一一・八・八 舊六・一六 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・七 王仁校正)

第九章 當推量あてすゐりやう〔八〇九〕

テールスタンは泰安城たいあんじやうに於て、眞道彦命の神軍しんぐんより手厳てきびしく撃退げきたいされたる無念むねん

を晴らさむが爲に、エールと共にカールス王に向つて口を極めて、眞道彦命一派を讒訴した。

眞道彦命は斯かる王の怒りに觸れ居ることは夢にも知らず、マールエースをして、王を泰安城に迎へむと、誠意をこめて遣はしたるにも關はらず、エール等の讒訴を固く信じたるカールス王は容易に怒り解けず、眞道彦の使者を悉く牢獄に投じ、日夜エールをして厳しく訊問せしめつつあつた。眞道彦命は幾度使を遣はすも、一人として歸り來らざるに不審を抱き、ヤーチン姫と共に、王の陣屋に伺候し、誠意をこめて王を泰安城に迎へむと、遙々訪問したりける。

手具脛ひいて待つて居たエール一味の者は、有無を言はせず、ヤーチン姫、眞道彦命を牢獄に投じ、日夜訊問を續けたり。第一に王の前に堅く兩手を縛められて引出されたるは、マールエース、ホールレンスの二人であつた。正面にカールス王は閻羅王の如く嚴然として眼を光らせ、エール、テールスタンは左右に赤面を曝し、目を怒らして、訊問の矢を放ちある。王はマールエースに向ひ、カールス王「汝は玉藻山の聖地に永らく入り込みて、眞道彦命と何事かを企畫し

つつありしと聞く。委細を詳さに陳辨せよ』

と厳しく問ひかくなれば、マールエースは、

「ハイ私は王が御病氣の爲、淡溪の館に御退去の後はセールス姫、セウルスチン
其他の悪人輩の行動、見るに忍びず、時を待つてカールス王様の御親政に復歸し
奉らむと心を決し、玉藻山に身を逃れて、時機の到るを待ちつつありましたので
御座います。然るに此度泰安城の大變事を聞き、王の御身邊を危み、救援の爲に
神軍を率ゐ参りました。外にそれ以上の目的は何も御座いませぬ。何卒公平なる
御判断を願ひ奉ります』

カールス王「汝の申す事、よもや間違はあるまい。それに就いて、汝に尋ねたき
事がある。ヤーチン姫と眞道彦命二人の間の關係は存じて居るや』

マールエース「ハイ御兩人共忠實に御神務に奉仕されて居られました。別に噂に
のぼつて居る如き醜關係は、私としては認められませぬ』

カールス王「テールスタンやエールも永らく汝の如く聖地に入り込んで、幹部に
列して居た者、彼れら兩人の言ふ所に依れば、眞道彦はヤーチン姫と怪しき關係

を結び、時を得て泰安城を占領し、臺灣島の主權を握り、自ら王と稱する計畫を立てて居つたではないか。斯の如く歴然たる二人の證人ある上は、隠すも無駄であらう。有態に白状せよ』

マールエース「眞道彦命に限りて、決して左様な政治的野心も、又醜行も、毛頭御座いませぬ。三五教の古來の主義として、教主たる者は政治的野心を持つ可らずと云ふ厳しき掟が御座います。信心堅固なる眞道彦命に於て、如何して左様な御心を抱かれませう。全く人々の邪推より出でたる噂で御座いますれば、何卒神直日大直日に見直し聞直し、公平なる御判断を願ひ奉ります』

王は烈火の如く憤り、

カールス王「汝、マールエース、其方は眞道彦と心を協せ、泰安城を占領し、政治の全權を握り、且つ吾れを排斥せむとの惡虐無道の一類であらう。……ヤア、エール、一刻も早くマールエースが事實を白状致す迄、牢獄に投じ、水責め火責めの責苦に會はしても、事實を吐露せしめよ』

エールは傍の從卒に命じ、目配せすれば、從卒はマールエースを荒々しく引立

て、暗黒なる牢獄の中に投込んで了つた。

カールス王は、續いてホーレンスに向ひ、

カールス王「汝はホーレンス、久しく玉藻山の聖地に参り居りし者、エール、テールスタンの申した事に間違はあるまいなア」

ホーレンス「ハイ決して間違は御座いますまい。ヤーチン姫様と眞道彦命の醜關係は、私は實地目撃は致しませぬが、これは随分喧しき噂で御座います。御兩人

の間柄はつまり公然の秘密も同様、三歳の童兒に至る迄知らぬ者は御座いませぬ」カールス王「眞道彦はヤーチン姫と關係を結び、將來は泰安城の國王となり、ヤー

チン姫を妃とし、日頃の野心を遂行し、且つ此カールスを目の上の瘤と忌み嫌ひ、排斥せむとの計畫を立て居りしと云ふ事、事實であらうなア」

ホーレンス「ハイ、夫も私の考へでは事實だと信じて居ります。此度神に仕ふる身であり乍ら數多の部下を引率し、泰安城へ救援の名の下に攻寄せ來りしは、全

く王者たらむとの、野心より起つたる出陣と考へるより途は御座いませぬ」王「あゝさうであらう。其方は正直な奴だ。サア只今より縛めの繩を解いてやら

う

エールは從卒に命じ、ホーレンスの縛めを解いた。ホーレンスは大いに喜び、三拜九拜して、王の意を迎ふる事のみ熱中し、夫が爲に眞道彦命の冤罪は容易に拭ふ可らざるものとなりける。

續いてユートピヤール、ツーレンス、シーリンス、ハーレヤール其他數多の嫌疑を受けて投獄されたる三五教の幹部は、ホーレンスと略同様の陳述をなし、遂に縛めを解かれ、再び王の寵臣として深く用ゐらるる事となりけり。

茲にカールス王はエールをして此岩城の總監督たらしめ、且つ眞道彦命、ヤーン姫を牢獄につなぎ、數多の從卒をして監視せしめつつ、テールスタンの部下を引率れ、數多の幹部と共に、泰安城に堂々として乗り込んだ。此勢に眞道彦の率ゐ來れる神軍を始め、マリヤス姫は思ひ思ひに遁走し、再びアーリス山の東方に避難する者、或は各自の郷里に歸りて、何喰はぬ顔にて樵夫、耕しなどに従事し、暫くは玉藻山の靈地にも、大部分足を向けなくなり、カールス王の威力と眞道彦教主の投獄とに萎縮して、一時三五教は火の消えし如く淋しくなりけり。

カールス王は再び泰安城の城主となり、テールスタンを宰相とし其他の一同を重用して、萬機の政事を執り行ひつつあつた。され共何となく國內の情勢は穩かならず、サルボースはセールス姫を奉じて、日ならず泰安城へ攻來るべしとか、シャーカルタン、トロレンスの一派、同志を集め捲土重來、再び戰鬪は開始さるべしとか、種々雑多の噂にて持切つて居た。されどカールス王はテールスタン以下の重臣の甘言に誤られ、少しも國內の不穩なることを知らず、天下は無事太平にて、國民はカールス王の徳に悦服するもののみ確く信じつつありしなり。

テールスタン、ホーレンス、ユートピヤール、其他の重臣は王に諂ひ、下を虐げ、我利我欲にのみ耽り、バラモンの神を祀り、今迄信じ居たりし三五教を塵芥の如く振棄てて、新高山以北の地には、再びバラモンの教を布き、以て國政の輔助となしつつあつた。國民怨嗟の聲は以前に倍加して、何時動亂の勃發するやも計り難き危機に迫りつつあつた。

(大正一一・八・八 舊六・一六 松村眞澄録)

(昭和一〇・舊五・七 王仁校正)

第一〇章 纏れ髪「八一〇」

眞道彦命の教主を始めヤーチン姫は、淡溪の上流なる岩窟の牢獄に投ぜられ、
數多の幹部は銚を逆さまにして、カールス王に取り入り、暴政を振り、其勢ひ猛
烈にして何時如何なる難題を此聖地向つて持込み來るやも計られず、且つ數多
の信徒は殆ど離散し、寂寥の氣に包まれ、日楯夫婦を始め、月銚は心も落ちつか
ず、薄氷を踏む如き心地し乍ら、ヤーチン姫始め、父の冤罪の一日も早く晴れむ
事を、朝夕神前に祈願しつつあつた。忽ちユリコ姫に神懸りあり、詞おごそかに
宣り玉ふよう、

「汝日楯、月銚の兄弟よ、眞道彦命の此度の奇禍は、すべて神界の經綸に出でさ
せ玉ふものなれば必ず案じ煩ふ勿れ。頓て晴天白日の時來るべし。眞道彦命、此
度の遭難なくば、到底三五教の救世主としての任務を全うする事能はず。今日の
悲しみは後日の喜びなり、必ず必ず傷心する事勿れ。是れより汝兄弟は、ユリコ
姫を伴ひ、暗夜に乗じて聖地を去り、荒波を渡りて、琉球の南島に在る三五教の

神司兼國王たる照彦、照子姫の許に到り、事情を打明かし、救援を求めよ。然らばカールス王の迷夢も醒め、汝が父の疑も全く晴るに至らむ。汝兄弟は未だ年若く、如何なる艱難辛苦にも堪へ得べき能力あり。年老たる父の危難を思へば、如何なる難事に遭遇する共、物の數にも非ざるべし。今宵は時を移さず、聖地を立出で琉球の島に向へよ。中途にして種々雑多の迫害艱難に遭ふ事あるとも、撓まず屈せず、勇猛心を發揮して、此使命を果すべし。我れは本島の國魂神龍世姫命なるぞ。ゆめゆめ我神勅を疑ふな」

と云ひ終つて、ユリコ姫の神懸りは元に復した。茲に日楯、月鉾兄弟はユリコ姫と共に、身を巡禮姿にやつし、蓑笠草鞋脚絆の扮装、金剛杖をつき乍ら、人里離れし山途を辿りて遂に基隆の港を指して進むこととなつた。

月照りわたる涼しき夏の夜を、三人は漸くにして、アリス山の頂上に辿り着き、傍の巖に腰打かけ息を休めてゐた。フト見れば、月夜の中に白く光つた菅の小笠一枚、ゆらぎつつ峠を目標けて登り来る。三人は目を睜り、テールスタンの部下の間者にはあらざるかと稍胸を轟かせ乍ら、心の中にて天の數歌を稱へつつ

あつた。笠は漸く間近くなつた。見れば一人の巡禮姿の妙齡の美人である。美人は三人の憩へる前に、恐る恐る近づき來り、さも懇懃に、

巡禮「失禮乍ら、あなたは月鉾様の一行では御座いませぬか。妾は泰嶺の聖地に朝な夕な仕へまつれるテーリン姫で御座います」

月鉾は此聲に驚き、あたりを見廻し乍ら、聲をひそめて、

「如何にも私は月鉾で御座います。此深山を纖弱き婦人の身として、同伴もなく只一人、御越しになるとは大膽至極の御振舞、何處へ御出でになりますか」

テーリン姫は涙を拭ひ乍ら、

「月鉾様、何れへ行くかとは、それは餘り御胴欲で御座います。三五教の神様に心願を掛け、ヤツト叶うた妾の戀路、あなたは妾に仰せられた御言葉、最早御忘れになりましたか。エ、残念で御座います。そんな御心とは露知らず、互に心を變るまじとの御言葉を神様の教示と信じ、夢にも忘れぬ妾の心、……エ、口惜しい、残念な」

とあたり構はず、身を大地にうちつけて泣き叫ぶのであつた。月鉾は當惑顔にて、

太き息をつき乍ら、

「あなたに誓つた言葉は、夢寐にも忘れは致しませぬ。去り乍ら、已むに止まれぬ事情の爲、あなたにも委細を打明けず、俄に或祕密の用務を帯びて、暫く聖地を離れねばならぬ事が出来ました。決して決して決して貴女を嫌つたのでも、忘れたのでも有りませぬ。此月鉾が天晴れ使命を果すまで、泰嶺に歸り神妙に神様に仕へて居て下さい。キット貴女との約束は反古には致しませぬ。サア斯う云ふ内にも、テールスタンの部下の者共の耳に入らば、互の不覺、今の辛き別れは後の樂み、どうぞ此事を聞き分けて、一刻も早く歸つて下さい」

テーリン「イエイエあなたはさう仰有つて、うまく妾を振棄て、泰安城に隠れますマリヤス姫様のお側へ招かれて行かれるのでせう。何と仰有つても、妾は假令火の中、水の底をも厭ひませぬ。あなたに影の如く附添ひ参ります」

月鉾「あゝ困つたなア。……日楯さま、ユリコ姫さま、どうしたら宜いでせうか」
日楯「ハテ困つた事が出来ましたなア。何と云つても、今度は特別の使命が有るのだから、ここの所はテーリンさまに聞分けて貰つて、歸つて貰ふより仕方が有

りますまい』

テーリン『あなた迄が腹を合はして、妾を排斥なされますか。キット御恨み申します』

日楯『あゝあ、どうしたら良からうかなア。龍世姫様がいろいろの迫害や艱難に遭つても、撓まず屈せず、初心を貫徹せよと仰有つたが、これは又同情ある迫害に會つたものだ。情ある艱難に出會したものだ。……ナア月鉾さま』

ユリコ『もし、テーリン様、妾は女の身として、差出がましく申上げるのも、何となく恥かしう御座いますが、貴方も月鉾様と深く契合うたお仲、切なき御心は御察し申上げます。さり乍ら夫の一大事、ここは能く噛み分けて、一先づ聖地へ歸つて下さいませ。何れ遠からぬ内に、吉き便りをお聞かせ申すことが出来ませう』

と慰める様に、言葉やさしく説き諭す。テーリン姫は首を左右にふり、
テーリン『イエイエ、夫が行かる所へ、假令内縁にせよ、妻の妾が行かれない道理が有りますか。女房が行く事が出来ないのならば、あなたも日楯さまと此處

で袂を別ち、泰嶺の聖地へ歸つて、神前に御奉仕なさりませ。貴女がさうなされば、妾も泰嶺の聖地へ潔く歸ります」

と拔差しならぬ理詰めに、ユリコ姫は是非なく黙り込んで了つた。

月鉾は父の危難を救ふべく、意を決して住み慣れし聖地をあとに、漸う漸う此處まで息せき來りしものを、戀女に追ひせまられ、恥かしさと苦しさ、五色の息を吐いて居る。

日楯「テーリンさま、貴女は最前の御言葉に依れば、泰安の城に御座るマリヤス姫様に會はむとて、月鉾さまが御出でになる様に仰有つたが、左様な氣樂な場合では御座いませぬ。吾々兄弟は父上の危難を救はねばならぬ千騎一騎の此場合、どうして氣樂相に女を連れて行くことが出來ませう。まさかの時に手足纏ひになるのは女で御座いますよ」

テーリン「オホ、々々、勝手な事能う仰有ります。ユリコ姫様は男で御座いますか、そして貴方と無關係の御方で御座いますか。あなた方は夫婦で御出でになつても陽氣ではなくて、妾が月鉾さまと一緒に參るのが陽氣などは、そりや又如何

した譯で御座います。此事をハツキリと妾の合點の往く様に仰有つて下さいませ。心の癖みか存じませぬが、左様な事を仰有れば仰有る程、妾は月鉾さまに見放されたとより思はれませぬ。月鉾さまには、マリヤス姫と云ふ立派な戀女が御座いますから、ここでは一人旅なれど、泰安の都迄御着きになれば、キツと二夫婦手に手を取つて、どつかへ御越し遊ばすのでせう」

月鉾「あゝ持つ可らざるものは女なりけり。餘りの親切にほだされて、内縁を結んだのは今になつて見ると、チト早計だつた。あゝ如何したら良からうかなア」
テーリン「そら御覽、吾れと吾手に心の底を御明かしなさつたぢやありませんか。それ程妾がうるさくて堪らねば、どうぞ此場でああなたの御手にかけて、一思ひに殺して下さい。さうすれば定めし、マリヤス姫も御満足遊ばし、夫婦睦じく末永く暮して下さるでせう」

と身を悶えて泣きまらぶ。三人は代る代る理を分けて諭せ共、テーリン姫は容易に承知せず、言へば言ふ程、益々疑烈しくなる計りである。

最前よりあたりの木蔭に潜んで、此悲劇を聞き居たる人影があつた。忽ち此場

に現はれ、四人の前につつ立ち、

「ヤア汝は月銚の一行であらう。最前よりここを通り合せ見れば、何事か人の囁

き聲、様子あらむと木蔭に立寄り、聞くとともになしに聞き居れば、汚らはしや、ア

クス王の娘と生れたる、マリヤス姫と月銚と夫婦の約束を結びしとか、結ぶとか、

無禮千萬なる申様、妾は假令父に死に別れたりとはいへ、カールス王の妹、かか

る尊貴の身を以て、如何に泰嶺の神司たりとはいへ、月銚の如きに、秋波を送ら

むや。吾れは神を信ずるの餘り、泰嶺の聖地に仕へ居れ共、決して、月銚如きに

従ひ居るものにあらず、雑言無禮、思ひこらし呉れん」

と云ふより早く、蓑の上より、骨も碎けよと計り、月銚を打据ゑた。月銚は一言

も發せず、マリヤス姫の亂打の鞭を痛さを忍んで怍へて居る。此態を見て、テ

リン姫は狂氣の如くマリヤス姫に飛びつき、直に右の腕にカブリつき、一口計り

肉を喰ひちぎつた。忽ち血はポトポトと流れ出で、月夜の木蔭を黒く染むるに至

つた。月銚は此態を見て、テリン姫の腕を後に廻し、笠の紐を以て厳しく縛り

あげた。日楯、ユリコ姫は、直におのが帯を引裂き、マリヤス姫の傷所に、土を

かき集めて、塗りつけ、固く縛り、天の數歌を歌ひ、伊吹の狭霧を吹きかけた。傷は忽ち元の如くに癒えて了つた。

日楯、月鉾、ユリコ姫は此機に乗じて、足早に何處ともなく姿を隠して了つた。跡に残りし二人は稍暫し、無言の儘にて互に顔を見つめて居た。

暫くあつて、マリヤス姫は言葉を軟らげ、

「貴女様はテーリン姫様で御座いましたか。不思議な所でお目にかかりました。

何事も人間は神界の御經綸の儘によりなるものでは御座いませぬから、どうぞ心を落ちつけて、月鉾様の無事使命を了つて、泰嶺の聖地へ無事御歸りなされる日を御待ちなされませ。キット妾があなたの望みを叶へさして上げませう」

テーリン姫は後手に縛られ乍ら、齒を喰ひしぼり、血さへ滲らして居る其形相の凄じさ。月の光に照らし見て、マリヤス姫は戀の妄執の如何にも恐ろしきものたることに舌を巻いた。

テーリン姫「あなたは、妾に比べて、餘程年をとつて居られます丈あつて、實に巧名な八百長を行られますなア。田舎の未通娘をだまさうとなさつても、私は一

生懸命ですから、そんな手には乗りませぬよ。要らぬ氣休めはモウ言つて下さるな。何と仰有つても、あなたには、そんな事を仰有る資格はありませぬ。三五教一般の喧しい噂で御座います」

マリヤス姫「あゝ情ない事になりました。實の事を、妾は白状致して、貴女の疑を晴らして頂かねばなりません。妾は或事情の爲、泰安城をのがれ、泰嶺の聖地に参りました、尊き神様の教を奉じ、今は神前近く仕ふる聖職となりました。一度は月鉾様に對し、妾も非常に戀慕の念を起し、いろいろと言ひよりりましたが、如何しても、月鉾様は御聞き下さりませぬ。翻つてよく考へて見れば、妾はアイクス王の落胤とは申し乍ら、父が母の目を忍んで生みましたる罪の子の妾、如何して尊い月鉾様の女房になることが出来ませうか。又國治立大神様の御教を奉じ玉ふ眞道彦命様は、アイクス王に彌増して尊き御身の上、其御方の珍の子と生れ玉ひし月鉾様に、戀慕の心を起すといふは、全く早まつた考へだと氣が付きました。其日よりプツリと思ひ切り、今は極めて清き心を以て神前に奉仕して居るので御座います。世間の噂の喧しく立つたのも、元はヤツパリ妾の月鉾様を戀ひ

慕ふ其様子は何となく目に立つたからで御座いませう。全く妾の罪と諦めるより仕方はありません。……どうぞテーリン姫様、今迄の疑を私の此告白に依つてお晴らし下さいませ。貴女は月鉾様とは従兄妹同志の仲、何れも尊い神様の御胤、こんな結構な縁はないと存じまして、妾は内々月鉾様に、あなたとの御結婚を、お勧め申して居る者で御座います」

テーリン姫「其のお言葉に依つて、妾も安心致しました。月鉾様は父上の危難を救はねばならぬ大切な此場合妾などが此んな所へ参りました、ゴテゴテと御邪魔を致す場合では御座いませぬが、つい戀の意地から貴女様の事が氣にかかり、妬ましくなり、最前の様な恥しい事をお目にかけました。どうぞ御宥して下さいませ。妾は月鉾に後手に縛められて居ります。どうぞ此縛をお解き下さいませまいか」

マリヤス姫「あゝさうで御座いましたか、夜分の事とて、……つい、氣が付きませなんだ」

と言ひ乍ら、テーリン姫の縛を解き、背を撫でさすり、勞り助け抱き起し、マリヤス姫「サア妾も是れより泰嶺へ参りませう。泰安城には大變な事が突發致

し、何時いつ妾わたしに追手おつてがかかるとも計はかられませぬ。何事なにごとも運うんを神様かみさまに任せ、泰嶺たいれいの聖せい地に於おいて神様かみさまに奉仕ほうしし、惟神かむながらの御攝理ごせつりに任まかす考かんがへで御座ございます。又また日ひ楯たて様が夫婦ふうふう連れにてお越こし遊あそばしたのも、これには特別とくべつの事情じじやうが御座ございますから、聖地せいちへ歸かへつた上うへ御得心ごてくしんの行く様やうに御話おはなし申まを上げませう。サア斯かやう様な處ところにグツグツ致いたして居をりましては險けん呑のん千せん萬ばん、早はやく歸かへりませう」

とテーリン姫ひめの手てを取りと、互たがひに打解うちとけて、アリス山ざんを降くだり、日月潭じつげつたんの湖邊こへんを辿たどりて、遂つひに玉藻山たまもやまの聖地せいちに參拜さんぱいし、漸やうやくにして泰嶺たいれいの聖地せいちに歸かへり着ついた。これよりテーリン姫ひめの疑うたがひは全まったく晴はれ、姉妹しまいの如ごとく相親あひしたしみ、神業しんげふに奉仕ほうしし、月銚つきほこの歸かへり來きたるを待まち居ゐたりける。

(大正一一・八・八 舊六・一六 松村眞澄録)

日楯、月鉾、ユリコ姫の三人は、人目を避けて峰傳ひに、アーリス山より須安の山脈を渡り、石の枕に青雲の夜具を被ぶり、幾夜を明かし乍ら、漸くにしてテルナの溪谷に辿り着いた。時しも日は山に隠れ、黄昏間近くなつて来た。茲一日ふつかの山中の旅行は、峰の尾の上のみを傳つて居たので、思はしき木の實もなく、食料に窮し、空腹に苦み、歩行も自由ならず、喉は渴き水は無く、弱り切つて居た。

此時遙の谷間に黄昏の暗を縫うて、一塊の火光が瞬いて居る。三人は其火光に力を得、疲れた足を引ずり乍ら進んで行く。火光を中心に數多の厭らしき面構の毛武者男幾十人となく赤裸の儘、何事か大聲に笑ひさざめいて居た。

三人は木蔭に身を横たへ、暫し谷水に喉をうるほし、息を休めて居る折柄、サツと吹き來る谷風に揺られて三人の頭に障つたものがある。月鉾は思はず手を頭上にあげた途端に手に觸つたのは、水の滴るような木茄子であつた。三人は天の與へと喜び勇んで矢庭に木茄子をむしり、腹を拵へた。長途の疲れに腹は太り、俄に眠氣を催し、三人共其場に他愛もなく熟睡して了つた。

今日はテルナの里のバラモン教の大祭日にして、數多の里人集まり、夜祭りを
なさむと、種々準備の相談をして居る最中であつた。今日の祭典に奉らむと、此
里に只一本よりなき木茄子を、今迄一個もむしり取らず、大切に保存して居た。
それを三人の者に残らずむしり取つて喰はれて了つたのである。愈祭典の時刻と
なり、四五の里人は白衣を着し、大麻を打振り、バラモン教の神歌を稱へ乍ら、
大切なる木茄子をむしり取り、供物にせむと來て見れば、大切なる木茄子は何者
にか盗み取られ、一個も枝に留まつて居ない。一同は驚き乍ら、あたりを透かし
見れば、雷の如き轟をかいて三人の男女が傍に寢て居る。
里人は忽ち大騒ぎをなし、松明を點じ來り、よくよく見れば、一人の男木茄子
を片手に持ち、半分許りかぢつた儘、熟睡してゐる。
甲「オイオイ皆の連中、大變な奴が出て來やがつて、神饌用の木茄子を、皆取つ
て食ひ、腹をふくらせ、平氣でグウグウ寢てゐやがるぢやないか、怪しからぬ奴
だ。……オイ誰か一時も早く此由を、テルナの酋長様に報告して來い。さうせな
くては俺達が取つて食た様に疑はれ、酋長よりどんなお目玉を食ふか分らないぞ」

そのなかひとり
其中の一人は「オイ」と答へて、韋駄天走りに、群集の集まる齋場に向つて酋長に報告すべく走り去つた。

甲は杖の先にて三人の頭をコンコンと打ち乍ら、

甲「コラツ、大それた大盗人奴、早く起きぬか」

と呶鳴りつけた。三人は驚いて起きあがり四邊を見れば、松明を持った四五人の

男、傍には白衣を着けた男と共に、鬼の様な顔に團栗眼を剥き出し、唇をビリビ

リ震はせ乍ら睨みつけてゐる。

日楯「何人ならば……吾々三人の頭を、失禮千萬にも……杖の先にて打叩くとは何

事ぞ」

と言はせも果てず、甲は毛だらけの腕を伸ばし、日楯の首筋をグツと握つた。日

楯は首の千切れる様な痛さに顔色青ざめ、唇まで紫色にして苦んで居る。大の男

は聲を荒らげ、

大男「其方共は大方三五教の宣傳使であらう。今日はバラモン大神の大祭日、里

人が大切に致して今日の祭典の供物にせうと守つて居た、木茄子を残らず取り食

ひ、此聖場に於て不行儀千萬にも寝さらばひ、大膽不敵の其方等の振舞、待つて居れ、今に酋長様が此場に御越しになるから、何分の御沙汰があるであらう」
と云ひ了つて、日楯の首を握つた手を放した。日楯は餘りの痛さに物をも言はず、其儘大地に獅噛ついて苦痛を咏へてゐた。月鉾は一同に向ひ丁寧に兩手をつき、月鉾「吾々三人は決して三五教の宣傳使では御座いませぬ。バラモン教の聖場を巡拜致す巡禮で御座います。馴ぬ途とて山奥にふみ迷ひ、空腹に苦みつつありし所、谷間に當つて一點の火光を認め、それを便りに此處まで出て参り、休息致して居る際、フト木茄子が頭に觸り、左様な大切な物とは知らず、別に盗むと云ふ心もなく、頂戴致しました。誠に申譯のない事で御座います。どうぞ酋長様に宜しく御執成しを願ひます」
甲「今日はバラモン教の大祭日で、人間の犠牲を獻らねばならぬ大切な日である。され共人命を損するは如何にも残酷だと、酋長様が大神に御願遊ばし、此谷間に一本よりない木茄子を、人間の代りとして大神様に獻りますから、人身御供丈は御許し下されと御願ひになり、それから此果物は神様の御物として、里人は指を

もさへず、大切に夜廻りをつけて守つて居たのだ。それを汝等三人ムザムザと取食うた以上は、仕方がない、其方の腹中にはまだ幾分か残つて居るであらう。直に腹をかき切つて木茄子をえぐり出し、汝の體を贄として神に獻り、神の怒りを解かねばならぬ。皆の者共、其覺悟を致したがよからうぞ」

月鉾「それは又大變な事で御座いますなア。併し神は人を助くるが神の心、人間の命を取り、或は贄を獻らせて喜ぶ様な神は誠の神ではありません。吾々は及ばず乍ら其神に向つて、一つ訓戒を與へて見ませう」

甲「ナニ、馬鹿な事を申すか。神様に對して、人間が訓戒を與へるなどとは、不届き千萬な申條、左様な事を申すと、神の怒りにふれて、此テルナの里は果實稔らず、暴風雨大洪水の爲に苦しまねばならぬ。いよいよ以て差赦し難き癡者」と言ひ乍ら、力に任せて杖を振上げ、三人の背骨の折れる程敲きつけた。

暫くあつて、テルナの里の酋長ゼームスは四五の從者に鋭利なる青龍刀を持たせ乍ら、此場に現はれ來り、三人の姿を見て、聲も荒らかに云ふ。

ゼームス「其方は大切なる果物を取喰ひし大罪人、此儘にては差赦し難し。汝等

三人、これより神の贄とし、神の怒りを和らげなくてはならぬ。サア覺悟を致せよ」

と言ひ渡した。ユリコ姫は兩手を合せ、ゼームスの前ににじり寄り、悲しさうな顔をあげて涙を流し、

ユリコ姫「何卒、知らず知らずの不都合なれば、どうぞ此度は御見逃しを願ひます」

と頼んだ。ゼームスはユリコ姫の顔を一目見るより、忽ち顔色をやはらげ、ゼームス「赦し難き罪人なれ共、汝は吾妻となる事を承諾するに於ては、汝の生

命丈は助けてやらう。どうぞや：有難いか」
と稍碎けた相好し乍ら、ユリコ姫の顔を覗き込んだ。

ユリコ姫「どうぞ、妾のみならず、二人の男も生命許りは助けて下さいませ。それさへ御承諾下さらば、如何なるあなたの要求にも應じます」

酋長「イヤ、さうはならぬ。如何しても一人丈は生命を取つて、贄に致さねばならぬ。此中に汝の夫があるであらう。其方に免じて、夫だけは助けてやらう」

日楯「ゼームスとやら、吾々は假令木の實を知らず知らず取喰ひたればとて、汝等如きに命を取らるる理由が何處にある。生命取るなら勝手に取つて見よ」

ゼームス大口をあけて、

「アハ、ハ、ハ」

と高笑ひし乍ら、

ゼームス「汝、いかに神力あればとて、僅に二人や三人、此大勢の中に圍まれ乍ら、如何ともする事は能ふまじ。神妙に其方は覺悟をきはめて贄となれ」

ユリコ姫「もしも酋長様、あれは妾の夫で御座います。さうしてモウ一人は吾夫の弟で御座います。妾は如何なる事でも承はりませう。其代りどうぞ二人の命を御助け下さいませ」

ゼームス「あゝ仕方がない。可愛い其方の申す事、無下に斷る譯にも行こまい。

然らば生命丈は助けてやらう。バラモン教の、今日は大祭日、兩人共烈火の中を渡り、劍の橋を越え、釘の足駄を履き、赤裸となつて茨の叢を潜れ。これがバラモン教の第一の神に對する謝罪の途である。生命を取らるる事を思へば易い事で

ある。吾々は斯様な行は年中行事として、別に辛しとも思つて居ない。其方も巡禮ならば、これ位の修業は堪へられるであらう』

兩人一度に、

『承知致しました。生命さへ助けて頂けるならば、どんな行でも：喜んで致しませう』

ゼームス『最早祭典の時期も迫つた。サア早く此方へ來れ。さうして裸、跣足の儘、烈火の中を渡り、神の怒りを解くがよからう』

と三人の前後を大勢に警固させ乍ら、齋場に導いた。

齋場に到り見れば、數多の果物小山の如く神前に飾られ、前方の廣庭には山の如き枯柴を積み、これに火を放てば炎々として燃えあがる其凄じさ。二人は大勢の者に投げ込まれて、火中に止むを得ず飛び込んだ。一生懸命に天の數歌を唱へつつ、猛火の中を少しも火傷もせず、幾度となく巡つて元の所に歸つて來た。一同は其神力に肝を潰し、二人の顔を眺めてゐる。

ユリコ姫は酋長の俄妻として美々しき衣裳を與へられ、酋長と相竝んで齋壇に

立つた。忽ち何處よりともなく、一塊の火光飛び來つて此場に爆發し、ゼームスの身體は、中空に捲きあげられて了つた。一同はこれに肝を潰し、右往左往に逃げ惑ひ、或は腰を抜かし、顔の色さへ紫色になつて半死半生の態に呻吟して居るものもあつた。

ユリコ姫は美々しき衣裳を矢庭に脱ぎ捨て直ちに火中に投じ、日楯、月鉾と共に三人祭壇の前に立ち、感謝祈願の祝詞を奏上し、宣傳歌を歌ひ始めたり。

ユリコ姫 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈む共 誠の力は世を救ふ

神が表に現はれて 善と惡とを立別る

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ 天が下なる民草は

何れも貴き神の御子 力の弱き人の身は

いなで過あやまちあらざらめ 誠まことを知らぬバラモンの

神かみの司つかさのゼームスや それに従したがふ者共ものどもの

暗くらき心こころのいぢらしさ 尊たふとき人ひとの命めいを取とり

神かみの御前みまへに贄いけにへを 獻たてまつるとは何なんの事こと

果はたして神かみが贄いけにへを 望のぞむとすればバラモンの

大國彦おほくにひこは曲津神まがつかみ かかる怪あやしき御教みをしへを

高砂島たかさごじまに布しき擴ひろめ 國魂神くにたまがみの龍世姫たつよひめ

外所よそになしたる天罰てんばつは 忽たちまち其身そのみに酬むくい來きて

猛火まうくわの中なかを打渡うちわたり 茨いばらの叢むろに投なげ込まれ

劍つるぎを渡わたり釘くぎの下げ駄た 穿うがちて神かみの御前おんまへに

重おもき罪つみをば詫わび乍ながら 樂たのしき此世このよを苦くるしみて

暮くらす世よびと 人あはの憐あはれさよ あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

御靈幸みたまさちはひましまして 仁慈無限じんじむげんの三五あななひの

神かみの教をしへの擴ひろまりて 怪あやしき教をしへを逸いちはや早く

海の彼方に追拂ひ

至治太平の神の代を

築かせ玉へ天津神

國津神達八百萬

龍世の姫の御前に

三五教の神司

天に輝く日月の

名を負ひ玉ひし吾夫の

日楯の神や月鉾の

尊き教に國人を

一人も残さず服従はせ

暗黒無道の世の中を

天國淨土と化せしめよ

あゝ惟神々々

御靈の幸を賜へかし

と祈り終つた。何時の間にやら、中天に捲き上げられたる酋長のゼームスは、禮服を着飾り、四五の従者と共に、珍らしき果物を持ち來り、三人の前に恭しく捧げ、

ゼームス「私は最前のゼームスと申す此里の酋長で御座います。尊きあなた方等に對し、御無禮な事を申し上げました。勿體なくも生神様に對し、吾々如き賤しき

者の女房になれとか、火渡りをせよとか、いろいろの難題を申し上げました無禮の罪、何卒御赦し下さいませ。これも全くバラモン教の掟を遵奉致しての言葉で御座いました。只濟まなかつたのは尊き女神様に對し、女房になれと申上げた事のみは、バラモン教の方から申しても大なる罪惡で御座います。其爲、大自在天様の御怒りに觸れ、天より戒めの大火彈を投げつけられ、私は其途端に中空に捲あげられ、最早命は無きものと覺悟致して居りましたが、國魂神龍世姫様とやらの、厚き御守りに依つて大切なる生命を救はれ、且ついろいろの訓戒をうけました。それ故取る物も取敢ず、あなた様に御詫を申上げむと参りました。どうぞ此杖にて、私の身體を所かまはず、腹のいえる迄打据ゑ下さいませれば、罪の一部は贖へられるものと心得ます。どうぞ宜しく御願ひ致します」

と熱涙を流し、眞心より頼み入るのであつた。逃げ散つた數多の里人は、追々と集まり來り、何れも一つの負傷もなきに、不審の思ひをし乍ら、酋長の此態を見て、一同は三人に向ひ手を合し、神の如く尊敬の意を表し、合掌して拜み倒して居る。

三人は三五教の教理を諄々と説き諭し酋長以下數十人に守られて數日の後、漸くキールの港に着いた。

(大正一・八・八 舊六・一六 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・八 王仁校正)

第一二章 サワラの都(八一二)

玉藻の山の聖場に 遠き神代の昔より

三五教を開來る 眞道の彦の末流と

世に聞えたる眞道彦 泰安城の急變を

救はむ爲に三五の 神の司や信徒を

集めて神軍組織なし 泰安城に現はれて

寄せ來る敵を打拂ひ

遂には奇禍を蒙りて

カールス王に疑はれ

暗き牢獄に投げ込まれ

逃るる由も泣く許り

ヤーチン姫も諸共に

聞くもいまはし冤罪に

かかりて暗に呻吟し

苦しき月日を送ります

其慘状を救はむと

父を思ふの眞心に

日楯、月鉾兩人は

聖地を後にユリコ姫

夜に紛れて蓑笠の

輕き姿に身を装ひ

アリス山の頂きに

息もせきせき辿り着き

月の光を浴び乍ら

片方の岩に腰をかけ

息を休むる折柄に

泰嶺山の聖地より

神の司の月鉾が

後を尋ねて追ひ來る

テーリン姫の執拗な

戀の纏れの絲をと

言葉を盡して聖場に

歸らしめむと思へども

戀に曇りしテーリンは

とけば説く程もつれ来る
時しもあれや木かげより

現はれ出でし人影に
一同驚き見廻せば

思ひ掛けなきマリヤス姫の
珍の命の出現に

漸く急場を逃れ出で
日楯、月鉾、ユリコ姫

三人の司はやうやうに
ヤツと蘇生の心地して

アリス山の峰を越え
須安の山脈打渡り

夜を日についで漸々に
テルナの里に辿りつき

谷間にまたたく一つ火を
目あてに進む折柄に

喉は渴き腹は飢ゑ
根氣も盡きて三人は

とある木蔭に休らひつ
幽かに漏れ来る人聲を

耳をすまして聞き居れば
俄に吹き来る谷の風

三人の頭に何物か
觸ると見れば木茄子の

香りゆかしき果物に
飛びつく計り喜びて

忽ち三人は木茄子を
一個も残らず【むし】り取り

腹をふくらせ横はり
いつしか眠りにつきにける。

折も折とてバラモンの
神の祭典の眞最中

四五の土人は木茄子を
神の御前に供へむと

冠装束いかめしく
幣振り乍ら進み來る

素より三人は白河の
夜船を操る眞最中

土人は忽ち木茄子の
一個も残らず何者にか

盗まれたるに肝潰し
明りに照して眺むれば

雷のやうなる鼾聲
驚き直に此由を

テルナの里の酋長に
報告すればゼームスは

時を移さず驅來り
三人の男女に打向ひ

團栗眼を怒らせて
『テルナの里の人々が

生命に代へて守り居る
神に捧ぐる木茄子を

取りて食ひし横道者
汝三人の生命を

奪ひて神の贄に
奉らむ』と居丈高

罵りちらせばユリコ姫

酋長の前に手をついて

「長途の旅に疲れ果て

喉は渴き腹は飢ゑ

かかる尊き果物と

知らずに取つて食ひました

何卒深き此罪を

廣き心に見直して

吾等を赦し給へかし

願へば酋長はユリコ姫の

顔打眺め笑ひ顔

「汝は吾れの要求を

容れて女房となるならば

汝の罪を赦すべし

二人の男は如何しても

命を取つて神前の

尊き犠牲に供さねば

神の怒りを如何にせむ

覺悟せよや」と睨めつける

ユリコの姫はいろいろと

詞を盡し身を盡し

口説き立つれば酋長は

漸く心和らぎて

苦しき荒行いろいろと

二人の男に言ひ付けて

漸く此場は梟がつき

大祭壇の傍に

三人の男女を伴ひて

ユリコの姫には美はしき
衣服を與へ二人には

「猛火の中をくぐれよ」と
言葉厳しく下知すれば

日楯、月鉾兩人は
天津祝詞を奏上し

天の數歌ひそびそと
小聲になりて唱へつつ

猛火の中を幾度も
いと易々と潛りぬけ

大祭壇の其前に
火傷もせずかへに歸り來る

竝みゐる人々兩人が
其神力に驚きて

互に顔を見合せつ
舌巻き居たる折柄に

何處ともなく大火光
此場に忽ち落下して

酋長ゼームス果敢なくも
身は中空に飛びあがり

行方も知らずなりにける。
竝み居る數多の里人は

此爆發に驚きて
雲を霞と逃げて行く

逃げ遅れたる人々は
膽をば潰し腰抜かし

呻吟き苦む折柄に
ユリコの姫は酋長に

與へられたる衣を脱ぎ
直に火中に投ずれば

日楯、月鉾兩人は
ユリコの姫の右左

立現はれて宣傳歌
聲も涼しく宣りつれば

醜の曲靈は何時しか
消え失せたるか風清く

何とはなしに心地よく
神の恵を三人が

喜ぶ折しもゼームスは
衣紋を整へ供人を

數多引連れ珍しき
木の實を器に盛り乍ら

三人が前に手をついて
以前の無禮を心より

詫入る姿の殊勝さよ
茲に三人は三五の

神の教を細々と
ゼームス始め里人に

傳へて直ちに三五の
教の柱をつき固め

酋長始め數十の
里人達に送られて

夜を日に繼いで高砂の
北の端なるキールンの

漸く濱邊に着きにけり
あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

常世の波も龍世姫

高砂島の胞衣として

神の造りし臺灣島

木の實も豊に水清く

禽獸蟲魚も生ひたちて

天與の樂土と聞えたる

臺灣島の中心地

玉藻の山の聖場を

三人は後に立出でて

艱難辛苦を嘗め乍ら

テルナの里の酋長に

長き道程を守られて

キールの港に安着し

船を傭ひて三人は

波のまにまに漕ぎ出しぬ

折柄吹き來る北風に

山なす浪は容赦なく

三人の船に衝き當る

ユリコの姫は船頭に

立ちて波をば静めつつ

神のまにまに琉球の
八重山島を指して行く
やうやう茲に三人は
エルの港に安着し
岸邊に船をつなぎおき
聲名轟く照彦の
千代の住家と聞えたる
サワラの都を指して行く。

サワラの都に、三人は漸く辿りついた。ここは際限もなき廣原の中央に築かれ
たる新都會にして、白楊樹の森四邊を包み、芭蕉の林は所々に點綴してゐる。國
人は大抵、芭蕉實、苺、林檎、木茄子、柿などを常食とし、或は山の芋、淡水魚
などを副食物として生活を續けてゐる。

サワラの都には、廣大なる堀を以て四方を圍らしてゐる。其巾殆ど一丁計りの
廣さである。東西南北に堅固なる橋梁を渡し、稍北方にサワラ的高峰、雲表に聳
え、四神相應の聖地と稱せられてゐる。城内には數百の人家立並び、今より三十
萬年前の都會としては、最も大なるものと稱されて居た。サワラの城は殆ど其中
心に宏大なる地域を構へ、石造の館高く老樹の上になめき出て居る。城内には畑も

あれば、川もあり、沼もあり、何一つ不自由なき様に作られてゐた。

三人は東の門より橋を渡つて、門内に進み入つた。黄紅白紫紺いろいろの花は木の枝に、草の先に、爛漫と咲き亂れてゐる。又道の兩側には百日紅や日和花の類密生し、白き砂は日光に輝き、臺灣島の日月潭に比して、幾層倍とも知れぬ氣分のよき土地である。

三人は何となく恥しき様な、おめる様な心持にて、小聲に宣傳歌を歌ひ乍ら、照彦が千代の住家と定めたる城門の前に漸くにして歩を運んだ。四五の門番は杖をつき乍ら、何れも睡魔に襲はれて、コクリコクリと居睡つてゐる其長閑さ、天國の門番も斯くやと思ふ計りの氣樂さを現はし居る。日楯は門番の前に進み寄り、

日楯「頼みます 頼みます」

と聲をかけた。門番の一、ねむた目をこすり乍ら、

門番「一、ア、此眞夜中に誰か知らぬが、人を起しやがつて、ねむたいワイ。此門は暮六つから明け六つ迄は開ける事は出来ぬ。夜が明けたら、誰か知らぬが行

つて来い。キツと開けて通してやる、ムニヤ ムニヤ ムニヤ……」

と云ひ乍ら又ゴロンと横になる。

月鉾「モシモシ門番様、まだ日中で御座います。暮六つ迄には餘程間も御座いま

すから、どうぞ目を醒まして、此門をお開け下さいませ」

門番ノ二「お前は夜が明けとるか知らぬが、俺の目ではそこら中が眞暗がりだ。暗い時は夜分にきまつて居る。アタねむたい、喧しう言はずにトツトと出直して

来い」

月鉾「アハ、ハ、あなた目をおあけなさい。さう目蓋を固く密着させてゐては、

晝でもヤツパリ暗く見えますぞ」

門番ノ二「喧しう言ふない。【暗く】も何もあつたものかい。【苦樂】一如だ。

世の中に寝る程樂はなきものを、起てガヤガヤ騒ぐ馬鹿のたわけ。おれはまだ夜

中の夢を見て居るのだ。おれの目の引明けに出て来い。そしたら、あけてやらぬ

事もないワイ」

とダル相な聲でブツブツ云ひ乍ら、又横にゴロンとなる。三人はもどかしがり、

稍思案に暮れて佇んで居る時しも、表門はサラリと左右に開かれ、中より立派なる男女幾十人となく行列を作り、三人の前に恭しく手をつき乍ら大將らしき一人は、

「エ、あなたは臺灣島の玉藻山の靈場にまします、眞道彦命様の御子息様では御座いませぬか」

日楯丁寧に禮を返し、

「ハイ御察しの通り、吾等は眞道彦命の倅、日楯、月鉾と申す者、これなる女は私の妻ユリコ姫と申します。龍世姫様の御神勅に依り、當國の城主照彦様、照子

姫様に御願の筋ありて、大海原を渡り、漸くこれへ參つた者で御座います」

一人の男「私はセルと申して、照彦王の御側近く仕ふる者で御座います。二三日以前より、照子姫様に高砂島の龍世姫命様御神懸り遊ばし、あなた方御三人様が

ここへ御越しになるから、出迎ひに出よとのお告で御座いました。それ故今日はお越しの日と早朝よりいろいろと、あなた方の歓迎の用意を致し、照彦様、照子姫様、奥にお待で御座います。サア御案内致しますから、早くお這入り下さいま

せ

三人は一度に頭を下げ、

有難う

と言ひ乍らセルの後に従ひ、奥深く進み入る。門番は漸く目を醒し、

甲「オイ、ベース、チャール、起きぬか起きぬか、大變な事が出来て来たぞ。お

側役のセル様が澤山の御近侍の方々と共に三人のお客さまをお迎へ遊ばして、奥

へお這入りになつた。貴様達はなまくらを構へて、寢眞似をし、糟に酔うた様な

事をぬかしてをつたが、たつた今ドテライお目玉だぞ。サア早く何とか、言譯を

拵へて、セル様へお斷りに行かねば、足袋屋の看板だ。サツパリ足あがりになつ

て了ふぞよ

エル「バカを言ふな、俺達が寢眞似をして居つたのを知つてゐた以上は、貴様も

チヨボチヨボだ。俺が足があがる位なら、貴様は頭だから、キット首が飛ぶぞよ。

貴様は俺達の組頭だからお詫に往つて来るがよからう。俺や、こんな門番なんか、

何時足があがつても構やしないのだ。常世城の門番を見い、失敗して王様のお側

附になつたぢやないか。何時迄も門番を嚴重に勤めて居つたら、彼奴は門番に適當な奴だと、セルの大將に見込まれたが最後、金槌の川流れ、一生頭の上る事はないぞよ。それより日中にグウグウと寝てる方が、何時榮達の途が開けるか知れないぞ。大體こんな智者學者を門番にさしておくのが見當違ひだ。マア見て居れ、明日になつたら、貴様達は門番に不適當だから、奥勤めに使つてやらうとの御命令が下るに違ひない。餘り取越苦勞をするものでない。マア刹那心を樂むのだなア。待てば海路の風が吹くとやら、何事も運は天にありだ。そんな事に心配するよりも、酒でも呑み、一生懸命に騒ぎ、ステテコでも踊つて、今度のお客様のお慰みに供したら、照彦王様も面白い奴だと云つて、……苦しくない、門番近く参れ……とか何とか仰有つて、お手づから杯を下され、結構な御褒美に預るやらも知れたものだない。サアサア、酒だ酒だ、酒なくて何のおのれが門番かなだ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

と他愛もなき無駄事を囀り乍ら、バナナで作つた強烈い酒を、五人の門番が胡坐座になつてガブリガブリと呑み始め、へべレケになつて、妙な手つきをし乍ら、

踊りつ舞ひつ、奥殿指して轉げ込んだ。

(大正一一・八・八 舊六・一六 松村眞澄録)

第三篇 光明の魁

第一三章 唾の對面(八一三)

千早振る神代の昔エルサレム 嚴の都に仕へたる
神の司の國彦が 靈の御裔と生れたる
心も固き常楠の 流れを汲みし清、照の

二人の御子は琉球の

雙兒の島を北南

相受持ちて永久に

此浮島を守ります

中にも別けて照彦は

遠き神代の其昔

貴の都の天使長

廣宗彦の其御裔

照子の姫を娶りつつ

南に當る八重山島の

神の司と國王を兼て

風さへ清き高原地

サワラの土地に神都を開き

四方の國人愛撫して

神の如くに敬はれ

世は太平に治まりて

宛然神代の如くなり

サワラの城を繞らせる

清泉漂ふ水垣に

眞鯉緋鯉の數多く

澆刺として金鱗を

旭に照らしキラキラと

泳ぎ樂しむ光景は

昔聖地を繞りたる

黄金の海の如くなり。

城頭高く金色の

十曜の神紋輝きて

神威は四方に鳴り渡り

小鳥の聲も何となく
 長閑な春を歌ひつつ
 實に神の御稜威も照彦や
 照子の姫の功績を
 高く御空に現はしぬ。
 無事太平の球の島
 民は互に睦び合ひ
 争ひもなく病なく
 凶作もなく國人は
 安喜和樂の夢に酔ひ
 歌舞音曲の艶聲は
 國內隈なく響きけり。
 斯かる所へ臺灣の
 玉藻の山の聖地より
 日楯、月鉾、ユリコ姫
 始めて三人神司
 波押切つて球の島
 エルの港に漕ぎ付けて
 樹木茂れる高原を
 心の駒に鞭ちて
 悩みも知らぬ膝栗毛
 漸う都に辿り着き
 長き橋梁打渡り
 東の門より徐々と
 百日紅や日和花
 咲き誇りたる道の上
 心欣々三人は
 サワラの城の表門

やうやう月鉾、ユリコ姫
日楯は門の傍に

肱を枕に眠りある
サワラの城の門番に

禮を盡して掛合へど
皆太平の夢に酔ひ

晝の日中に眞夜中の
夢か現か囁言を

竝べて起きぬもどかしさ
茲に三人は止むを得ず

佇む折しも門の戸を
中より左右に開きつつ

照彦王の側近く
仕へ奉りしセルの司

數多の男女を引きつれて
いと慇懃に出で迎へ

奥殿指して進み入る。
三人の司は何となく

心いそいそし乍らも
セルの後に従いて行く。

三人はセルの司の後に従ひ、奥殿深く進み入つた。美はしき琉球疊を布き詰めたる廣き一閒には、數多の男女威儀を正し、行儀よく端坐して、一行の入り来るを待ち迎へて居た。セルは三人に向ひ、

セル「どうか、これへ御坐り下さいませ」

と最上壇の間に、三人を導いた。三人は圓座の上に端坐し、一同に向つて目禮を施した。

數十人の男女は威儀を正し、行儀よく列を作りて端坐し乍ら、無言の儘、目禮を返した。少時あつて、隔ての襖を押しあけ入り来る妙齡の美人、一人は照代姫、一人は八千代姫、三人の前に丁寧に両手をつき、言葉淑やかに八千代姫は、

「これはこれは日楯様、月鉾様、ユリコ姫様、遠路の所、はるばるとようこそ御越し下さいました。二三日以前より照彦王様の御差圖に依り、あなた方御一行の御着城を、今か今かと、首を伸ばして御待受致して居りました。どうぞ長途の御疲れの直ります迄、御ゆるりと御休息下さいませ」

三人一度に、

「ハイ有難う御座います。いろいろと御心配をかけまして、誠に済みませぬ」

照代姫「折角御越し下さいましたが、照彦王様は照子姫様と、今朝より俄に神勅を奉じて天啓山に御登りになりました。何れ御歸りは二三日の後で御座いませう。

王様の御言葉に、三人の御方が御いでになつたらば、吾々が歸城する迄、御待ちを願つて置けとの御命令で御座いました。どうぞ王様の御歸城迄此處にてゆるゆる御待ちの程を願上げ奉ります。吾々一同は王様の無事お歸りになる迄は各謹慎を表し、無言無食無飲の行を致さねばなりません。それ故あなた様に御挨拶が終れば、後は何事も無言で御座いますれば、どうぞ御氣に支へない様にして下さいませ」

三人「ハイ承知仕りました。さうして王様は何日頃お歸りで御座いますか」
八千代姫、照代姫は一旦挨拶を了りし事と一言も答へず、サラサラと疊に足を込らせ乍ら再び襖を押あけ、スツと閉ぢて一間に姿を隠した。竝ある一同の男女は何れも無言の儘、行儀よく圓座の上に端坐して、王の不在中絶對的謹慎を表して居る。

三人も已むを得ず、無言の儘、膝もくづさず、晝夜の區別なく圓座の上に安座し、膝も踵もむしれる如き痛さをジツと唳へ、汗をブルブルかき乍ら、一同の手前を憚り、顔をも得拭はず、

「ヤアえらい修業をさせられたものだ。こんな事なら、モウ二三日どつかで遊んで来たらよかつたに……」
と心の内に思ひ乍ら、苦しさを恠へて居る。

以前の八千代姫、照代姫は三人の侍女に膳部を運ばせ、恭しく三人の前に無言の儘つき出した。見れば飯も平も汁も生酢も一切團子石や砂許りが盛つてある。

三人の侍女はしづしづとして、無言の儘立去つた。照代姫、八千代姫は盛装をこらし、二人各銀扇を開いて無言の儘、壬生狂言の様に三人の馳走の心持か、品よく、手拍子足拍子を揃へ、一時許り汗をたらして踊つて見せた。其手つき足つき、尻の振りやう、腰の具合、實に滑稽を極め、吹き出す様に思はれたが、無言の行の此席には吹き出す事も出来ず、可笑しさを無理に恠へて居る苦しさ。厳しき暑さに喉は渴いて来る。腹は空いて来る。され共石を食らふ譯にもゆかず、恨めし相に膳部を眺めてゐるのみであつた。照代姫、八千代姫は一時許り踊つた末、次の間に姿を隠した。

交る交る男女入り来りて、面白き物眞似を演じ、一同の腮をとき、笑ひ倒さむ

と努むるものの如くであつた。されど何れも、そんな事が何が可笑しい……と云つた様な澁り切つた顔をして、可笑しさを隠して居る。

斯くして漸く三日三夜を過ぎた。俄に騒々しき人の足音、何事ならむと三人は心を配る折、數多の從臣に守られて、歸り來りしは照彦王、照子姫の一行であつた。

矢庭に奥殿に進み入り、これ亦無言の儘、三人に軽く目禮し、夫婦は目と目に物言はせ乍ら、別館に足早く姿を隠した。

照彦王の御供に仕へし男女も同じく無言の儘、一同に軽く目禮し、其場に行儀よく列を正して端坐して居る。稍少時あつて別館より、照彦王、照子姫の奏上する天津祝詞の聲響き來る。一同は此聲に連て、待兼てみた様な調子で、天津祝詞を奏上し天の數歌を唱へ上げた。されど日楯、月鉾、ユリコ姫は依然として無言の儘、合掌して暗祈黙禱を續くるのみであつた。

暫くあつて照彦王、照子姫は、以前の美人八千代姫、照代姫に三寶を持たせ乍ら、三人の前に嚴然として現はれ、軽く目禮して物をも言はず、照代姫、八千代

姫に目配せすれば、二人は三寶を三人の前に差出した。見れば三通の封書である。一通は日楯に、又他の二通は月鉾、ユリコ姫の宛名が記してあつた。三人は無言の儘押戴き、直に封を押切つて開き見れば、種々の神示が示されてある。三人は喜びの色を現はし、無言の儘感謝の意を示した。照彦王、照子姫は悠々として又もや別館に姿を隠した。

茲に日楯の一行は一同に目禮し乍ら急ぎ館を立出で、表門を潜り、城外に走り出た。後より八千代姫、照代姫は息もせきせき追つかけて来る。漸くサワラの都の南の門にて、二人は追ひ付き、爰に二男三女は常楠仙人の立籠る向陽山を指して進み行く事となつた。

(大正一一・八・九 舊六・一七 松村眞澄録)

第一四章 二男三女(八一四)

天津御空に照り亘る
日楯、月鉾、兩人は

照彦王や照子姫
數多の人に立別れ

サワラの城を後に見て
緑、紅、白、黄色

花咲く野邊のユリコ姫
盡きせぬ御代も八千代姫

神の御稜威も照代姫
二男三女の五身靈

照彦王の密書をば
力と頼み向陽の

高嶺をさして進み行く。

二男三女は無言の儘、向陽山を指して進んで行く。
照彦王より與へられたる密

書には、

向陽山の麓を流るる大谷川の畔迄は決して言語を發す可らず、其川を渡ると共に、發言自由たるべし。向陽山には常楠仙人永住して汝等一同に攝受の劍と折伏の劍を與へ玉ふべし。これを受取つて、汝等は一日も早く泰安城に立向ひ、魔軍を言向け和し、且つヤーチン姫及眞道彦、カースル王其他一同を救ふべし」

との文意ぶんいが示しめされてあつた。行く事こと殆どほとん五六里ごろくり、徒歩とほに稍疲ややつかれを感じかん、山麓さんろくまでは到底たうてい日の内うちに到達たうたつし難がたく思おもはれた。

茫茫ぼうぼうたる萱野原かやのほらに、萩はぎ、桔梗ききやう、百合ゆりの花はなは配置はいち良く咲さき匂におうて居ゐる。二男になん三女さんぢよは草くさを分わけ、漸やうやくにして、向陽山麓こうやうさんろくの木き々の梢こすゑまで肉眼にくがんにて見み分わくる計ばかりの地ち點てんまで近寄ちかよつた。忽たちまち前方ぜんぱうに當あたりて、大なる沼ぬまが横よこたはつて居ゐる。水底みなそこ最も深ふかく、周圍ゐの樹木じゆもくは沼ぬまの底そこに逆さかしまに影かげを映うつし、大空たいくうの淡雲たんうんは沼底ぬまそこに映うつつて居ゐる。不思議ふしぎにも五人ごにんの姿すがたは沼ぬまの水みづに逆さかしまに映うつり、何なんとも言いはれぬ麗うるはしき光景くわうけいであつた。一同どうは八夕はつたと突當つきあたり、如何いかがはせむと思案しあんに暮くれてゐたが、言語げんごを發はつする事ことを戒いましめられ居ゐる爲ため、互たがひに相談さうだんする事ことも出で來きず、どうせうかと手眞似てまね、目使めつかひ等とうにて話はなし合あつて居ゐる。

日は漸やうやく山やまの尾をの上へに姿すがたを没ぼつし、夕ゆふべの風かぜはソヨソヨと吹ふき出だし、木この葉はの梢こすゑにゆらく影かげは、沼底ぬまそこに逆さかさまに映うつり、數多あまたの小魚せうぎよの躍をどるが如ごとく見みえて來きた。進退しんたい惟谷これきはまつたる五人ごにんは愈意いよいよを決けつし、底そこひも知しれぬ沼ぬまを目め蒐がけてバサバサと歩あゆみ出だした。不思議ふしぎにも此深このふかき沼ぬまにも係かかはらず、五人ごにんの身からだ體たいは膝迄ひざまでも没ぼつするに至いたらず、易々やすやす

とさしもに廣き沼の面を、彼方の岸に渡り着き、後振り返つて眺むれば、沼らしき影だにもなく、いろいろの草花が廣き原野に咲き満て居た。これは常楠仙人が仙術を用ゐ、五人の信仰力を試す爲に地鏡を映出したのである。

夜の帳は細やかに下ろされて、月は周圍の高山に隔てられ、姿を見せず、星の光は何となく、雨氣の空の様に低う麗しく瞬いてゐる。二男三女は例の手眞似にて合圖をなし、爰に一夜を明かす事となつた。

猛獸の唸り聲、前後左右より刻々に高く、烈しく響き來る。一同は心の中に天の數歌を稱へ、暗祈黙禱を續けてゐる。そこへ一種異様の大怪物、鹿の如き枝角の一丈計りあるものを頭に戴き、大象の如き大動物、バサリバサリと進み來り、五人の前に鏡の如き巨眼を光らせ、大口を開き、洗濯屋の張板の様な長廣舌を左右に振り乍ら、一行を目がけて舌に巻き込まんとして居る。日楯、月鉾は無言の儘、兩手を組み、怪物の前に進み寄るや、怪物は象が鼻にて子供を捲く様に、舌にてペロペロと巻き乍ら、喉の中へ二人共一度に呑み込んで了つた。

三人の女は愈決心を固め怪物のなすが儘に任した。怪物は以前の如く、舌にて

ひとりひとりま
一人一人捲いては吾背に乗せあげ、三人共大象の幾倍とも知れぬ様な大背中に乗
せた儘、向陽山を目蒐けてドシンドシンと地響きさせ乍ら進んで行く。日楯、月
鉾の兩人は怪物の腹に吞まれ乍ら、別に痛苦も感ぜず、暖かき湯に入りたる如き
心地して、運命を惟神に任せて居た。

忽ち轟々たる水音耳に入るよと思ふ間に、あたりはパツと、際立つて明くなつ
て来た。見れば其身は向陽山麓の大谷川の激流を渡りて、其岸邊に立つて居た。
三人の女は、岸の彼方に激流を眺め、二人の首尾克く山麓に渡り得たるを恨めし
げに眺めて居た。

日楯始めて口を開いて、

「惟神靈幸倍坐世」

と言ひ乍ら、

日楯「モシ月鉾さま、無言の行も随分辛いものでしたなア。さうして地鏡の沼に
出會した時の胸の驚き、ヤツと安心する間もなく、今度は大怪物に出會し舌に巻
かれて腹に葬られ、どうなる事かと心配して居つたが、何時の間にか、怪物の影

はなく、吾々二人は此渡る可らざる大激流を、無事に渡つて居たのは、何と思つても合點が往かぬぢやないか。コリヤ、うかうかとしては居られまい。何を言うても常楠仙人の隠れます聖場だから、謹んだ上にも慎んで参らねば、幾度もあの様な試みに會はされては堪りませぬからなア」

月鉾「左様です。此球島へ渡つてからと云ふものは、實に不思議な事計り、神秘的な島ですなア。それにしても照彦王、照子姫様は仙人に出會ひ攝受の劍と折伏の劍を得て來いと教書に御示しになつて居るが、果して與へられるであらうか、それ計りが心配でなりませぬワ」

日楯「照彦王は吾々に此御用を致さすべく、前以て御夫婦がどつかの高山へ登られ、非常な苦勞を遊ばして、神勅を受け御歸りになつたのだから、滅多に間違ふ氣遣ひはありませんまい。疑は益々神慮を損ふ所以となりませう。兔も角教書の儘を固く信じ今後如何なる艱難辛苦に出會うとも、屈せず撓まず、忍耐を強くして、目的を達せなくては、折角遙々此處まで参つた甲斐が有りませぬ。先づ此處で天津祝詞を奏上致しませう」

月鉾も此言葉に打諾き、二人は川岸に端坐して天津祝詞を奏上した。不思議や三人の女は激流の上を平然として此方に渡り来る。兩人は手を拍ちて喜び、全く神の深き御庇護と又も感謝の祝詞を奏上する。三人は漸くにして激流を渡り、二人の前に來つて嬉し相に笑を湛へ乍ら、二人を手招きしつつ、さしもの急坂を猿が梢を傳ふ如く登り行く。見る見る間に三女の姿は山霧に包まれ見えなくなつて了つた。日、月二人は互に顔を見合せ、

日楯「何と月鉾さま、神仙境はヤツパリ神秘的な事が續出致しますなア」

月鉾「本當に不思議なこと計りですワ。それにしても三人の女の、あの足の早さ、人間業とは思はれませぬ。大方仙人の靈魂でも憑依したのでせうかなア」

日楯「何は免もあれ、此高山を一刻も早く登りきはめねばなりませんまい。サア急ぎませう」

と日楯は先に立ち、宣傳歌を歌ひ乍ら登り行く。

向陽山は峰巒重疊たる中に巍然として聳え立つて居る靈山である。山頂に達する迄には幾十とも知れぬ山を越え、谷を涉り、或は廣き山中の湖水を涉りなどせ

なくては、到底達し得ない、要害堅固の絶勝である。

二人は漸くにして、山中の稍廣き湖水の畔に着いた。俄に女の叫び聲、あたり

の森林に聞えて来る。フト聲する方を眺むれば、幾丈とも知れぬ大蛇、ユリコ姫

の身體を腰のあたり迄呑みこみ、鎌首を立てて渦巻いてゐる。日楯、月鉾は大に

驚き、如何はせむと稍少時、首を傾けてゐた。ユリコ姫は聲を限りに、

ユリコ姫「日楯様、どうぞ妾をお助け下さいませ」

と手を合して命限りに叫んでゐる。又もや女の泣聲、フト目を右方に轉ずれば、

照代姫、八千代姫の二人は、これ又二匹の大蛇に半身を呑まれ、顔の色迄青くな

り、聲も碌々に得立てず、兩人の方に向つて手をあはせ、救ひを求めてゐる。

日楯は吾女房を救はむか、八千代姫、照代姫を如何にせむ、照代姫、八千代姫

を救はむか、吾妻の生命を如何にせむと去就に迷ひつつあつた。月鉾は「ウン」

と一聲斷末魔の聲と共に、其場に打倒れ失心状態になつて了つた。日楯は現在の

弟は斯の通り、妻も亦瞬間に迫る生命、救ひたきは山々なれど、先づ八千代姫、

照代姫を救ふこそ人たる者の行ふべき道ならむと決心し、あたりに落ち散つたる

太き角杭を折るより早く、八千代姫、照代姫を呑みつつある大蛇に向つて、首筋あたりを力限りに打ち据えた。見れば大蛇の影も、女の姿もなく、只月銚のみ足許に倒れて居た。

日楯「ハテ訝しや」

とあたりを見れば、白髪異様の老人、藜の杖をつき乍ら、木の茂みを分けてのそりのそりと近付いて来る。日楯は直に湖水の水を口に含み、月銚の面上に注ぎかけた。月銚は漸くにして正氣に復り、あたりをキヨロキヨロ見廻して居る。月銚の卒倒したのは、ユリコ姫其他二人の大蛇に呑まれたる姿を眺めて驚いた爲である。

白髪異様の老人は二人に向ひ、微笑を浮べ乍ら、手招きしつつ老の身に似ず、雲を翔るが如く、向陽山の頂上目蒐けて足早に登り行く。二人は老人の後に従ひ、息を喘ませ乍ら、足の續く限り急ぎ登り行くのであつた。

老人の姿は早くも向陽山を包む白雲の中に消えて了つた。二人は一生懸命になつて一里計り登り行けば、八々と突當つた大岩石がある。よくよく見れば此岩は

鏡の如く日光に照り輝き、三人の女の姿が奥の方に歴然と映つて居る。三女は二人の姿を見て早く來れと手招きをして居る。其距離殆ど二百間計りであつた。兄弟二人は三人の側に行かうとしてあせれ共、鏡の如く透き通つた此岩も、入口は分らず、非常に氣を揉んで居る。

ユリコ姫外二人は頻りに早く來れ……と差招く。兄弟は心をいらち、進み入らむとすれ共、硝子の如き岩に突當つて、入口がどう藻掻いても分らない。此時頭の上の方から「天津祝詞」……と云ふ聲が聞えて來た。二人はハツと氣がつき、直に拍手し、天津祝詞を聲もすがしく奏上し始めた。

二人の身體は何者にか吸ひ込まれる様に、透明なる岩窟の中に自然に進み入つた。忽ち山嶽も崩れる計りの大音響聞え來ると見る間に、周圍一丈計りの黒色の大蛇、腹の鱗は血にただれ乍ら、十數匹、此岩窟に向つて勢猛く進み來り、兄弟を呑まむと、大口を開けて焦れども、入口の分らざる爲、大蛇は外にて残念相に頭を竝べて二男三女の姿を眺めて居る。

二男三女は心中に深く神徳を感謝し乍ら、尚も奥へ奥へと進み入る。際限もな

き岩窟をもしや蛇の入口を探り、後より追ひ來らざるやと、稍恐ろしさに、知らず知らずに足は意外に早く運びて、終に岩窟の終點に着いた。茲には以前現はれし白髪異様の老人が嚴然として立現はれ、一同に向ひ言葉おごそかに、老人「われは當山を中心として琉球の夫婦島を守護致す常楠仙人であるぞ。其方は父の難を救ひ且つ國王を始め、數多の人々の苦難を救はむ爲に遙々此處に來ること、實に殊勝の至りである。汝等は之より一刻も早く此島を離れ、エルの港より船に乗り、照代姫、八千代姫と諸共に、キールの港に向つて立歸れよ。又汝に與ふべき神寶は、此岩窟の入口にあれば、身魂相應に其一個を所持して歸れよ。さらば」

と言つたきり、老人の姿は煙となつて消えて了つた。五人は爰に於て又もや天津祝詞を奏上し、元來し岩窟の入口に大蛇は歸りしかと氣遣ひ乍ら、漸くにして入口を出で見れば、そこに二つの玉と三つの鏡が置いてある。これは最前襲ひ來りし大蛇の所持して居た寶であつたが、餘り二男三女の姿を見て戀慕の念を起し、遂に此寶を知らず知らずに體內より脱出し歸つた後であつた。

日楯は日の色に因みたる赤玉を取り、月鉾は白き玉を拾ひ、ユリコ姫、八千代姫、照代姫は光り輝く大中小三個の鏡を各一面づつ拾ひ上げ、押戴いて、道々天の數歌を歌ひ乍ら向陽山を降り行く。

漸くにして大谷川の岸に着いた。さしもの急流容易に渡るべくも見えなかつた。ユリコ姫は大の鏡を懷中より取出し、川の面を照らした。不思議や大谷川の水は板にて堰き止めたる如く横に分かれて、一滴の水もなき道路がついた。二男三女は足早に川中を向うへ渡り後ふり返り見れば、大谷川は依然として激潭飛沫の大急流になつてゐる。これより一同は足を早めて、三日三夜の後エルの港に到着し、繋ぎおきし船に身を托し、日楯、月鉾二人は艀櫂を操り、荒れ狂ふ海原を難なく漕ぎ渡り、漸くキールの港に、夜半の頃安着した。

これより二男三女は一旦玉藻山の聖地に歸り、玉、鏡を安置して、日夜祈願をこらし龍世姫命の神勅の下るを待つて大活動を開始せむと、晝夜祈願を凝らして居た。

二男三女は璽鏡の神寶を手に入れ、意氣揚々として、天嶺、泰嶺の聖地には立

寄らず、中心靈場なる玉藻山の聖地に立歸り、殘存せる誠實なる信徒に迎へられ、
璽鏡の寶物を宮殿深く納め、無事凱旋の祝宴を開いた。
マリヤス姫はテーリン姫を伴ひ、嬉し相に此席に列し、二男三女の功績を口を
極めて賞揚し、神前に祝意を表する爲、自ら歌ひ自ら舞ひ始めた。其歌、

マリヤス姫「天運茲にめぐり來て 枯れたる木にも花は咲く

尊き御代となりにけり 神代の昔國治立尊は

豐葦原の瑞穂國 中心地點と聞えたる

貴の都のエルサレムに 無限絶對無始無終の

森羅萬象を造り玉ひし 天御中主大御神

又の御名は大國治立尊の 大御神勅を受けまして

豐葦原の瑞穂國に 天津御空の神國の

神の祭政を布かむとし 心を千々に碎きつつ

治く天地神人の 身魂の爲に盡されし

其神業も隙行く駒のいつしかに 曲の猛びに遮られ

尊き御身を持ち乍ら 此世を捨てて良の

自轉倒島の秀妻國 國武彦と名を變へて

下津岩根の綾錦 紅葉の色も紅の

明き神代を建てむとて 宣る言靈の【一二三】つ

【四】尾の山に永久に 【五】つの御靈を隠しまし

【六七】しく神代の來るをば 待たせ玉ふぞ尊けれ

【八】千代の春の玉椿 【九】つ花の咲き出でて

【十】の神代を築きあげ 【百千萬】の民草に

惠の露を垂れ玉ふ 尊き御代を松の世の

神の心は永久に 龍世の姫の鎮まりゐます

此神島に花森彦命を 天降し玉ひ顯事

幽事をば眞道彦命に 依さし玉ひし神事は

千引の岩の動きなく 常磐の松の色褪せず

茲こゝに現あらはれ來きたりまし
國く治はる立たちのおほかみ
大神かみの

計はかり玉たまひし松まつの世よも
今いまや開ひらくる世よとなりぬ

眞ま道みち彦ひこ命ことは
黒あや白めも分わかぬ窟くつ上じやうの

牢いと獄やの中なかに投なげ込こまれ
日に夜ちやに苦く難なんを嘗なめ玉たまへ共ども

天あまの岩いは戸とも時とき來くれば
忽たちち開ひらく世よの習ならひ

日じ月げつ潭たんに現あれませる
日ひ楯たて、月つき鉾ほこり兩りやう人にんが

誠まこと心こころの現あらはれて
御み稜いづ威づも茲こゝに照てる彦ひこ王わうの

神かみの教をしへに導みちびかれ
向こう陽やう山ざんに登のぼりまし

神しん變べん不ふ思し議ぎの神かむ術わざを
悟さとりましたる常つね楠くす仙せん人にんが

水みづも洩もらさぬ計はからひに
龍たつの腮あぎとの玉たま、鏡かがみ

二に男なん三さん女にょは恙つつがなく
身み魂たま相さう應おうに授さづけられ

神しん德とく光ひかる日じつ月げつ潭たんの
中なかに泛うかべる玉たま藻も山やまの

聖せい地ちに歸かへり來きますこそ
三あ五な教なひの教をしへの花はなの開ひらけ口ぐち

ママリヤスリヤス姫ひめも今け日ふこそは
心こゝろの底そこより勇いさみ立たち

五の御魂の神人が 御國の爲に盡してし

誠心を褒め奉り 稱へ奉るぞ嬉しけれ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と歌ひをはり舞ひ終つて、元の座につきにけり。

(大正一一・八・九 舊六・一七 松村眞澄録)

第一章 願望成就(八一五)

日楯は祝意を表する爲、マリヤス姫に倣つて自ら歌ひ且つ自ら舞ひ始めた。

遠き神代の昔より 尊き神の選みてし
高砂島の中心地 雲に聳えた新高の

山の巽の神聖地

日月潭の湖を

控へて清き玉藻山

遠津御祖の眞道彦命は

代毎々々に神定の

此處に鎮まりましまして

尊き神の御教を

四方の民草残りなく

教へ導き玉ひつつ

父の命の御代になり

醜の教のバラモン教

此神島に渡り來て

體主靈從の振舞を

世人の頭に浸み込ませ

日に夜に曇る人心

山河どよみ草木枯れ

四方の人々泣き叫び

争ひ絶ゆる隙もなく

修羅の巷となり果てぬ

父の命は今の世の

有様見るに忍びかね

心を盡し身を盡し

誠の道を世の人に

朝な夕なにこまごまと

諭し玉へど如何にせむ

時の力は容赦なく

惡人榮え蔓りて

善はますます凋落し

神かみの威徳ゐとくも完全くわんぜんに

現あらはれ玉たまはず今いまは早はや

御國みくにの爲ために盡つくしたる

其眞心そのまごころが仇あだとなり

カールス王わうに疑うたがはれ

往來ゆきき絶たえたる岩窟上がんとくじやうの

暗くらき牢獄ひとやに呻吟しんぎんし

果敢はなき浮世うきよを歎かこちつつ

暮くらし玉たまへる悲かなしさに

吾等われら兄弟きやうだい兩人にやうにんは

烏羽玉うばたまの世よを

旭あさひの豊榮とよさか昇のぼること

照てらし清きよめて國民くにたみを

塗炭とたんの苦くより救すくひ出だし

父ちちの命みことの冤罪ゑんざいを

すすぎまつりて孝養かうやうを

盡つくさむものと國魂くにたまがみ神

龍世たつよの姫ひめの神勅しんちよくを

いと嚴おごそかに被かかりて

アリス山ざんを打渡うちわたり

須安シユアンの山やまの峰傳みねづたひ

ふみも慣なららはぬ長ながの旅たび

千里せんりの波なみを乗切のりきりて

弟月銚おとうつきほこ、ユリコ姫ひめ

茲ここに三人みたりは琉球りうきうの

南みなみの島しまに安着あんちやくし

サワラの都みやこに進すすみ入り

三五教あななひけうの神司かむつかさ

國王こぎしを兼かねたる照彦てるひこ王わうや 照子てるこの姫ひめに面會めんくわいし

神政しんせい成就じやうじゆの神策しんさくを いと細こまやかに教をしへられ

大谷川おほたにがはを打渡うちわたり 向陽山こうやうざんの岩窟がんくつに

進すすみ進すすみて常楠つねくすの 神かみの司つかさの仙人せんじんに

玉たまや鏡かがみを授さづけられ 二男になん三女さんによの五いつ身魂みたま

心こころも勇いさみ身みも輕かるく 再ふたび船ふねを操あやつりて

此この神島かみしまに到着たうちやくし やうやう此處ここに歸かへりけり

あゝ惟かむながらかむながら 御靈みたまの幸さちを蒙かうむりて

吾等われら兄弟きやうだい始はじめとし ユリコの姫ひめや八千代やちよひ姫め

曇くもる此世このよも照代てるよひ姫め 奇くしき功績いさをを現あらはして

父ちちの命みことの永久とこはに 鎮しづまりみませし靈場れいぢやうに

歸かへり來きたれる嬉うれしさは 何なんに譬たとへむ物ものもなし

あゝ尊たふとしや神かみの恩おん 仰あふぐも畏かしこき神かみの德とく

いよいよ吾等われらは大神おほかみの 大御守おほみまもりを力ちからとし

泰安城に立向ひ

玉と鏡を手に持ちて

言靈戦を押開き

魔神を残らず言向けて

カールス王やヤーチン姫の

珍の命を始めとし

戀しき父の生命をば

救ひ奉らむ時は來ぬ

思へば嬉し神の恩

仰げば高し神の徳

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ終つて座に着いた。月鉾は又もや立上り自ら歌ひ自ら舞ひ始めた。

時世時節といひ乍ら

父は牢獄に捕へられ

三五教の聖地なる

玉藻の山に立向ひ

千代の住家と定めたる

數多の神の取次も

父の命の遭難に

心の生地を露はして

神に反いて逃げ歸り

阿諛諂佞の限りを盡し

カールス王に取入りて

自己の利益や榮達を

謀る魔神と還りけり

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

二つなき身の生命をば

神の爲には捧げむと

口先計り華やかに

囀りゐたる百鳥の

尻より糞を引つかけて

素知らぬ顔の曲業に

無念の涙やるせなく

朝な夕なに國魂神の

珍の御前にひれ伏して

祈る折りしも龍世姫

いと嚴かに現はれて

吾等二人に打向ひ

汝はこれより琉球の

南の島に打渡り

サワラの都の照彦王に

一日も早く面會し

至治太平の神策を

授かり歸れと詳細と

宣らせ玉ひし嬉しさに

兄の日楯やユリコ姫

暗に紛れて聖地をば

密に立出で蓑笠の

輕き扮装トボトボと

山路を傳ひてアーリスの 峠にかかり路端の

巖に腰を打掛けて 息を休むる折柄に

思掛けなきテーリン姫が 蛇が蛙を狙ひし如く

執念深くも後追ひて 大膽至極の一人旅

ヤツサモツサと恨み言 百萬ダラリと竝べられ

困り切つたる最中に 現はれ出でしマリヤス姫の

珍の命の御計らひ 金剛杖を打ふりて

吾身體を滅多打 木石ならぬ月鉾も

腹は切りに立騒ぎ 悔し涙は雨の如

降り來れ共如何にせむ 大事を抱へし今の身は

堪忍するより道なしと 諦め居たる折柄に

テーリン姫は忽ちに マリヤス姫の御腕に

力限りに噛りつき 争ふ隙を窺ひて

吾等三人は逸早く 暗に紛れて身をかくし

山の尾をわた涉り谷たにを越えこ いろいろ雑多ざつたの苦くるみを

嘗なめてやうやうキル港みなと 船ふねを求もとめて波なみの上うへ

琉球島りゅうきゅうじまに安着あんちやくし 龍世たつよの姫ひめの命めいの如ごと

照彦夫婦てるひこふうふや常楠つねくすの 尊たふとき神かみにめぐり會あひ

五いつつの寶たからを授さづかりて 漸やうやく茲ここに歸かへり來きぬ

あゝ惟かむながらかむながら神々々かむながら 御靈みたま幸さちはひましまして

今日けふの生いく日の喜よろこびは 煎いりたる豆まめに生いきばな

咲さき匂におひたる思おもひなり 天津御神あまつみかみや國津神くにつかみ

國魂神くにたまがみの御惠おんめぐみ 未いまだ吾々われわれ兄弟きやうだいを

見放みはなし玉たまはぬ嬉うれしさよ さらば是これより五いつ身魂みたま

水火いさを合あせて泰安たいあんの 都みやこに進すすみ言靈ことたまの

伊吹いぶきの征矢そやを放はなしつつ 群むらがる魔神まがみを言向ことむけて

國治立大神くにちりたのおほかみの 仕組しぐませ玉たまひし五み六ろ七くの世よ

堅磐常磐かきはときの松まつの世よを 千代萬代ちよよろづよに動ゆるぎなく

建設せむは案の中　マリヤス姫の計らひに

テーリン姫はアリスの　山の尾の上の争ひを

漸く茲に納得し　今迄時節を待居たる

其心根の健氣さよ　さはさり乍らテーリン姫

妹背の契を今ここで　結び了へむは易けれど

泰安城の一戦　無事に凱旋する迄は

暫く待つて賜へかし　あゝ惟神々々

龍世の姫の御前に　固く御誓ひ奉る

必ず共にテーリン姫　心を悩ます事勿れ

と歌ひ了つた。テーリン姫は直に立上り、銀扇を擴げて、自ら歌ひ自ら舞うた。

『男心と秋の空　猫の目玉と諸共に
變り易いと聞くからは　如何なる固き御言葉も』

妾は心安からず 添はねばならぬ身魂なら
今でも将来でも同じこと 美味い物なら先に食へ
世の諺もあるものを 何れの人に氣兼して
左様の事を仰有るか 聞えませぬぞえ月鉾さま
そんな氣休め妾に云うて 結構な玉を手に入れた
爲にお前の心が變り 田舎じみたるテーリン姫を
一生一代の女房に持つよりは 泰安城に到りなば
桃や堇や櫻花 選り取り見取りのよい女房
勝手氣儘に娶らむと 先を見越してのお前の言葉
妾はどしても腑におちぬ どうせ添うなら今の内
大事を抱へたお前の身の上 無理に枕を交せとは
妾も野暮な女でない限り 分らぬ事は云ひませぬ
マリヤス姫の御前で 二世も三世も夫婦ぞと
キツパリ言うて下さんせ お前の兄の日楯さま

ユリコの姫と手を曳いて 仲よう暮してゐるでないか

お前は妾を邪魔者扱に なさつて一人琉球の

島へお出でたばかりに 夫婦の中に只一つ

白い玉よりありはせぬ お前の兄の日楯さま

夫婦揃うて神業に お勤めなさつた其おかげ

玉と鏡の夫婦事 これでも分るであります

あの時お前が此妾を 御用に伴れて行つたなら

妾も結構な神業に 加はり珍の御鏡を

貰うて歸つたに違ひない 今度お前が泰安城へ

言靈戦に行くなれば 日楯夫婦と同じ様に

妾と結婚相済まし 夫婦の水火を合せつつ

神の御用に立たうでないか これ程妾が言わけて

言うても聞かぬお前なら ヤツパリ今のお言葉は

嘘と言はれても仕方があるまい 早く返答承はりませう

あゝ惟神々々かむながらかむながら 國魂神くにたまがみの龍世姫様たつよひめさま

何卒々々今ここでなにとぞなにとぞいま 夫婦の契ふうふ ちぎりを結むすばせ玉たまへ

テーリン姫ひめが眞心まごころを 捧ささげて祈いのり奉たてまつる

あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸みたまさちはひましませよ」

と歌うたひ了をはつた。月鉾つきほこは當惑顔たうわくがほを隠かくし、

「あゝテーリン姫様ひめさま、あなたの御心おこころはよく分わかりました。私わたくしもこれから千騎せんき一騎いつきの活動くわっとうを致いたさねばなりません。女房にようぼうがあつては、其その爲心ためこころを惹ひかれ、思おもふ様やうの活動くわっとうが出来できませぬから、どうぞ凱旋がいせんの後のちまで待まつて下ください。キット約束やくそくを履行りかう致いたしませう。……マリヤス姫様ひめさま、さう致いたしましたら、如何どうでムいませうかな」

マリヤス姫ひめ「へい……」
と言いつた限きり、默然もくねんとして俯うつむいてゐる。

テーリン姫ひめ「女房にようぼうがあつては氣きを惹ひかれて十分じふぶんの働はたらきが出来できぬとは、これは又また妙めうな事ことを仰おつしや有ありますな。女房にようぼうがあつて働はたらきが出来できないのなら、世界せかいの男をとこは殘のこらず未みけ

結婚で居る筈ぢやありませんか。日楯さまでさへも、夫婦揃うて立派に御神業を御勤め遊ばしたぢやありませんか。瓢箪鯨式に何とか彼んとか云つて、一時逃れに日を延ばし、妾を姥櫻にして了解方方の御考へでせう。何と仰有つても、妾は貴方の後を慕ひ戰場に向ひます。貴方と一緒に参り、チツとでも御邪魔になる様な事がありましたら、妾も女の端くれ、潔う喉を掻き切つて死んで見せませう」

月鉾「そんな事をさせともないから、凱旋の後まで待つて呉れと云ふのだ」

テーリン姫「それ程妾をヤクザの女とお見下げ遊ばして御座るのですか。妾だつてユリコ姫様のなさる事位は立派に勤めてお目にかけます。……コレコレ、マリヤス姫様、貴女は、アーリス山で妾に仰有つたぢや御座いませぬか。どうぞ早く結婚の取持をして下さいませ。此期に及んで躊躇なさるのはヤツパリ末になつて月鉾さまと情意投合なさるお考へでせう」

と妙な所へ鉾を向けて駄々を捏ね出した。マリヤス姫は是非なく思ひ切つた様に、マリヤス姫「月鉾さま、是非此場で結婚の式を擧げて下さい。萬一お聞き下さらねば、妾はテーリン姫様の疑惑を解く爲、ここで自刃して相果てまする」

と早くも懐劍をスラリと引抜き決心の心を現はし、唇をビリビリ震はせ、顔色青ざめて、唯事ならぬ氣配を示してゐる。

月鉾「ハイ、貴女の御意に従ひます。……テーリン姫様、そんなら今日から天下晴れての夫婦仲、どうぞ末長う御世話を頼みます」

テーリン姫飛び立つ許りに打喜び、

「マリヤス姫様、有難う、……月鉾さま、お前は立派な男、流石は眞道彦様の御胤、私の觀察は違はなかつた」

と狂氣の如く喜び、直に神前に驅上つて、感謝の祝詞を奏上するのであつた。

マリヤス姫の媒酌にて芽出度く、月鉾、テーリン姫の結婚は行はれた。これより、マリヤス姫を首領とし、日、月夫婦を始め、八千代姫、照代姫の二男五女は、愈準備を整へ、泰安城へカールス王、ヤーチン姫、眞道彦命其他を救ふべく出陣する事となつた。

(大正一一・八・九 舊六・一七 松村眞澄録)

第一六章 盲龜の浮木（八一六）

一旦三五教の眞道彦の神軍の爲に潰走し、各地に潛伏して、捲土重來の時機を伺ひゐたるシヤールカルタン、トロレンス、セールス姫、サアルボース、ホーロケース、セウルスチン、タールス、ツーレンス、ナンドールス、ビヤセールの一派は三角同盟軍を作つて泰安城に夜陰に乘じ、鬨を作つて攻めかけ、石火矢を放ち、さしも堅固なる金城鐵壁も、一夜さの内に脆くも陥り、カールス王を始めテールスタン、ホールサーズ、ホーレンス、ユートピヤール、ツーレンス、シーリンス、エール、ハーレヤール、オーイツク、ヒューズ、アンデーヤール、ニユージエール、ハール、カントン、マルチル、ウラール、キングス、トーマス、マーシヤール、ヤールス姫、カーネール姫の大將株を始め悉く捕虜となり、淡溪の上流なるカールス王が一旦陣取ゐたる岩窟城の暗き牢獄に残らず繋がれ、日夜の苛酷なる責苦に苦めらるることとなつて了つた。

一旦取返されたる泰安城は、セールス姫を女王と仰ぎ、シヤールカルタン、トロ

レンスは左守、右守の神となり、サアルボース、ホーロケース、セウルスチンは各重要の職に就き、再び新高山以北の地の政權を掌握し、勢に乗じて三五教の聖地日月潭を始め、國魂神の祭りたる宮殿を占領し、バラモン教の勢力を樹立せむと、セウルスチンを將となし、サアルボース、ホーロケースは副將となり、數萬の軍卒を率ゐ、アーリス山を、旗鼓堂々として乗越え、今や玉藻の湖水の間近くまで押寄せて來た。

茲に玉藻山の聖地よりは、マリヤス姫を神軍の將となし、日楯、月銚、ユリコ姫、テーリン姫、照代姫、八千代姫は僅の從者と共に、此大軍に向つて、言靈戰を開始すべく立向うた。敵の先鋒隊と三五軍の一隊とは玉藻湖の畔で出會し、セウルスチンの率ゆる數多の軍卒は、少數の敵と侮りて、マリヤス姫の小部隊に向つて、竹槍の穂先を揃へ、獅子奮迅の勢にて呐喊し來る物凄さ。マリヤス姫は直にユリコ姫に命を降し、大蛇の鏡を取出さしめ、寄せ來る猛卒に向つて射照らしめた。ユリコ姫の取出したる鏡は忽ち強度の光輝を發し、敵軍は一人も残らず、眼眩み、心戦き、脆くも一戦をも交へずして、其場に將棋倒しとなつて倒れて了

つた。

セウルスチンは鏡の威徳に眼眩み、生命カラガラ部下に助けられ、何處ともなく遁走して了つた。大將セウルスチンの此見苦しき戦敗を見て、左右の副將サアルボース、ホーロケースは軍容を紊し、吾れ先にと泰安城指して、一目散に退却して了つた。

先鋒隊として此處に進みたる猛卒は、殆ど五六千人に及んで居た。一人も残らず目を失ひ、處狭き迄に打倒れて呻吟しつつ、手探り、足探りに逃げ行かむとしては、谷に顛落し、互に衝突して混亂を極め、其慘状目も當られぬ計りであつた。マリヤス姫は直ちに言靈を以て彼等を歸順せしめむと、聲も涼しく宣傳歌を歌ひ出した。

神が表に現はれて

善と惡とを立分ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ
月は盈つ共虧くる共

朝日は照る共曇る共
假令大地は沈む共

セールス姫の軍勢は
假令幾萬攻め來共

如何に勢猛く共
誠の神の御教を

守りて立てる三五の
寄せ來る敵を打拂ふ

神の軍は悉く
心の眼を失ひし

セウルスチンを始めとし
百の軍は悉く

心の眼のみならず
セールス姫の率ゐたる

肉の眼を失ひて
のた打まはる憐れさよ

玉藻の湖畔に呻吟し
誠の神は世を救ふ

吾はマリヤス姫の神
吾言靈を聞き分けて

セウルスチンの軍人
誠一つの三五の

神の教に立返れ
神は吾等と俱に有り

正義に刃向ふ刃なし
汝の身にも神ゐます

一時も早く眞心に
なりて前非を大神の

御前に悔いよ諸人よ
人は素より神の御子

神に受けたる其身魂
研けば元に復るなり

あが言靈の曲耳に
通ひし者は逸早く

三五教の大神の
尊き御名を謹みて

褒めよ稱へよ神の御子
神の誠に通ひなば

汝の眼忽ちに
月日の如く明らけく

萬の物を眺め得む
あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ

と歌ひ終るや、数千の目を失ひたる軍卒は叶はぬ時の神頼み……と云ふ様な按

配式で、一生懸命に両手を合せ、聲を揃へて、

□ 惟神靈幸倍坐世 □

と幾回となく、繰返し繰返し奏上した。其聲は四邊の山嶽も動揺するかと計り思

はれた。暫くにして目を失ひたる敵の將卒は、残らず目を開き、マリヤス姫其他の神軍に向つて跪つき、感謝の涙を瀧の如く流し乍ら歸順の意を表し遂には三五軍に従ひ、泰安城の言靈戰に従軍する事となつた。

マリヤス姫、日楯、月鉾は、偉大なる言靈の力を今更の如く喜び且つ驚き乍ら、俄に數千人の味方を得て、十曜の神旗を秋風に翻し、旗鼓堂々として泰安城に立向ふ事となつた。

二男五女の神將を先頭に、數千の歸順者を引き連れ、泰安城の間近く押寄するや、サアルボース、ホーロケースは複横陣を張つて、防戦に努めた。此時八千代姫は右翼のサアルボースの軍に向つて、大蛇の鏡を射照らし、照代姫はホーロケースの左翼軍に向つて、同じく大蛇の鏡を差向け射照らせば、又もや一人も残らず盲目となり、ホーロケース、サアルボース迄も、眼くらみて其場に平伏し、獨りも残らず歸順を表した。

されどマリヤス姫は兩軍の平伏する間を何も呉れず、直に表門に向ひ、城中に日楯、月鉾を従へ、深く進み入り、セールス姫其他の侍臣等に向つて、赤、白の

寶玉を差出し、之れを射照らせば、セールス姫は忽ち金毛九尾の悪狐と還元し、
其他の侍臣等は残らず、悪鬼、悪狐となつて、雲を起し、何處ともなく、中空に
煙の如く消えて了つた。

これよりマリヤス姫は城内に止まり、照代姫、八千代姫、ユリコ姫、テーリン
姫と共に玉藻の湖畔にて歸順したる兵士と共に、警固の任に當り、日楯、月鉾を
して淡溪の上流なる岩窟の牢獄に遣はし、カールス王を始め、ヤーチン姫、眞道
彦命を救ふべく出張を命じた。

日、月の兄弟は歸順せし兵士を四五百人計り引率れ、岩窟の牢獄指して進み入
り、數十の番卒を片つ端より玉の威徳に歸順せしめ、自ら牢獄内に入りて、先づ
第一にカールス王を救ひ出した。カールス王は髭蓬々と長く延び、色青ざめ、
身體骨立して、恰も死人の如く、見るも憐れな姿となつてゐた。日楯、月鉾は此
態を見て、同情の念に堪へ難く、吾父を先に幽閉したる憎きカールス王として、
今迄怨み居たりし心もどこへやら消え失せ、只同情の涙にくるのみであつた。
カールス王は眞道彦命の二人の子に救はれ、一層其慈愛深き兄弟の心に感じ、

固く二人の手を握つて涕泣感謝に時を遷した。カールス王は漸くにして、潔く口を開き、

カールス「汝は日楯、月鉾の兩人に非ざるか。汝が父の眞道彦命は壯健なりや」

と問ひかけた。二人は口を揃へて、

兩人「ハイ、吾父はあなたに幽閉されてより、未だ此牢獄に呻吟致し居る様子で御座います」

カールス「早く汝の父を救ひ出せよ」

二人は此言葉に此場を離れ、彼方此方と牢屋の外を巡り乍ら、

兩人「日楯、月鉾の兄弟、父の眞道彦命を救はむ爲に参り候。願はくは在處を知らせ玉へ……」

と呼ばはつた。此聲にヤーチン姫は間近の獄室より、細き手をさし出し乍ら、

ヤーチン姫「ヤアそなたは日、月の兄弟、能くマア救ひに来て下さつた。眞道彦

命様は此隣室におゐで遊ばします。どうぞ早く救ひ出して上げて下さい」

二人は父の在處の分りたると、ヤーチン姫の聲とを聞き、且喜び且驚き乍ら、

直に牢獄の錠を抜切り、ヤーチン姫を救ひ出し、次に父の牢獄の戸をねぢ開け、進み入つて見れば、悲しや、眞道彦命は瘦衰へ、呼吸さへも碌に通つて居ない様な瀕死の状態に陥つてゐた。二人は父の手足に取り付き、あたりを憚らず、嬉しさと悲しさに號泣するのであつた。此聲幽かに眞道彦命の耳に通じけむ、やつれ果てたる身を起して、力なげに目を見開き、眞道彦「ア、そなたは日楯、月鉾の兩人、能くマアどうして此處へ來られたか。

……ア、やつぱり、夢ではあるまいか」

と不思議相に兄弟の顔を見つめてゐる。兄弟は、

兩人「父上様、決して夢でも現でも御座いませぬ。……實は斯様々々の譯……」

と有りし次第を、こまごまと物語つた。眞道彦はこれを聞いて、俄に元氣づき、早天の草木が雨に會ひたる如く、顔の色さへ俄に冴えて來た。それよりカールス王、ヤーチン姫、眞道彦命は日楯保護の下に、泰安城に一先づ入城する事となり、數百の軍卒に送られて、此牢獄を立去つた。

月鉾はテールスタン、ホーレンスを始め、其他のカースル王に仕へ居たる重臣

共を、悉く牢獄より救ひ出し、泰安城指して歸り行く。

日楯はカールス王、ヤーチン姫、眞道彦命を守つて、漸く泰安城の馬場近くに
なつた。ホーロケース、サアルボースの軍勢は大蛇の鏡に照らされて目を失つた
まま、四つ這ひとなつて、蟻のたかつた様に馬場を這ひ廻つてゐる。カールス王
は此態を見て、不審に堪へず、

カールス「彼は何者なりや」

と日楯に尋ねた。日楯は直ちに、

「ハイ、彼はセールス姫の家來にして、ホーロケース、サアルボースの部下の軍
卒で御座います。向陽山の大蛇の鏡の威徳に照らされて盲目となり、進退谷まつ
て、あの通り盲目の儘、暗路に迷つてゐる亡者共で御座います。吾々は向陽山の
常楠仙人より賜はりたる赤色の玉を以て、折伏の劍に應用し、弟月鉾は白色の玉
を以て攝受の劍に應用し、數萬の敵を彼の如く、一人も残さず、神の威徳に降服
させ、セールス姫は金毛九尾の悪狐と正體を露はし、空中高く姿を消しました。

實に稀代の神寶で御座います。此神寶さへあらば、カールス王が泰安城にあつて、

世を治め玉ふは實に易々たる事業で御座います[□]

と玉、鏡の效用を略物語つた。王を始めヤーチン姫、眞道彦命は首を傾け、此話を感に打たれて聞いて居る。

茲に日楯は數萬の盲軍に向つて言靈歌を宣り與へた。其歌、

神が表に現はれて 善と惡とを立別る

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

誠一つの言靈の 珍の力は世を救ふ

神は吾等と俱にあり 人は神の子神の宮

神の心に叶ひなば 假令數萬の曲津神

鬨を作つて一散に 勢猛く攻め來とも

いかで恐れむ敷島の

神の恵は忽ちに

吾身の上うへに降りまし

直ただちに開ひらく胸むねの暗やみ

玉たまや鏡かがみは非あらずとも

心こころの玉たまを研みがきあげ

神かみの賜たまひし胸きょう中の

眞澄ますみの鏡かがみを照てらしなば

今いま見みる如ごとく曲まが神かみは

一人ひとりも残のこらず神しん力りきに

恐おそれて大地だいちに平伏へいふくし

神かみの御前みまへに歸順きじゆんして

産うぶの心こころに立歸たちかへり

心こころの盲めくらも忽たちまちに

開ひらけて肉にくの眼まなこさへ

月日つきひの如ごとく照てり渡わたる

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみの御稜威みいづを目まのあたり

カールス王わうやヤーチン姫ひめの

珍うづの命みことの御前おんまへに

只ただいま今あ明あかし奉たてまつる

あゝ諸人もろびとよ諸人もろびとよ

汝なれが心こころに潛ひそみたる

醜しこの曲靈まがひを追おひ出いだし

神かみより受うけし眞心まごころの

直日なほひの靈たまに立返たちかへり

國治立大神くにはるたちのおほかみの

守まもり玉たまひし三五あななひの

誠の道に従ひて 怪しき心を立て直せ

あゝ惟神々々 あが言靈の一息に

咫尺も辨ぜぬ盲目の 悩みは忽ち晴れ渡り

眞如の月は汝等が 心の海に輝かむ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 神の御前に二心

必ず起す事勿れ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と聲も涼しく歌ひ了るや、今迄大地に盲目となつて呻吟しゐたる數萬の軍勢は、
一齊に目を開き、四人の前に兩手を合せ、天津神の降臨かと感謝の涙に咽びつつ、
心の底より歸順するのであつた。

日楯は一同に向つて、三五の道の教を細々と説き諭し、各々一先づ家路に歸ら
しめ、カールス王其他と共に泰安城の奥殿に悠々として進み入るのであつた。

(大正一一・八・九 舊六・一七 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・八 王仁校正)

第一七章 誠の告白(八一七)

引き續いて月銚は牢獄の中より、マイルエース、テールスタン、其他一旦三五
教の聖地に於て幹部となり、再び叛旗を翻し、カールス王の爲に立働き、セール
ス姫の一派に捉へられて、カールス王と共に、岩窟の牢獄に投ぜられたる連中を
も救ひ出し、泰安城指して歸り來り、八咫の大廣間に於て、一同會見の式を擧げ
た。中央の正座にはカールス王、憔悴せる體軀を現はし、其傍にヤーチン姫、マ
リヤス姫相並び、次には眞道彦命、日楯、月銚、八千代姫、照代姫と云ふ順序に
列を正し、綺羅星の如くに集まつて、互に祝詞を述べ、終つて神籬を立て、大國
治立尊を始め、國魂神の祭典を嚴修し、次いで直會の宴に移り、互にかけ隔てな

く、上下相睦びて懷舊談に耽り、且つマリヤス姫以下の此度の戦功を賞揚し、且つ感謝し、一絃琴を弾じつつ、各立つて神を讃め祝歌を歌ひ舞ひ狂うた。カールス王は鶴の如く瘦たる體軀を動かさせ乍ら、自ら歌ひ自ら舞ふ。其歌、

遠き神代の其昔 國治立大神の

神言畏み遠津祖 花森彦大神は

神の神言を被りて 遠き波路を打渡り

高砂島の胞衣として 神の造りし此島に

現はれまして國人を いと平けく安らけく

治め玉ひし國の祖 アークス王の珍の子と

生れ出でたるカールスは 隙間の風にも當らずに

數多の侍女に侍かれ 成長したる酬いにて

世の有様は何事も 辨へ知らぬ悲しさに

己が使ひし醜司 テールスタンや其外の

心ねぢけし者共が
言葉を信じ三五の

誠一つの神司
眞道の彦の命をば

吾に刃向ふ仇人と
思ひ謬り岩窟の

牢獄の中に投げこみて
朝な夕なの憂苦勞

おはせし事の恥かしさ
かかる尊き神人を

苦めたりし其報い
忽ち吾に循り來て

時めき渡る泰安の
城は直ちに陥落し

セールス姫や其外の
醜の魔神に捉へられ

己が造りし牢獄に
情容赦も荒々しく

冷たき穴に投げこまれ
悲歎の涙に咽びつつ

瘦衰へて骨は立ち
日に日に弱る吾體

早玉の緒の生命迄
遂に切れむとする所

仁慈無限の三五の
神に仕ふる宣傳使

玉藻の湖の片畔
天嶺、泰嶺、兩聖地に

仕へ玉ひし日楯彦 月鉾彦の神人に

危ふき生命を助けられ やうやう元の吾城に

歸り來りし嬉しさよ 仁慈無限の大神の

建て玉ひたる三五の 誠の教を他所にして

體主靈從の教をば 此上なきものと迷信し

利己一片を立て通し 近侍の者に誤られ

國人達の怨恨を 知らずに買ひし愚かさよ

あゝ惟神々々 神の御靈の幸はひて

思ひもかけぬ今日の日の 再び此世に生れたる

驚天動地の慶びは 何時の世にかは忘るべき

日楯、月鉾兩人が 父の命を苦めて

惡の限りを盡したる カールス王をば憎まずに

助け玉ひし兄弟の 清き心は何時迄も

五六七の御代の末迄も 子々孫々に相傳へ

忘れざらまし此御恩 ヤーチン姫やマリヤス姫の

神の命の眞心を 心の鬼に責められて

今の今迄一筋に 疑ひ居たる愚かさよ。

心の底より戀ひ慕ふ ヤーチン姫よマリヤスよ

今迄汝に與へたる 無理難題と苦しみを

直日に見直し聞直し 吾罪咎を許せかし

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

われに従ひ曲業を 知らず知らずに盡したる

醜の司の百の罪 直日に見直し聞直し

許させ玉へ天津神 國津神達八百萬

國魂神の御前に 謹み敬ひ願ぎまつる

あゝ惟神々々 御靈幸はひましましてよ

と歌ひ終つて、中央の正座に着いた。

ヤーチン姫は立上り自ら歌ひ自ら舞ふ。

花森彦の其末裔 アークス王の弟と

生れ玉ひしエーリスの娘と生れしヤーチン姫は

アークス王に見出され カールス王の妻として

親の許せし許嫁 時の到るを待つ間に

サアルボースの生みませる セールス姫の曲神に

謀られ遂に發狂と 言葉巧に誣ひられて

見るも恐ろし淡溪の 深き谷間に投げ込まれ

生命危き折もあれ 情も深き三五の

眞道の彦に助けられ 息吹き返す其砌り

キールスタンやユリコ姫 後を慕つて追ひ來り

茲に四人はアークス王の 御山を越えて玉藻湖の

畔をよぎり三五の 神の聖地に參詣で

八尋やひろの殿とのに朝夕あさゆふに 仕つかへ居ゐたりし折柄をりからに

シヤールカルタンヤトロレンス 數多あまたの民軍みんぐん引率ひきつれて

泰安城たいあんじやうへ攻上せめのぼり 容易よういならざる形勢けいせいと

聞くより妾わらはは氣きをいらち 眞道まみちの彦ひこを押立おしたてて

神かみの軍いくさを引率いんそつし 泰安城たいあんじやうに立向たちむかひ

カールス王わうに疑うたがはれ 眞道まみちの彦ひこと諸共もろともに

牢獄ひとやの中うちに投込なげこまれ 苦くるしき月日つきひを送おくるうち

善ぜんと惡あくとを立分たてわける 誠まことの神かみの現あらはれし

今日けふの生日いくひの嬉うれしさよ 最も早はや生命いのちは無なきものと

覺悟かくご極きはめし此體このからだ 日頃ひごろ信しんずる三五あななひの

皇大神すめおほかみの惠めぐみにて 救すくはれたるかあら尊たぶと

尊たぶとき神かみの御道おんみちに 仕つかへ奉まつりて此前途このさきは

吾身わがみにつける一切いっさいの 執着しふちやくしん心を脱却だつきやくし

普あまねく世人よびとを善道ぜんだうに 導みちびき救すくひ大神おほかみの

深き恵の露だにも

報い奉らむあが心

日楯の彦よ月鉾よ

ユリコ姫や八千代姫

照代の姫の御前に

ヤイチン姫が心より

生命を救ひ玉ひたる

親にもまさる鴻恩を

謹み感謝し奉る。

あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

カールス王を始めとし

茲に竝みある人々に

神の恵の幸はひて

心の魂を逸早く

直日の魂に研きあげ

尊き神の神業に

盡させ玉へ惟神

國魂神の御前に

愼み願ひ奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ舞ひ終つて座に着いた。

眞道彦命は立あがり、自ら歌ひ自ら舞ふ。

神代の昔其昔 貴の都のエルサレム

神の司と現ませる 色香めでたき稚櫻姫

貴の命のはるばると 天降りましたる此島に

遠津御祖とあれませる 眞道の彦は畏くも

深く秘めたる寶玉を 姫の命に獻り

眞鐵の彦や奇八玉 其他の尊き神々も

各玉を取り出て 稚姫君の御神に

獻りたる由緒ある 珍の聖地の玉藻山

吾は祖先の名をつぎて 眞道の彦と名乗りつつ

神の教を四方の國 靑人草に宣り傳へ

祖先の業を朝夕に 仕へまつりし折柄に

泰安城にセールス姫の 神の命の現はれて

利己一邊の政 開かれしより泰安の

城に仕へし司等は 吾守りたる聖場へ

潮うしほの如ごとく押寄おしよせて

神かみの誠まことの大道おほみちに

只ただ一筋ひとすぢに仕つかへむと

殊勝しゆしょうの言葉ことばに感歎かんとんし

三五あななひけつ教をの幹部かんぶとし

教をを四方よもに開ひらく折をり

泰安城たいあんじやうに大變事だいへんじ

突發とつぱつせしと聞きくよりも

テールスタンを始めはじめとし

數多あまたの人々ひとびと三五あななひの

教をしへを傳つたふる吾身わがみをば

現世げんせい的てきの救主すくひぬしぞと

心こころの底そこより誤解ごかいして

泰安城たいあんじやうに向むかはしめ

忽たちまち吾われを振棄ふりすてて

利己りこい一邊つべんの魔心まこころに

又またもや捉とらはれカールスの王わうの命みことに取り入いりて

吾われを牢獄ひとやに陥おとしれ 百ももの惱なやみを與あたへたる

それそのの恨うらみを返かへさむと 無念むねんの齒はがみをなし乍ながら

夜よの目めもねずに泣なきゐたる 時ときしもあれや龍世たつよ姫ひめ

牢獄ひとやの中なかに現あらはれて 汝なんぢの誠まことは天地あめつちの

神かみの心こころに通かよひたり 今いまの苦難くなんは後のちの日ひの

大歡樂の礎ぞ

高砂島の全島を

助け導く救世主

神の柱となさむ爲

尊き神の經綸に

汝を牢獄に落す也

必ず心煩ふな

神は汝を守るべし

花咲く春を暫し待て

黑白も分ぬ暗の夜の

光ともなり鹽となり

色香かんばし花となり

誠の果實を結ぶまで

神は汝を試すなり

心を痛むる事勿れ

これぞ全く國治立の

嚴の尊の御心ぞ

喜び勇め眞道彦

神は汝の生みませる

日楯、月鉾兩人に

宏大無邊の神徳を

澤に授けて高砂の

島に蔽へる黒雲を

拂ひ清めて麗しき

神代の柱となさしめむ

必ず疑ふ事勿れ

神の言葉に二言はなしと

言葉終ると諸共に

其儘姿は消え玉ふ
あゝ惟神々々

思へば嬉しき今日の日も
尊き神の守ります

稜威の仕組の開け口
堅磐常磐に神國の

榮えを待つや高砂の
島に老たる一つ松

千歳の鶴の永久に
何時も巢籠る芽出度さは

やがて開くる五六七の世
龜の齡の萬世も

八百萬世も末永く
此神島に幸あれよ

花森彦大神の
御裔の神と現れませる

カールス王は三五の
尊き神の御教に

仕へ玉ひて泰安の
此聖場に末永く

鎮まりまして國人を
いと安らけく平けく

堅磐常磐に知し召せ
あゝ惟神々々

神の御前に眞道彦
眞心こめて願ぎ奉る

と歌ひ終り、吾座に復歸した。

(大正一一・八・九 舊六・一七 松村眞澄録)

第一八章 天下泰平(八一七)

マリヤス姫は立あがり、自ら歌ひ自ら舞ふ。

花森彦神の裔 アークス王の隠し子と

生れ出でたる吾身魂 父の命の内命を

奉じて侍女と身をやつし セールス姫に従ひて

サアルボースやホーロケース 其他の魔神の行動を

朝な夕なに偵察し 悪人共の計略を

一々胸にたたみつつ 時の来るを待つ間に

セールス姫のいちるゐ一類は ヤーチン姫をはいせき排斥し

カールス王のひ妃となりて 泰安城のしゆけん主權をば

吾手ににぎ握り暴政を 布かむとしたるをりから折柄に

妾はたまたま堪らずセールスの 姫のいっば一派をうちこ打懲らし

泰安城をぬ脱け出でて 眞道のひこ彦のあ現れませる

日月潭のせいぢやう聖場に 忍びてかみ神につか仕へつつ

朝な夕なにつきほこ月鉾の 雄々しきすがた姿を見るにつけ

忽ちなや惱む戀のやみ暗 折あること毎にい言ひよ寄りて

心のたけ丈をくど口説け共 信心けんこ堅固のつきほこ月鉾は

天地のだうり道理をたて楯にと取り 容易にわらは妾がこひぢ戀路をば

諾なひ玉はつきほこぬ月鉾の 情なきこころ心をうら恨みしが

神のみまへ御前にぬか額づきて 靜にしんい神意をつかが伺へば

アークス王がかく隠し妻 罪よりうま生れしわが吾身體

神にひと等しきつきほこ月鉾の 尊きつかさ司にけが汚れたる

吾身を以て妹と背の

契を迫るは何事ぞ

誤つたりと悔悟して

茲に愈斷念し

天地の神に其罪を

詫ぶれば心天忽ちに

眞如の月は輝きて

戀路の暗は晴れにけり

其れより妾は一心に

泰嶺聖地の神前に

心を盡し身を盡し

仕へまつりてありけるが

眞道彦の神司

岩窟上の牢獄に

縛められて千萬の

責苦に會はせ玉ふ事

聞くより心は焦り立ち

救ひ出さむと國魂の

神の御前に朝夕に

祈る折しも月鉾や

日楯の神やユリコ姫

照彦王に仕へたる

照代の姫や八千代姫

尊き五つの神寶を

持ちて聖地に歸りまし

朝な夕なに奉齋し

心を研く折柄に

セールス姫の類は

シヤールカルタンやトロレンス サアルボース、ホーロケースの

悪神共を驅り集め 泰安城を陥れ

暴威を振ひカールスの 王に仕へし司等を

岩窟上の牢獄に 一人も残らず投げ込みて

暴虐無道の限りを盡し 猶も進んで玉藻山

聖地を蹂躪せむものと セウルスチンを始めとし

サアルボースやホーロケースを將となし 攻め來る勢なかなかに

侮り難く見えにける 妾は少數の神軍を

率ゐて聖地を出發し 玉藻の湖邊に到る折

セウルスチンの率ゐたる 數多の軍と出會し

獅子奮迅の勢に 槍を揃へて攻め來る

猪武者に打向ひ 大蛇の鏡を取出し

敵を照らせば鏡面の 烈しき光に目も眩み

魂戦きて忽ちに 將棋倒しとなりける

神かみに受うけたる言こと靈たまを 妾わらわはすかさず宣のりつれば

今いま迄まで倒たふれし敵てき軍ぐんは 心こころの眼まなこは云いふも更さら

肉にくの目めさへも忽たちちに 元もとの如ごとくに開ひらかれて

漸やうく悟さとる三あ五なの 尊たふとき神かみの御おん惠めぐみ

心こころの底そこより正しやう覺かくし 歸き順じゆんなしたる嬉うれしさよ。

妾わらわはそれよりアリスの 峰みねを乗のり越こえ泰たい安あんの

城しろの馬ばん場ばに攻せめ寄よせて 群むらがる數すう萬まんの軍ぐん勢せいに

向むかつて注そそぐ照てる代よ姫ひめ 八や千ち代よの姫ひめの寶ほう鏡きやうの

光ひかりに敵てきは辟へき易えきし 眼まなこ眩くらみて打うち倒たふれ

苦くるみ藻も搔がく其その中なかを 城じやう内ない深ふかく進すすみ入いり

セールス姫ひめに打うち向むかひ 大を蛇ろちの玉たまを射い照てらせば

惡あく狐この姿すがたと還くわん元げんし 數あまた多たの侍じしん臣しんと諸もろ共ともに

怪あやしき正しやう體たい現あらはしつ 雲くもを霞かすみと消きえ失うせぬ

妾わらわは茲こゝに息いき休やすめ 照てる代よの姫ひめや八や千ち代よ姫ひめ

テーリン姫ひめやユリコ姫ひめ

其他そのたの尊たふとき神人かみびとと

泰安城たいあんじやうを守りつつ

カールス王わうや眞道彦まみちひこ

ヤーチン姫ひめを始めとし

マールエースやホーレンス

テールスタンや其外そのほかの

囚とらはれ人を救すくはむと

日ひ、月つき二人ふたりの兄弟きやうだいを

岩窟上がんくつじやうの牢獄ろうごくに

差遣さしつかはせば兩人りやうにんは

芽出度めでたく使命しめいを相果あひはたし

凱歌がいがを擧あげて堂々だうだうと

歸かへり來きませる勇いさましさ

あゝ惟かむながら神々々かむながら

御靈みたま幸さちはひましまして

カールス王わうを始めとし

誠まことの道みちを誤あやまりし

此場このばに控ひかゆる諸人もろびとに

神かみの惠めぐみの幸さち深く

天てんより受けし魂たましひの

曇くもりを晴はらして元もとの如ごと

嚴いづの御靈みたまや瑞御靈みづみたま

直日なほひの靈たまに立直たてなほし

救すくはせ玉たまへ天津神あまつかみ

國津御神くにつみかみの御前おんまへに

謹つつしみ敬つやまひ願ねぎまつる

あゝ惟かむながら神々々かむながら

御靈幸はひましませよ』

と歌ひ了つて元の座に着いた。
照代姫は立上り、自ら歌ひ、自ら舞ふ。

神の都のエルサレム

國治立大神の

御前に仕へし眞鐵彦

神の御裔と生れたる

暗き此世も照代姫

サワラの峰の山麓に

父照若と諸共に

神の教を守り居る

時しもあれや三五の

神の司の照彦が

照子の姫と諸共に

四邊まばゆき神徳を

照らして茲に降りまし

南の島の人々を

神の光と御恵みに

服従へ和し善政を

施し玉へば草も木も

恵の風に靡きつつ

世は泰平に治まりぬ

父の照若喜びて

照彦王の御前に

進み出でまし八千代姫

照代の姫の姉妹を

命の前に奉り

御側近く侍らせて

誠を示し玉ひけり。

折しもあれや三五の

神の御靈を祀りたる

玉藻の山の聖地より

日楯、月鉾兄弟は

ユリコの姫を伴ひて

照彦王や照子姫

珍の御前に現はれて

神の祕密を語り合ふ

素より三人は口無しの

心と心に語りつつ

照彦王の計らひに

大谷川を打ち渡り

向陽山の岩窟に

心も堅き常楠の

白髪異様の仙人に

五つの寶授かりつ

エルの港を船出して

波を渡りてキル港

人目を忍び山の尾を

傳ひてやうやう玉藻山

神の集まる聖場へ
二男三女は潔く

到着したる嬉しさよ。
間もなく聞ゆる泰安の

都の空の大騒ぎ
セールス姫の一族が

カールス王を幽閉し
尚も暴威を揮ひつつ

三五教の聖場を
蹂躪せむと襲ひ來る

高き噂を聞くよりも
マリヤス姫を將となし

日楯、月鉾兩人を
副將軍と相定め

テーリン姫やユリコ姫
八千代の姫と諸共に

僅に残りし信徒を
率ゐて玉藻の湖畔迄

進み來れる折もあれ
セウルスチンの一隊と

茲にいよいよ衝突し
大蛇の鏡を射照らせば

神威に恐れて目も眩み
マリヤス姫の言靈に

歸順の意をば表しける
セウルスチンの一軍を

茲に改め味方とし
泰安城に立向ひ

空前絶後の勝利をば 得たるは全く皇神の

深き守りと知られけり。 あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 泰安城は未永く

カールス王やヤーチン姫の 神の司は睦じく

妹背の契を結びまし 眞道の彦の御教を

朝な夕なに奉戴し 五六七の神代の仁政を

臺灣島に隈もなく 施し玉へ惟神

神の御前に願ぎまつる。 八千代の姫や照代姫

サワラの城の國王より 日楯、月鉾兩人に

従ひまつりて玉藻山 聖地に仕へまつれよと

言ひ渡されし上からは 假令如何なる事あるも

再び國へは歸らまじ カールス王よヤーチンの

姫命よ眞道彦 其他の尊き神人よ

妾等二人の姉妹が 身靈を恵み玉ひつつ

神の使命を永久に 立てさせ玉へよ臺灣の
島に時めく神人の 御前に祈り奉る
あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ』

と歌ひ終つて、元の座に着いた。

茲にカールス王は眞道彦命に向ひ、従前の過ちと無禮を謝し、且つ、

『吾はこれより三五教の神司となり、罪亡ぼしのため宣傳使となつて天が下四方

の國を遍歴したければ、貴下は尊き眞道彦命の神裔なるを幸ひ、貴下が御子なる

日楯、月鉾を左右の臣となし、泰安城に永く留まりて、政教兩面の主權を握り、

國家を平安に治し召せよ』

と宣示したるを、眞道彦命は大に驚き、

『カールス王様、折角の御言葉なれ共、吾々は國治立尊の御退隱以前より、吾祖

先は専ら神政に仕へ、現界の政治に容喙せざるを以て天職となし來りたるものな

れば、如何なる事情あり共、吾は政教兩面の主權者となり、王者の位地に進むべ

き者に非ず。何卒此事許りは御取消を願ひ奉ります。貴王は花森彦命の御裔、必ず此島國を治め給ふべき、祖先よりの使命おはしませば、一刻も早く元の王位に就き、ヤーチン姫を正妃として天下に君臨し玉へ。及ばず乍ら、眞道彦命父子の者君が政事を蔭より麻柱奉り、天下泰平に世を治め玉ふべく守護し奉らむ。就ては王に進言したき事あり。信心堅固にして、仁慈と剛直とを兼ね備へたるマールエースを以て宰相となし、ホールサーズをして副宰相となし、數多の罪人を赦し、シャーカルタンやトロレンスをも重く用ゐ玉へば、天下は益々太平ならむ。これ眞道彦が赤誠を籠めて、國家の爲に進言する所以であります」

と毫も政治的野心なき事を告白した。カールス王は眞道彦命の清廉潔白なる精神に感じ入り、眞道彦命を導師と仰ぎ、自ら三五教の信者となり、全島に範を示し、天下は永久に三五教掩護の下に、枝もならさぬ高砂の芽出度き神國と治まることとなつた。さうしてヤーチン姫に對する王の疑は全く晴れ、茲に姫を容れて正妃となし、マリヤス姫を侍女の頭と定め、テールスタン、ホールレンス其他の人々をも悔い改めしめ、元の如く重用して、世は永久に治まり、萬民鼓腹擊壤の樂みに

酔うた。

茲にカールス王は琉球のサワラの都へ、マールエース、ホールサーズを遣はし、いろいろの珍らしき貢物を齎せ、照彦王の前に感謝歸順の意を表することとなつた。

照彦王はカールス王の誠意に感じ、マールエース、ホールサーズと共に始めて臺灣島に渡り、泰安城に迎へられ、暫く此處に留まり、山野河海の響應を受け、且つ眞道彦命の鎮まり居ます玉藻山の聖場に参拜し、茲に固く手を握り、琉球、臺灣相提携して、神業に奉仕する事となつた。

眞道彦、照彦王の媒介に依りて、マールエースは八千代姫を娶り、ホールサーズは照代姫を娶り、夫婦相睦びて泰安城に仕へ、其子孫は永く繁榮した。

末に至りてカールス王とヤーチン姫の間に八千彦、八千姫の一男一女が生れた。又照彦王と照子姫の間に、照國彦、照國姫の一男一女が生れた。眞道彦命の媒酌に依つて、照彦王の長子照國彦に八千姫を娶はせ、又カールス王の長子八千彦に照彦王の娘照國姫を娶はせ、茲に改めて親族關係を結ぶ事となつた。

マリヤス姫ひめはアークス王わうの弟おとうとエーリスの長子ちやうしフェールスの妻つまとなり、泰安城たいあんじやうの花はなと謳うたはれて、上下しやうかの信望しんぼうを擔になひ、ヤーチン姫ひめの政事せいじを輔たすけて子孫しそん永ながく繁榮はんえいし、今迄いままで混亂こんらんに混亂こんらんを重ねかさたる臺灣島たいわんたうも全まく天國淨土てんごくじやうどと化くわするに至いたつたのは、フェールス、マリヤス姫ひめの力大ちかおほいに與あつつて功こうありと言いふべしである。あゝ惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐世ませ。

(大正一・八・一〇 舊六・一八 松村眞澄録)

第四篇 南米探險なんべいたんけん

第一九章 高島丸たかしままる〔八一九〕

あななひけう 三五教の神司 變性男子の系統と

ひのかみ 日の出神の生宮を 唯一の武器とふりかざし

がいのた 我意を立て貫く高姫は 神素盞鳴大神の

こうへいむし 公平無私の御心に 感謝の涙流しつづ

けう ウラナイ教を解散し 股肱と頼む黒姫や

たかやまひこ 高山彦や魔我彦を 伴ひ聖地に立歸り

あななひけう 三五教に歸順して 金剛不壞の如意寶珠

むらさきいろ 紫色の寶玉の 其監督を命ぜられ

はなたかだか 鼻高々と諸人を 眼下に見おろす慢心の

こころ 心の鬼に遮られ 再び魔道へ逆轉し

しふちやくしん 執着心を再發し 玉の在處を探らむと

にしひがし 西や東や北南 萬里の波濤を乗越えて

ちから 力を盡す玉探し 聖地を見捨て遠近と

さまよ 彷徨ふ中に龍宮の 天火水地と結びたる

麻邇の寶珠は梅子姫

蜈蚣の姫や黄龍姫

テールス姫や友彦の

五つの身魂に神業を

占領されて氣を苛ち

聖地に歸りていろいと

怒りをもらし駄々を捏ね

麻邇の寶珠の監督を

おためごかしに命ぜられ

八尋の殿に現はれて

高山彦や黒姫と

衆人環視の壇上に

玉檢めを始めける

此時五つの麻邇の玉

紫玉を除く外

残りの四つはあら不思議

珍の寶と思ひきや

見る價値もなき團子石

何處の誰が何時の間に

摺變へたるかと高姫は

口を尖らし目をみはり

呆れ居る折言依別の

珍の命が寶玉を

抱いて聖地を遁走し

國依別と諸共に

高砂島に渡りしと

聞くより高姫氣をいらち

又もや聖地を立出でて

乗るか反るかの瀬戸の波
常彦、春彦諸共に

棚無し舟に身を任せ
艦擢を操り荒波を

乗切り乗切り和田中に
青く泛べる琉の島

那覇の港に安着し
常楠翁の住處なる

槻の大木の洞穴に
現はれ來り言依別の

神の命は琉球の
玉を手に入れ逸早く

高砂島に渡りしと
聞くより心もいら立ちて

再び舟に身を任せ
山なす波を乗り切りて

大和田中に浮びたる
高砂島に渡らむと

進み行くこそ健氣なれ。

高姫は常彦、春彦に舟を操らせ、夜を日に繼いで、漸くにしてテルの國の山々
仄に霞の如く目に入る地點まで漕ぎ着けた。舟は忽ち暗礁に乘上げ、メキメキと
粉碎して了つた。此頃の海面は鹽分最も多く、波なき時は海上と雖も、直立して

歩むに僅かにこぶらを没する位で、水の抵抗力強く、一里二里位は容易に徒歩に渡る事を得たのである。併し乍ら、暴風吹き来り、波立つ時は忽ち波に包まれ、生命を失ふ危険があつた。

高姫一行は船を破り、已むを得ず、尻をからげて霞の如く現はれたるテルの國を目當てに海上を徒渉し始めた。俄に風が吹いて来た。そろそろ波は荒れ出した。酷熱の太陽は焼きつく如く照り出した。流石大膽不敵の高姫も、到底此儘にては、高砂島に渡ることは出来ない、心中不安の念に驅られ、聲を限りに天津祝詞を奏上し天の數歌を唱へ、

高姫「國治立大神様、神素盞鳴大神様、玉照彦様、玉照姫様、言依別神様、時置師神様、國依別様、どうぞ、此危難をお助け下さいませ。高姫も只今限り我を折りまして、あなた方の教通り堅く守ります」

と今迄反對側に立つた役員の名まで呼び出して祈願する、其心根餘程往生したと見える。常彦、春彦は高姫の此祈りを聞いて、俄に心細くなり、泣き聲となつて、

「惟神靈幸倍坐世」

と蚊かの鳴なく様やうに唱となへて居ゐる。

折柄をりから波なみを蹴け立てて進すすみ來くる高島丸たかしままるは、三人さんにんの波上はじやうに漂ただよひ困難こんなんの態ていを見て、直ただちに船ふねを近寄ちかよせ、これを救すくひ上げた。高島丸たかしままるには筑紫つくしの國くに、龍宮りゆうぐうの一つ島ひとしまなどより常とこ世よの國くにに渡わたらむとする者もの、殆どほとん二百人にひやくにん許ばかり乗込のりこんで居ゐた。船長せんちやうはタルチールと云いふ骨格こくかく秀すくれた大だいの男をとこであつた。

三人さんにんは船長室せんちやうしつに招まねかれて、いろいろと取調とりしらべを受うけた。

船長せんちやう「お前まへは何國どこの方かたで、何なんと云いふお名前なまへで、何國どこへ何用なによあつてお出いでになるのか、船中せんちゆうの規則きそくとして調しらべておかねばなりません。ハツキリと茲ここで、國くに、所ところ、姓せい名めい、用向ようむきの次第しだいを仰おつしやつて下ください」

高姫たかひめ「ハイ私は自轉倒島おのころじまの中心地ちうしんち、錦にしきの宮みやの八尋殿やひろどのに三五教あななひけうの宣傳使せんでんしの頭かしらとして奉仕ほうしする變性男子へんじやうなんしの系統ひつぽう、日ひの出神でのかみの生宮いきみやと世界せかいに有名いうめいな高姫たかひめで御座ございます。人じん民みんの分際ぶんざいとして、神かみの生宮いきみやがどこへ行ゆかうと、行ゆかうまいと、別べつに取調とりしらべる必要ひつえうはありますまい。神かみの事ことは何程なにほど賢かしこい人間にんげんでも、到底たうてい見當けんたうの取とれぬものですよ」

船長せんちやう「神様かみさまは神様かみさまとして、吾々われわれは人間にんげんとしての高姫たかひめを監督かんとくする必要ひつえうがあるから、

其用向を尋ねて置くのだ。キツパリ言つて貰はねば此船に乗つて貰ふことは出来ませぬ。

高姫「それだから人間は困ると云ふのだ。蕪から菜種迄教へて上げねばならぬの

かなア。日の出神の生宮が行く所ならば、大抵分りさうなものだのに……エー

仕方がない、秘密を守つて下さるなら申しませう。實の所は三五教の教主言依別

命が、國依別のガンガラ者と大切な玉を盗み、高砂島へ逃げて行きよつた。それ

故、三千世界の御寶、あの様なドハイカラやガンガラ者に持たせておいては、世

が亂れる許り、いつまでも五六七の世は出て來は致さぬから、三千世界の人民を

助ける大慈大悲の日の出神の生宮が、其玉を取返さむと、神變不思議の術を使ひ、

自轉倒島よりはるばると、舟にも乗らず、二人の家來を引き連れ、波の上を渡つ

て來た生神の高姫で御座る。お前も此高姫の因縁性來が、言つて貰はねば分らぬ

ような事で、如何して船長が勤まりますか。これから此生宮の云ふ事を聞いて、

宏大なる神徳を頂きなさい。際限もなき萬里の波濤を乗越える船頭としては、チ

ツと神力がないと、大勢の人間の生命を預つて海を渡ると云ふ事は中々荷が重た

い。何程人間が力がありたとて、智慧がありたとて、神力には叶はぬから、早く
我を折つて改心なさるが宜しいぞや」

船長口を尖らし、

「コリヤ高姫とやら、吾々を罪人扱に致し、改心せよとはチツと無禮ではないか。
改心と云ふ言葉は、悪人や罪人に對して、審判司の申すべき言葉であるぞよ。汝
如きに改心呼ばはりをされる様な汚れたタルチールでは御座らぬぞ。餘りな無禮
を申すと、了見致さぬ」

と稍怒氣を含み、顔色を變へて大聲に呶鳴り立てた。

高姫「コレ船頭、お前は高姫の言葉がお氣に入りませぬか、腹が立ちますか、神
様の御戒めに、怒る勿れと云ふ事が御座いますぞや。怒ると云ふ事は最も神界よ
り見れば重き罪で御座いますぞ。お前は現に今、怒つた顔をして尖つた聲を出し、
神界の罪を犯した罪人です。それ故改心をなされと高姫が云つたのだよ。ヘン…
…コレでも返答が出来るならして見なさい。そんな高い聲をしておどしたつて、
いつかな いつかな、ビクつく様な日の出神の生宮とは違ひますぞえ。ヘン…」

と鼻を手の甲でこすり上げ乍ら嘲笑ふ。

船長「コリヤ コリヤ其方は此高姫の同行者であらうなア」

兩人「ハイ仰せの通りで御座います。何を云つても、高姫さまは、逆上して居りますから、どうぞお氣に障へないでみて下さいませ。吾々兩人は側に聞いて居ても、ハラハラ致します。否腹が立つて來ます。況してやあなた様のお腹立は御尤もと存じます」

船長「あゝさうだらう。何でも一通りではないと思つた。餘程變つてゐさうだな

ア」

高姫「ヘン、そりや何を仰有るのだ。變つて居らいで何とせう。日の出神の生宮とガラクタ人間と一緒にしられてたまるものか。凡夫の目から神様を見れば、そりやモウ變つた様に見えるのは當前だ。一通でないなんて、能うマアそんな馬鹿な事が云へたものだ。一通や二通所か、神の階級は百八十一通ある。そして其一番上の大神こそ天御中主大神、又の御名は大國治立尊と云つて、始無く終なく、無限絶對獨一の誠の獨り神様だ。其次には國治立尊、其次には日の出神、それが

ら段々と枝の神があり、人民は神の次だ。百八十通りも隔てがあるのだよ。さうだからテンデお前達は、此日の出神の申すことが分らぬのだ。人民は人民らしくおとなしく致して神に口答へを致すでないぞや。コレ船長殿、此生宮の申すこと、チツとは御合點が参りましたかなア」

船長「常彦、春彦の兩人、お前さまは此女を如何考へてゐますか。随分エライのぼせ方だ。まだ高砂島へは三日や五日では到着するのは六つかしい。海へでも飛び込まれては大變だから、一つ手足をしばり、頭から水でもかけておくか、頭のてつぺんに穴でもあけて、逆さまに吊り下げ、少し血でも抜いてやらねば、此病氣は本復致すまい。お前達二人は此船に乗つた以上は、何事も船長の命令をきかねばならないのだから、お前の手で此高姫を縛り上げ、船底へ伴れて往つて呉れ。吾々もついて往つて血を出して逆上を引下げてやるから……」

常彦、春彦は驚いて、

兩人「モシモシ船長様、此高姫には吾々兩人が附添ひ、決して御迷惑になる様な事は致させませぬから、頭を割つて血を出したり、縛り上げる事丈は何卒許して

くだ
下さいませ」

せんちやう
船長「……………」

たかひめ
高姫「パツと怒り、

めくら
「盲の垣覗き、猫に小判とはお前のことだ。此生宮は金鐵も同様、指一本觸へる

ことは出来ませぬぞ。勿體ない、日の出神様の生宮を、假令蚤の口程でも傷つけ

てみよれ。神の御立腹は忽ち、此船は瞬く間に岩に打つかり沈没致し、日の出神

に敵對うた者は海の底へ突落され、眞心になつて頼んだ人民は、天から抓み上げ

て、善惡の立別けをハツキリ致して見せるぞや」

せんちやう
船長「ヤア此奴は如何しても駄目だ。……常彦、春彦、お前は今迄先生と仰いで

來たのだから、何程船長の命令でも、高姫を縛る譯には行くまい、師弟の情とし

て無理もない。これから此タルチールが直接に荒料理をしてやるから、お前達兩

人は、下の船室に控へて居れ」

たかひめ
高姫「コレコレ常、春、日の出神の生宮を、チツとの間も、目放し致すことはな

らぬぞや。此肉體は、尊き神のお役に立てねばならぬ系統の生宮だ。船長に付く

か、日の出神に從くか。サア二つに一つの返答を承りませう」

船長は「エー面倒」と強力に任せ、高姫を後手に縛り、兩足を括り、太繩を帆

柱にかけ、キリキリと絞り出した。高姫は足を空に頭を下にした儘、チクチク帆

柱目がけて吊り上げられた。常、春の兩人は地團駄ふんで、ワイワイと泣き叫ぶ。

此船に折よくも乗つてみた言依別、國依別の宣傳使は慌て此場に走り來り、船

長に何事か目配せした。船長は驚いた様な顔して、慇懃に腰を屈め、直に高姫を

吊りおろした。常彦、春彦の兩人は、餘りの事に肝を潰し、此場に言依別、國依

別の現はれ來りし事に氣がつかなくつた。高姫も亦苦しさに兩人の現はれて吾れ

を助けて呉れたる事をチツとも知らなくつた。

船長のタルチールは、言依別命、國依別の時々の説教を聞き、スツカリと三五

教の信者となり、言依別の高弟となつて、既に宣傳使の職名を與へられてゐた。

それ故タルチールは言依別命を高砂島へ送り届けると共に、自分は宣傳使となつ

て、高砂島や常世の國を宣傳すべく決心してゐたのである。さうして高姫の事も

略、國依別より聞かされてゐた。

言依別、國依別は手早く船長の寢室の間に姿を隠した。船長も亦言依別命に従ひ、おのが寢室に這入つて、三人鼎座し、高姫話に時を遷した。

(大正一一・八・一〇 舊六・一八 松村眞澄録)

第二〇章 鉦理屈(八二〇)

常彦、春彦は驚いて、高姫の縛を解き、抱起し、

常彦「先生、どうも御座いませなんだが、大變な危ないこつて御座いました。モウどうぞこれから船の中は、云ひたい事があつても仰有らずに辛抱して居て下さ

いませ。兩人が御願致します」

高姫「お前達はそれだから腰抜といふのだよ。三千世界を團子にせうと餅にせう

と、三角にせうと、四角にせうと、自由自在に遊ばす國治立尊の片腕とお成り遊ばす日の出神様の生宮、たかの知れた高島丸の船頭位に尾を巻いてなるものか、

へん 餘り見損ひをして下さるなや。お前等は丁度猫に小判を見せた様なものだ。
小判よりモダイヤモンドよりも立派な光の強い、日の出神の此生宮を何と心得て
御座る。チツと確りなさらぬか。神様が吾々を御守護をして御座る以上は、假令
船頭の百人や千人、束になつて來た所で、指一本さへさす様な高姫ぢやありませ
ぬぞえ」

春彦「それでも貴女、タルチールさまに後手に縛られ、帆柱へ逆さまにして吊り
上げられたぢやありませぬか」

高姫「何とマア、身魂の曇つた者は、御神徳の頂きようが拙劣だから困りますワ
イ。日の出神の生宮が一寸高砂島の様子を見やうと思ひ、タルチールを御用に立
てて、帆柱の上まで手も使はず、足も勞せず、エレベータ式に上げさしたのだよ。
何でも人は神直日大直日に見直し聞直し、善意に解釋しなくてはなりませんぞや。
それが日の出神さまの水も洩らさぬ結構なお仕組、それだから何時も身魂を研ぎ
改心をなされと、耳が蛸になる程云うて居るのだよ。タルチールの奴たうとう、
日の出神の御光に恐れて、どつかへ鼠の様に隠れて了つた」

常彦「私は餘り感心して目も碌に見えず、ハツキリした事は分りませぬが、何で
も立派なお方が二人現はれて、船頭さまに何か言ひつけられたと思へば、船頭は
勿惶として綱をゆるめ、あなたを吊りおろして、どつかへ隠れましたよ」
高姫「サアさうだから、高姫は神の生宮と云ふのだ。船頭の奴、帆柱の上へ吊り
あげて見た所、餘り日の出神の御光がきつうて、目が眩みさうになり、お客まで
が目舞が來さうなので代表者が二人やつて來て、船頭に掛合ひ、其爲に止むを得
ずおろしよつたのだ。そこが所謂神の御神力、御都合ある所だ。こんな水も洩ら
さぬ仕組が、お前達に分つて堪るものかい」
常彦「オイ春彦、何とマア剛情な先生だないか。今日と云ふ今日は俺も本當に呆
れて了つたよ。こんな人の弟子だと思はれたら、それこそ無事に高砂島へ着く事
は出來やしないぞ。大陸へ上つてからなら、はしやぎなりと、法螺吹くなりと、
如何なつと、高姫さまの勝手になさつてもよいが、こんな所で分りきつた負けを
を出し、へらず口を叩き、船長に憎まれたら大變だぞ。コリや茲で一つ高姫様に
お願申して、師弟の縁を切つて貰ひ、アカの他人となつて了はうぢやないか。心

の底そこから切きつて頂いただかうと云いふのぢやない。此この船ふねの上うへだけ、表へう面的めんてきに切きつて貰もらひたいのぢや」

春彦はるひこ「それは至極しごく妙案めうあんだ。直様すぐさま高姫たかひめ様さまにお願ねがひ致いたさうぢやないか」

常彦つねひこ「春彦はるひこと私わたしとの御願おねがひで御座ございます。暫しばらくあなたと師弟していの關係くわんけいを絶たつて下くださいませぬか。それも表面へうめん丈だけで、高砂島たかさこじまへ無事ぶじに着ついたならば、又また元の通とほりに使つかつて下ください。さうせないと險吞けんのんで堪たまりませぬから……」

高姫たかひめ「帳ちやうを切きつてくれと云いふのかい。お前まへの方ほうから言いはいても、高姫たかひめの方ほうからお前まへの様なガラクタの弱蟲よわむしは、足手纏あしでまとひになつて困こまつて居をつたのだ。一時いっときも早はやくうるさいから、縁えんを切きらうと思おもうたけれど、此この高姫たかひめに見放みはなされたが最後さいご、乞食こじき一つよう致いたさぬ、奴甲斐性どかひしやうなしだから、可哀相かはいさうと思おもつて今いままで助たすけて來きたのだ。お前まへの方ほうから暇ひまくれと云いふのなら、こつちは得手えてに帆ほだ。萬劫末代帳まんごふまつだいちやうを切きるから、二度どと再び高姫たかひめの目めに障さはる所に居をつて下くださるな。ガラクダ野郎奴やらうめ、あゝ盲萬人目めくらまんにんめ明あき一人ひとりとはよくも言いうたものだ。高姫たかひめの眞まことの力ちからを知しつて呉くれる者ものは此この廣ひろい世界せかいに日ひの出神様でのかみさまばかりだ。人民じんみんを相手あひてにする位くらゐうるさいものはないワイ。サア常つね、

春の兩人、早くどつかへ行きなさらぬか。名残惜さうに、男らしうもない、何マゴマゴして居るのだ、エ、
と頬をプツと膨らし、體を角に振つて甲板の上を二つ三つ強く踏みならし、二三遍くるりと廻つて見せた。

常彦「モシモシ高姫様、さう怒つて貰つては堪りませぬ。ホンの二三日の間、表むき丈お暇を下されとお願して居るので御座います……なア春彦、お前もさうだろ」

春彦「さうだとも、高姫さまに見すてられて、俺達は如何なるものか。どうぞ高姫様さう短氣を出さずに、吾々の申す事を善意に解釋して下さいませ」

高姫「假令一日でも縁を切つたが最後、アカの他人ぢや。三日や五日の間縁切るのは邪魔臭い。萬劫末代序に五六七の世の末迄縁を切りますぞや。お前の様な蛆蟲がたかつて居ると、そこら中がムザムザして氣分が悪い。あゝこれで病晴れがしたやうだ。縁切つた以上は、師匠でも弟子でもない。どうぞ早う、どっこへなりと姿を隠して下さい。見ても厭らしい、胸が悪うなる」

常彦つねひこ「高姫様たかひめさま、一時も早はやう、姿を隠かくせとか、厭いやらしいとか、胸むねが悪わるいとか、丸まるで座敷ざしきへ青大將あをだいしやうが這はうて來た様な事ことを仰おつしや有あいますなア」
高姫たかひめ「きまつた事ことだよ、お前は本當ほんたうの阿呆大將あほうだいしやうだ。グツグツしてをると、線香せんかうを立ててくすべますぞ。あゝ面倒臭めんどうくさい、一昨日おととひこ來い一昨日おととひこ來いと云いひ乍ながら、齒はのぬけた口くちから、ブツブツと、唾つばきを矢やたらに、兩人りやうにんに向むかつて吹ふきかける。

春彦はるひこ「蜘蛛くもか何なんぞの様に一昨日おととひこ來いとは、そりや餘あんまりぢやありませんか」

高姫たかひめ「お前は蜘蛛くもだよ。一寸先いっすんさきの見みえぬ暗雲やみくもの雲助くもすけだ。今迄いままで高姫たかひめのおかげで、結構こうな神様かみさまの御用ごようをして威張あつて來たが、今日けふ限り高姫たかひめから縁えんを切きられたが最後さいご、雲助くもすけにでもならねば仕方しかたがないぢやないか。何程なにほど平た蜘蛛くもになつて謝あやまつても、苦くも悶もんしても駄目だめですよ。オツホ、

常彦つねひこは稍やや顔色かほいろを赤あからめ、

常彦つねひこ「高姫たかひめさま、吾々われわれは決して貴女あなたの弟子でしではありませんよ。言こと依より別命わけのみことの教主けつしゆから立派りっぱな宣傳使せんてんしを命めいぜられて居ゐる者もの、言いはばあなたと同格どうかくだ。併しかし乍ながら長幼ちやうえうの序じよ

を守り、先輩の貴女を師匠と、義務上から尊敬して居る丈の者、弟子扱をしてお
き乍ら、帳を切るも切らぬも有るものか。グツグツ仰有ると、私の方から絶交致
しますよ……なア春彦、お前もさうぢやないか」

春彦「さう聞けばさうだ。モシ高姫さま、誠にお氣の毒乍ら、只今限り貴女と萬
劫未代、五六七の世の末迄縁をきりますから、否絶交しますから、厭らしい……
阿呆臭いから早く何處かへ姿を隠して下さい。澁たうして御座ると線香を立てま
すぞ。アハ、ハ、ハ、」

高姫「それもよからう。併し乍ら、高姫との交際は絶つても、日の出神様に離れ
る事は出来ずまい」

常彦「尤も、日の出神様には絶対服従ですから、誰が何と云つても離れは致しま
せぬ。春彦、お前もさうだらうなア」

春彦「勿論の事だ」

高姫「それ御覽、ヤツパリさうすると、日の出神の生宮の高姫には絶対服従をせ
なくてはなりませんまい」

甘い事づくめにたらされて 結構な結構な自轉倒島の

秀妻の國の中心地 錦の宮を後にして

遠き山坂打渡り 命を的に海原の

荒波わけて琉球の 島に漸く上陸し

言依別や國依別の 神の命の後を追ひ

執念深くも麻邇の玉 高姫さまの手に入れて

人も羨む神業に 奉仕せむとて兩人が

欲の皮をば引ぱり乍ら 可愛い女房をふりすてて

ここまで来たのが馬鹿らしい 琉球の島へ来て見れば

言依別の神さまは 琉と球との寶玉を

すでに受取り國依別と 小舟に乗つて高砂の

島に行かれた後だつた 高姫さまは氣をいらち

夜叉の如くに相恰を 變へて又もや船に乗り

フリーリン島や臺灣島 後に眺めて漸う漸うに

テルの連峰霞みつ 目に入る迄に近寄りし

時しもあれや生命の 綱とも頼む吾船は

波間に潜む暗礁に 衝突なして粉碎し

何と詮方波の上 辛くも進む折柄に

俄に吹き来る荒風に 波立さわぎ三人の

生命最早これ迄と 慌てふためく時もあれ

神の恵の幸はひて 高島丸は走せ来り

吾等三人を救ひあげ 船長室に招かれて

國や所や姓名を 一々詳しく尋ねられ

日の出神の生宮と 高姫さまの法螺貝に

船長殿も舌を巻き 押し問答の末遂に

高姫さまを發狂と 見なして手足を縛りあげ

身を逆しまに帆柱に クルリクルリと巻あげる

吾々二人は肝潰し 驚き倒れて居る内に

何處どこの人ひとかは知らね共ども

尊たふとき二人ふたりの影かげ見えて

タルチールの船長せんちやうに

何かなにヒソビソ囁ささやけば

タルチールは匆惶さつくわうと

畏かしこまりつつ高姫たかひめを

即座そくざにここに巻まきおろし

一閒ひとまの内うちに隠かくれ行く

吾等われら二人ふたりは高姫たかひめの

厳きびしき縛いましめとき放はなち

いと親切しんせつに勞いたはれば

高姫たかひめさまのへらず口ぐち

分わかりきつたる負惜まけをしみ

流石さすがの吾等われらも呆あきれ果はて

暇ひまを呉くれよと掛合かけあへば

高姫たかひめさまは驚おどろいて

萬劫まんごふ末代帳まつだいぢやうきると

おどし文句もんくを竝ならべ立て

ヤツサモツサと嘸いみ合あひ

揚句あげくの果はては四股しこをふみ

肩かたをゆすつてどこへやら

婆ばばの姿すがたを隠かくされた

あゝ惟かむながら神々かむながら

御靈みたま幸さちはひましまして

折角せつかく茲ここまで來きた三人みたり

どうぞ互たがひに睦むつまじう

高砂島たかさこじまに上陸じやうりくし

麻邇まにの寶珠ほうしゆの所在ありかをば

索^{もと}めて聖^{せい}地^ちに恙^{つつ}なく 歸^{かへ}らせ玉^{たま}へ惟^{かむ}神^な
尊^{たふと}き神^{かみ}の御^{おん}前^{まへ}に 常^{つね}彦^{ひこ}、春^{はる}彦^{ひこ}謹^{つつし}みて
畏^{かしこ}み畏^{かしこ}み願^ねぎまつる あゝ惟^{かむ}神^な々々
御^み靈^{たま}幸^{さち}はひましませよ[〃]

と一^{いつ}生^{しやう}懸^{けん}命^{めい}に歌^{うた}ひ乍^{なが}ら舞^まひ狂^{くる}うて居^ゐる。左^さ右^う一^{いち}丈^{ぢやう}計^{けい}りの羽^{はね}を擴^{ひろ}げた信^{あは}天^う翁^{どり}は二^ふ人^{たり}
の頭^{づじやう}上^{かす}を掠^{かす}めて前^{ぜん}後^ご左^{さい}右^うに潔^{いさぎよ}く翱^{かう}翔^{しやう}して居^ゐる。

(大正一一・八・一〇 舊六・一八 松村眞澄録)

第二章 喰^くへぬ女^{をんな}(八二一)

タルチールの船^{せん}長^{ちやう}室^{しつ}には、言^{こと}依^{より}別^{わけ}命^{のみこと}、國^{くに}依^{より}別^{わけ}三^{さん}人^{にん}鼎^{てい}座^ざして、神^{しん}界^{がい}の經^{けい}綸^{りん}談^{だん}に就^つ
いて、熱^{ねつ}心^{しん}に意^い見^{けん}を戦^{たたか}はして居^ゐた。

船長「只今三五教の宣傳使高姫と申す者、甲板上にて、取りとめもなき事を申し
て居りましたが、如何にも教主様の御言葉の通り、執着心の深い偏狭な人物です
なア。何とかして彼を救うてやる譯には参りませぬか。何でもあなた様を非常に
恨み且つ疑ひ、麻邇の寶珠を御兩人が懐中にして、高砂島へ逃げたに違ひないか
ら、どこまでも追つかけて取返さなならぬと、それはそれは大變な逆上方で御座
いましたよ。あなたも良い加減に實を吐いて、あの高姫を安心さしておやりにな
つたら如何でせう」

言依別「麻邇寶珠の替玉事件は全く大神様の御經綸に出でさせられたものであり
まして、吾々としては其一切を高姫に對し、明示することは出来ない事になつて
居ります。又高姫は吾々の申すことは決して信ずる者ではありません。何程誠の
事を言ひ聞かしましても、心の底からひがみ切つて居りますから、到底本當には
致しませぬ。どうも困つたものです」

船長「あなたで可かなければ、國依別様を通してお示しになつたら如何ですか」
言依別「到底物になりませぬ。國依別は随分高姫に對し、幾回となくからかひ、

且つ玉の所在を知らせて失敗をさせた事がありますから、なほなほ聞く道理は御座いませぬ」

船長「其玉は一體如何なつてゐるのですか」

言依「何人にも口外することは出来ないのですが、あなたに限つて他言をして下さらねば申上げませう。如意寶珠の天火水地の寶玉は、自轉倒島の中心地、冠島、沓島に大切に隠してあります。それを高姫が、吾々が持逃したものと思ひ、私の後を追つて此處までやつて來たのでせう。御存じの通り吾々兩人は玉などは一個も所持してはゐませぬでせう」

船長「仰せの通り何も御持ちになつて居られませぬ。一層の事、高姫に直接御會ひになつて、これ此通り、吾々は玉なんか持つてゐない、と御示しになつたら如何でせう」

國依別「それは駄目ですよ。ここに持つてゐなくても、どつかに隠したのだらうと、どこどこ迄も疑つて、尚更手きびしき脅迫を致しますから、自然に氣のつく迄棄てておく方が利益だと思ひます」

言依「吾々兩人が何程誠を申しても、高姫に限つて信用してくれませぬから、あなた、誠に御苦勞をかけますが、高姫をソツと何處かへ御招きなつて、高砂島には決して玉なんか隠してない、自轉倒島を探せよ……と云つて貰つた方が、却て信用するかも知れませぬ。下らぬことに無駄骨折らすも、可哀相でたまりませぬから……實の所は其玉は高姫に探させ今迄の失敗を回復し、天晴れ聖地の神司として恥かしくない様にしてやりたいとの、神素盞鳴大神の思召に依り言依別が持逃げたことに致し、私は犠牲となつて聖地を離れ、これより高砂島、常世國を宣傳し、遂にフサの國ウブスナ山脈の齋苑の館に參り、コーカス山に至る計畫で御座います。どうぞあなたより、高姫に對して、無駄骨を折らない様に能く諭して下さいませぬか」

船長「ハイ、私もあなたより宣傳使の職を命ぜられたる上は、高姫さまに對し、宣傳の初陣を試みませう。もしも不成功に終つたならば、宣傳使を辭職せねばなりませんか」

言依「そんな心配は御無用です。成るも成らぬも惟神ですから、成否を度外に置

いて、一つ掛合つて見て下さい」

船長「ハイ左様ならば、一つ初陣をやつて見ませう」

茲に船長は、高姫を吾一室に招き、私かに高姫に向つて注意を與ふる事とした。

船長は繁忙なる事務を繰合せ、真心より顔色を和げ、言葉もしとやかに高姫に

向つて話しかけた。

船長「高姫さま、先程は、誠に尊き御身の上とも知らず御無禮を致しました。今

更めて御詫をいたします」

高姫「お前は高島丸の船長、それ位なことが氣がつかねばならぬ筈だ。何故に今

迄此日の出神の生宮が分らぬのだらうかと、實は不思議でたまらなかつた。併し

賢明なるお前、滅多に分らぬ筈がないのだが、つまりお前にバラモン教の惡神が

憑依してゐて、あのような下らぬ事を云はしたのですよ。日の出神がチャンと一

目睨んだら能う分つてゐます。流石の曲津神も、日の出神の威勢に恐れて、波を

渡つて逃て了ひよつたのです。今のお前の顔と、最前の顔とは丸で閻魔と地藏程

違つてゐます。あなたも之れから此高姫の教を聞いて、三五教の信者におなりに

なさつたら、益々御神徳が現はれて立派な人格者におなり遊ばし、これから先、高砂島の國王にもなれまいものでも御座いませぬ。同じ一生を暮すなら、船頭になつて、日蔭者で了るよりも、チツとは氣苦勞もあれど、あの廣い高砂島の國王になつて、名を萬世に轟かしなさるが、何程結構ぢや分りますまい」

船長「ハイ有難う、私は御察しの通りバラモン教の信者で御座います」

とワザと空呆けて、言依別命より宣傳使の職名を與へられたことを絶対に包みかくしてゐる。

高姫「バラモン教なんて駄目ですよ。あんな邪教に首を突込んで何になりますか。あなたも立派な十人竝秀れた男と生れ乍ら、その様な教にお這入りなされるとは、チト權衡がとれませぬ。早く三五教にお這入りなさい。キツと御出世が出来ますぞえ」

船長「私は國王なんかにならうとは夢にも思ひませぬ。船長は船長として最善の努力を盡し、吾使命を完全に遂行すれば、これに勝つた喜びはありませぬ、又三五教とか、バラモン教とか云ふやうな雅號に囚はれてゐては、本當の眞理は分り

ますまい。雨霰雪や氷とへだつ共、おつれば同じ谷川の水……とやら、大海は細流を選ばずとか云つて、眞理の光明は左様な區別や雅號に關係なく皎々と輝いて居ります。善とか、悪とか、三五とか、バラモンとかに囚はれて宗派心を極端に發揮してゐる間は、却て其教を狭め、其光を隠し、自ら獅子身中の蟲となるものです。三五教は諸教大統一の大光明だとか聞いて居りました。然るに貴女は世界を輝きわたす三五教の宣傳使の中でも、一粒よりの系統の御身魂而も日の出神さまの生宮であり乍ら、偏狹な宗派心に驅られて他教を研究もせず、只一口に排斥し去らうとなさるのはチツと無謀ではありませぬか。猪を追ふ獵師は山を見ず……井中の蛙大海を知らず……富士へ来て富士を尋ねつ富士詣で……とか云ふ諺の通り、餘り區別された一つの物に熱中すると、誠の本體を掴むことは出来ません。如何がなものでムいませうか。併し私は未だバラモン教の教を全部究めたと云ふのではムいませぬ。未成品的信者の身分を以て、錚々たる宣傳使の貴女に斯様なことを申上ぐるは、恰も釋迦に向つて經文を説き、幼稚園に通ふ凸坊が大學の教頭に向つて教鞭を執る様な矛盾かは存じませぬ。どうぞ不都合な點は宜しく

御諭し下さいまして御訂正を御願ひ致します」

と極めて圓滑に言依別仕込みの雄辨を揮ひ、下から低う出て、高姫の心を改めしめむと努めて居る。

高姫「何とお前さまはお口の達者な方ですなア。丁度三五教にもあなたのようなことを申す、ドハイカラがムいますワイ。其ドハイカラが而も教主となつてゐるのですから、幽玄微妙なる神界の御仕組を、智慧學や理屈で探らうと致すから、何時も細引の禪であちらへ外れ、こちらへ外れ、一つも成就は致しはせぬぞよと、變性男子のお筆に出てをる通り、失敗だらけになつて了らねばなりません。お前もそんな小理屈を云はないやうになつたら、それこそ誠の信者ですよ。ツベコベと善惡の批評をしたり、日の出神の生宮に意見をやるやうな慢神心では、誠の正眞は分りませぬぞえ。智慧と學と理屈と嘘とで固めた世の中の身魂が、變性女子の言依別に映寫して居る様に、お前も人間としては、實に立派なお方だが、神の方から見れば、丸で赤ん坊のやうな事を仰有る。人間の理解力で、如何して神界の眞相が分りますか。妾の様に生れ赤子の【うぶ】の心になつて、神さまの

仰有る通りに致さねば、三五教の一厘の御仕組は到底分りはしませぬぞや」

船長「成程、言依別さまに……ウン……オツとドツコイ言依別さまと云ふ方は、

私の様な理屈言ひで御座いますか。さぞお道の爲にお困りでせうなア」

高姫「さうです共、言依別は有名な新しがりで、ドハイカラで、仕舞の果には大

それた麻邇の玉迄チヨ口まかし、今頃は高砂島で何か一つ謀叛を企んでゐるに違

ひありません。それだから言依別の思惑がチツとでも立たうものなら、それこそ

世界は暗雲になつて了ひ、再び天の岩戸をしめねばなりませんから、日の出神が

活動して、言依別のなす事、一から十迄、百から千まで、茶々を入れて邪魔をし

てやらねば世界の人民が助かりませぬ。ホンにホンに神界の御用位氣の揉めたも

のは御座いませぬワイ」

船長「あなたは日の出神の生宮だと仰有いましたが、世界のことには居乍らにして、

曾富登の神のやうに、天が下のことは悉くお知りで御座いませうなア」

高姫「三千世界のことなら、何なつと聞いて下され。昔の世の初まりの根本の、

大先祖の因縁性來から、先の世のまだ先の世の事から、鏡にかけた様にハツキリ

と知らしてあげませう』

船長『さうすると、貴女の天眼通力で言依別命、國依別のお二方は今何處に御座ると云ふ事は御存じでせうなア』

高姫『ヘン、阿呆らしい事を仰有るな。モツトらしい事を御尋ねなされ。言依別

は今テルの都に、國依別と二人、何か大それた謀叛を企んで、四つの玉を飾り、山子を始めて居りますよ』

船長『あゝ左様で御座いますか。實に日の出神様と云ふお方は偉いお方で御座います。ソナからこれからテルの都へ私を連れて行つて下さいませ。そして、

言依別命様に御會ひ申して、あなたの教を以て御意見を致して見ませう。キット、テルの都に御座るに間違はありませぬなア』

高姫『神の言葉に二言ありませぬ。今日只今の所は、テルの都に居りますが、此船が向うにつく時分には又、向うも歩きますから、テルの都には居りますまい。

こちらが歩く丈、向うも歩きますから、今どこに居ると云つた所で、會ふことは出来ませぬよ』

船長「そんなら神様の御神力で、言依別さまを、テルの都を御立ちなさらぬ様に
守つて頂くことは出来ませぬか」

高姫「その位なことは、屁の御茶でもありませんが、言依別は妾の嫌ひなドハイ
カラでムいますから、どうも妾の靈が感じにくいので気分が悪うてなりませぬか
ら、言依別や國依別に對しては例外と思つて下さいませ。あゝモウ此事は言つて
下さいませ、胸が悪うなつて来ました。オツホ、、、」

船長「あゝそれで分りました。言依別の教主に關する事は御気分が悪くなつて、
身魂がお曇り遊ばし、何事も御分り憎いと仰有るのでせう。實の所は此少し前、
私の船に圖らずも、言依別さま、國依別さまが乗つて下さいまして、仰有るのに
は、實は此通り立派な麻邇の玉を四つ迄聖地から持出して來たが、どうも高姫と
云ふ奴、執念深く附け狙ふので、高砂島へ往つても又追かけて來るだらうから、
ヤツパリ自轉倒島の冠島沓島へ隠しておかうと、慌だしく私の船から他の船へ乗
替へ自轉倒島へ引返されましたよ。キツと其處に隠してあるに違ありません。それ
お前さまも其玉を探す積りならば、高砂島へ御出でになつても駄目ですよ。それ

はそれは美しい、青赤白黄の四つの立派な、喉のかわく様な寶玉でした」

高姫「エ、何と仰有る。言依別にお會ひになりましたか。そして本當に玉を持つてみましたか」

船長「それはそれは立派な物でしたよ。現に此船に乗つてみられたのですもの、

モウ今頃は餘程遠く臺灣島附近を航海して居られるでせう」

高姫暫く首をかたげ、思案にくれてみたが、俄に體をビリビリと振はし、

高姫「船長さま、あなた言依別に幾ら貰ひましたか。コン文ですか」

と五本の指を出して見せる。

船長「言依別さまに別に口止め料を貰ふ必要もなし、只實地目撃した丈の事を、

お前さまに親切上御知らせした迄の事だ。貰うのなら高姫さまから貰ふべきもの

だよ」

高姫は船長の顔を穴のあく程眺め、いやらしき笑を浮かべ乍ら、

「何とマア惡神の仕組は、どこから何處まで、能う行届いたものだなア。言依別が自轉倒島へ歸つたと見せかけ、外の船に乗替へ、キツと高砂島に渡つたに相違

ない、どうも高姫の天眼通には彷彿として見えてゐる。……コレ船頭さま、イ、加減になぶつておきなさい。外の者ならいざ知らず、日の出神の生宮がさう易々とチヨロまかされるものですかいな。そんなアザとい事を仰有ると、人が馬鹿に致しますで、ホ、ホ、ホ、ホ、

と首を肩の中に埋めて、頤をしゃくり乍ら、兩手を垂直に下げ、十本の指をパツと開いて腰を前後に揺り乍ら笑うて見せた。

船長「高姫さま、マアゆるりと貴女の御席へ歸つて休息して下さい。又後程ゆるると御話を承りませう」

高姫は舌を巻出し、目をキヨロツと剥いて、

「ハイ」

と云つた限り、チヨコチヨコ走りに船長室を出でて行く。

(大正一一・八・一〇 舊六・一八 松村眞澄録)

第二章 高砂上陸（八二二）

高姫は大勢の船客の中に只一人、面をふくらし坐つて居たが、餘り氣分がすぐれぬので、再び見晴らしよき甲板に姿を現はした。そこには常彦、春彦の兩人が切りに手をつないで、歌を歌ひ踊り狂うて居る。

高姫は目に角を立て、大きな聲で、

「コレ常公、春公、千騎一騎の此場合、何を氣樂さうにグズグズ踊つて居るのだい。チト確りしなさらぬかい」

常彦「ハイ、何分五六七の世の末迄勘當を受けたり、勘當をした祝に、空散財をやつて居りますのだ。お前さまもそこで一組、品よう踊つて御覽なさい。随分見晴らしのよい此甲板の上で、ソヨソヨ風を受け乍ら踊つてゐるのは素的滅法界面白いですよ。アハ、ハ、ハ、」

春彦「高姫さま、そんな六かしい顔をせず、長い海の上の道中だ。チツとは氣樂になりなさい。苦んでくらすのも、喜んでくらすのも、泣くのも怒るのもヤツ

パリ一日だよ。ヤア面白い面白い、ヤア常彦、サア踊つたり踊つたり
と又もや無茶苦茶に、妙な手つきし乍ら、ステテコ踊を始め出した。高姫は目に
角を立て足ふみならし、

「コレ常公、春公、誰が勘當すると云ひました。決して高姫は申しませぬよ。あ
れはお前に憑依してゐた副守護神が、妾の口を借つてあんな事を云つたのだ。海
洋萬里の航海に杖柱と頼むお前達を勘當して如何なるものか。よう考へて御覽な
さい」

春彦「何と云つても、こつちは荒男の二人連、お前さまは何程強相な事を云つて
も、大體が女だから、心淋しくなつて來たので、又そんな事を云つて舊交を温め
ようとするのだらう。其手には吾々だつて、さう何遍も乗りませぬよ、御生憎さ
ま、

今は他人ぢやホツチツチ 一家になつたらかもてんか
ウントコドツコイ高姫さま ヤットコドツコイ常彦さま

ゴテゴテ云ふと鬼の蕨がお見舞申す

頭のてつぺを春彦さま

ア、ドッコイドッコイドッコイシヨ

と調子に乗つて踊り狂ひ、春彦は甲板をふみはづし、逆まく波にザンブと許り落込んで了つた。常彦は甲板の上を右に左に眞青な顔をして、キリキリと狂ひ廻つた。高姫は、

「コレ常彦、何程キリキリ舞を致しても、此荒波に落ち込んだが最後、到底命は助かりませぬ。諦めなさいよ。それだから、餘り慢心をいたすと、先になりてからジリジリもだえを致し、キリキリ舞ひをして騒いでも後の祭り、そこになりてから何程神を祈りたとして、神はモウ知らぬぞよとお筆に書いてありませうがなア。これを見て御改心なされ。日の出神の生宮に腮をはづきなさるから、こんな目に會うのですよ、サアこれから私に絶対服従をなさるか。お氣に入らねば又春彦の様に神様に取つて放られますよ」

常彦は耳にもかけず、一生懸命に氣をいらち、聲を限りに、

「助けてやつてくれーい」

と叫んで居る。船客の一人は長き綱に板片を括りつけ、春彦の波に漂ひ居る方向つて、ハツシと投げた。春彦は手早く其板に喰ひ付いた。船客は力限りに其綱を引寄せ、漸くにして春彦を船中に救ひ上げた。常彦は大に喜び、直に甲板を下り、春彦を救ひ上げたる船客の側に走り寄り、心の底より涙を流して感謝する。よくよく見れば、其船客は國依別であつた。

常彦「ヤアあなたは國依別さま、よくマア助けてやつて下さいました」

國依別、手を振り乍ら、

「モウチツと小聲で言つて下さい。高姫さまの耳に這入ると困るから……サア春彦をお前に任すから、介抱して上げて呉れ。そして高姫に國依別が此船に乗つてゐると云ふ事は云ふでないぞ」

常彦「決して決して、これ丈御世話になつたあなたの御頼み、首が千切れても秘密を守ります。サア早くあなたの居間へ御隠れ下さい。高姫が下りて来て見つからと、又一悶錯が起りますから……」

國依別は忽々に姿を隠した。そこへ高姫がノソリノソリと現はれ來り、矢庭に春彦の横面を三つ四つ打叩き、

高姫「コリヤ春彦、しつかりせぬか。氣を確かに持て、日の出神の生宮が綱をかけて助けてやったぞよ。モウ大丈夫だ」

春彦は波にさらはれ、半死半生の態になつてゐたが、高姫に擲り付けられて、漸く氣を取直し、

春彦「ヤア高姫さま、ヨウマアお助け下さいました。オウお前は常彦、エライ御世話になりましたなア」

常彦「ナア二、俺が助けたのぢやない。あの國イ……ドツコイ國人が俄に綱を投げて、お前を救つて下さつたのだよ」

春彦「其お方はどこに居られるか、命の親の恩人、御禮を申さねばならぬから、一寸知らして呉れ」

常彦「其方はどつかへ姿を御隠しになつた。キット神様に違ない。神様にお禮を申せば良いのだよ」

高姫「春彦を助けた方は、お姿は見えなくなつただらう。そら其筈よ。日の出神様が人間に姿を現はし、龍宮の乙姫さまが海の底からお手傳ひ遊ばして、高姫の家來だと思つて、春彦を助けて下さつたのだ。甲板の上から此高姫はヂツとして調べて居つた。それに間違ひはあるまいがな。……常彦、それだから、どこまでも此生宮に従うて居りさへすれば、どこへ往つても大安心だと、いつも云うて聞かしてあるぢやないか」

常彦「へん、甘い事を仰有りますワイ。春彦を救いて呉れたのは日の出神ぢや有りませぬぞ。國……國……國治立尊様が御眷屬を使つて救けて下さつたのだ。日の出神の生宮は神の罰が當つたのだからと云つて、袖手傍觀の態を取つてゐ乍ら、日の出神さまさまと龍宮さまがお助け遊ばしたなどと、甘い事仰有いますワイ。自分の悪い事は皆人にぬりつけ、人の手柄は皆自分の手柄にせうと云ふ、抜目のない高姫さまだから、恐れ入ります。アハ、ハ、ハ」

春彦「どちらに助けて貰うたのか、テンと譯が分らぬよになつて來た。兔も角どちらでもよい、助けて呉れた神様に、これからは絶対服従をするのだ」

高姫「日の出神に救はれたのだから、其生宮たる高姫にこれからは唯々諾々として、一言の理屈も言はず、假令水火の中をくぐれと云つても、命の恩人の云ふ事、神妙に聞きなされよ。又慢心して一言でも口答へをするが最後、取つて放かされ
ますで……」

常彦「アハ、ハ、ハ、どこ迄も高姫式だなア。言依別様や、國依別さまが愛想をつかして、聖地を脱け出しなされたのも無理はないワい。本當に我が強い惡垂れ婆ぢやなア」

高姫、常彦の胸倉をグツと取り、

「コラ常、云はしておけば際限もない雑言無禮、モウ了見は致さぬぞや」
と喉をギユウギユウとしめつける。數多の船客は總立となつて……亂暴な婆アも

あるものだ……と呆れて見てゐる。常彦は苦しき聲を絞り乍ら、
常彦「ハ、春彦、タ、ハ、助けて呉れ」

と聲もきれぎれに叫んだ。春彦は矢庭に高姫の兩足をさらへた。高姫はモンドリ打つて、海中にザンブと計り落ち込んだ。

常彦は最前國依別が残しておいた板片に括つた綱を高姫目蒐けてパツと投げた。高姫は手早く板子にすがりついた。春彦、常彦は一生懸命に綱を手ぐり、漸く救ひ上げた。

高姫「ア、日の出神さま、ようマアお助け下さいました。有難う御座います」と手を拍つて拜んでゐる。

常彦「コレコレ高姫さま、日の出神ぢやない、吾々兩人が此綱を投げて、お前の生命を助けたのだよ」

高姫「ソリヤ何と云ふ大それたことを云ふのだい。人間がすると思つてゐると、量見が違ひますぞえ。皆神からさされてをると云ふお筆を何と心得なさる。日の出神さまが臨時にムサ苦しいお前の肉體を使うて御用をさして下さつたのだ。其日の出神様は直に此高姫の肉體へお鎮まり遊ばして御座るから、此高姫の肉の宮を拜みなさい。アア神界の事の分らぬ宣傳使は困つた者だ。何かから何まで實地教育をしてやらねばならぬとは、此の高姫も骨の折れた事だワイ」

常彦、春彦は餘りの事に呆れ果て、兩人口をポカンと開けて、

「アハー」

と頤あごが外はづれるような缺あぐ伸びをしてゐる。

高たか姫ひめ「コレコレそんな大おほきな口くちを開あけると、頤あごが外はづれますぞえ。餘あまりの大おほきなお

仕し組ぐみで、開あいた口くちがすばまらず、頤あごが外はづれたり、逆さか様さまになつて、そこらあたりを

のたくらねばならぬぞよと、變へん性じやう男なん子しのお筆ふでに立り派つぱに書かいてあるだないか、ちと

改かい心しんなされ。神かみ様さまの結けつ構こうな御ご用ようをさせられ乍ながら、高たか姫ひめを助たすけてやつたなぞと、夢ゆめ

にも慢まん神しん心しんを出だしてはなりませぬぞ。罪つみの重おもいお前まへ等ら二ふ人たりが沈しづむ所ところを、此この高たか姫ひめ

の肉にく體たいを神かみが使つかうてまぢなうて下くださつたのぢや。高たか姫ひめを助たすけたのぢやない。つま

り高たか姫ひめの犧ぎ牲せい的てき行かう動どうに依よつて、お前まへ達たちの海うみにおちて死しぬ所ところを助たすけて頂いただいたのだ。

あゝ何なんと、神しん界かいの御お仕し組ぐみは人じん民みんでは見けん當たうの取とれぬものだワイ。サア常つね彦ひこ、春はる彦ひこ、

是これで改かい心しんが出來できたでせう。此この上うへは何なに事ごとも高たか姫ひめの云いふ通とほりにするのですよ」

常つね彦ひこ「ヘン」

春はる彦ひこ「ヒン、馬ば鹿かにしてゐるワイ。俺おれが兩りやう足あしをかつさらへて放ほり込こんでやつたの

だ。餘あまり憎にくらしいから……それに神かみがしたのだなどと、都つが合ふの良よい辨べん解かいして呉くれ

るワイ。斯う云ふ時には高姫さまの御託宣も満更、無用にはならぬ。ハ、ハ、ハ、ハ、
高姫「蛙は口から、とうとう白状しよつたなア。お前が此の生宮の足をさらへて、
海へ投げ込んだのだなア。まてまて、懲しめの爲制敗してやらう」
と又もや胸倉をグツと取り、締めつけようとする。

常彦「オイ高姫さま、日の出神が憑つたぞよ。お前の兩足をさらへて、海の中へ
放り込んでやらうか、それが厭なら、胸倉を放してお詫をしたがよからうぞ」

高姫は此の言葉に驚き、胸倉取つた手を放し、面ふくらし乍ら、又もや甲板さ
して上り行く。船は漸くにしてテルの港に安着した。高姫は衆人を押分け、厚か
ましく、【い】の一番に船を飛び出した。春彦、常彦は稍遅れて上陸した。高姫
は一生懸命にテルの都を指して走り行く。常彦、春彦の兩人は見えつ隠れつ、高
姫の後を追うて行く。

船長のタルチールは副船長たる吾子のテルチルに船を與へ、且つ之を船長とな
し、言依別命、國依別と共に宣傳歌を謠ひ乍ら、高砂島の何處ともなく、進み入
つた。惟神靈幸倍坐世。

跋
暗闇

一、現代の社會は力そのものが物を言ふ。力なきものは立つべき道理も立たず。立つべからざる無理も力あるものには立派に立つ世の中だ。

二、に對して或方面から行つた様な無茶を塵ほどでも行つたとすれば、忽ち惡魔呼ばはりを受け滅茶々に打ち碎かれて了ふであらう。弱者は自ら犯さざる罪をも謝せねばならぬ。強者は自ら犯したる罪をも平氣で押し通すと云ふ現状だ。強者は自ら惡をなしても、之を甘く世間を誤魔化して却て無上の善行とせらるる暗闇の世の中だ。

三、誤解を釋くには他の誤りを正すが第一の善法だ。自己の正しき主張を明白に徹底的に、相手方に合點の行く様に辨明し釋明する事に努力せなくては成らない。

何程誤解されても構はぬ、正しき神は御照覽遊ばすからと、惟神主義を保持して袖手傍觀的態度に出づる者は、自分の無能と無責任とを表白するもので、結局神の國の爲には、卑怯者又は反抗者となるものである。

四、相手方の言ひ放題に何でも彼んでも御無理御尤もと承服するは、決して誤解を釋くの方法に非ず。却て誤解を増大ならしむるものである。相手方の強者になると、此方の讓歩退嬰を以て謙讓の徳とせず、好意と認めず、却て驕慢の心を強め此方の行動を見て、吾輩の臆測した通りだ、さればこそ吾抗議や言論や行爲に對して、直に讓歩したのだと言つて澄まし込んで了ふものである。

五、所謂御無理御尤もの讓歩的態度は、相手方の無理を是認する事となつて了ふ。換言すれば讓歩退嬰は誤解を釋く方法に非ずして却て相手方の誤解を裏書きし、益々その誤解をして増長せしむるものとなるのである。之例ば或る商品に對し、即ち相手方の無暗に値切るに任せて、損をして迄大負に負る時は、相手方の買人は此方の好意に満足するよりも、却て吾が本來掛値を吹き掛けたのを甘く値切つてやつた、然し未だ少し計り高値であつたかも知れぬがなぞと誤解する様なものであ

る。何處やそこい等の立派な方々の中にも、右様の態度を持つる人が十中の十まである様に感じられてならぬ。是も依然難きを避け易きにつかむとする所謂惟神中毒の影像かも知れぬ。

六、他の誤解を釋く必要あるはさることながら、それに益して尤も大切なるは、他を自分から誤解せざることである。又今日の世界の状態に對しては、誤解せない様に努むるのが最も重大なことである。即ち兵家の所謂能く彼を知ることが肝腎である。孔子は人の己を知らざるを患へず。人を知らざるを患ふと言つた通りである。

七、人間の身體内には一方に天國あり、一方に地獄を包藏して居るものだ。要するに人間は天使と惡魔との雜種兒である。現代の人間に於て殊更にこの傾向多きを悟らねばならぬ。故に神示には之を中有人間、又は八衢人間と稱へられて居る。八、世界の状態を正しく解せよ。現代は惡魔横行の世なることを。國際連盟とか云つて、表面から見れば、天國の福音とも見るべき平和條約が結ばれた。併し人類平和の隨喜者、世界泰平の夢想者の希望した程、期待した程、注文したる程に

役に立つもので在らう乎。

九、獅子や虎や、狼が疲勞の結果、休息し眠を貪つて居るとても、決して猫や羊や兔には化するものでない。屹度元氣恢復して眠より醒むる時が来るのは當然である。一時の暴風に逢つて意氣消沈し、拱手傍觀爲す所を知らざる化け虎や、化け獅子や、化け狼がそこの山の麓に、永遠的に蟄伏して居るのを見ると、血湧き肉躍り、只一人焦慮し活躍せざるを得なくなつて來る。

一〇、一難來る毎にその信仰と勇氣を強め、快活に愉快に立働く誠の神國魂の人は、果して幾人あるで在らう乎。

一一、僅かに不斷の活動を繼續して居るものは、飛行將軍を先導に五字の教祖、及び日の出神の生宮と稱する一派のかたがた位なものだ。然し乍ら地方に至つては、それ相應の活動を行つて居る眞人も少しはあるさうだ。之がせめてもの吾慰安となる許りだ。

一二、三五教、無抵抗主義の眞諦を誤解して、如何なる暴逆にも、無理難題にも屈服し、御思召次第だとか、御尤も千萬だとか言つて、極端な無抵抗主義を標榜

するのもしつは考へものだ。

遂には卑劣と、柔弱と、無腸漢の卵とならなければ幸だ。只世間の評判や、新聞の悪評や、其他の壓迫などを氣遣つて、正義の大道を歩むことさへ恐るるに至らば、最早其の人間は駄目だ。製糞器か、立つて歩行く樹木か、拙劣なる蓄音機の様なものである。斯うなれば最早人格も何もあつたものではない。他人の尻馬に乗る許りが人間の勤むべき道では有るまい。

一三、世間の評判や新聞の批評ほど當てにならぬものは無い。評判が良いからと思つて安心して居ると、忽ち背負投げを喰はされるものだ。一昨年以來悪鬼羅刹の權化の如く悪罵され、全国の新聞紙上に曝された東西二人の男女があつた。然しその男女に直接面會し、その思想や行爲や態度を實見したものは、百人が百人まで世評や新聞記事の當にならない而已か、全く正反對の人物たることを肯くで有らう。黒雲に包まれたる大空の月も、仇雲の扉を披ひて其瑞々しい姿を現はす時は、暗黒の地上も直に瑞光燦爛たる神姿を見る事が出来るであらう。(了)

(昭和一〇・六・八 王仁校正)

